

ほむら「ハーレムつくったら全部上手くいく気がしてきた」

ラゼ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

キュウベえがみんなを騙すんだったら……先に私がみんなを誘惑すればいいじゃない。うん、そうしよう。私って可愛いし。

そんなお話。

パソコンがお亡くなりになりましたので、新しいのがくるまでの新作をスマホでポチポチ書いてます。

目次

舞台装置の魔法少女	1
上条君の災難	14
意外と素直な孵卵器	25
ひとりぼっちの最果て	37
楽園（ハーレム）行き覚醒前夜	50
功夫淑女（カンフーレディ）	61
悪夢	73
交わる運命	85
弱い強者と弱い弱者	99
A t o H	112
A B CよりH I J K	126
マジウス	136
U n k n o w n	145
ドツペル・ヴオミット	156

## 舞台装置の魔法少女

少女は長い長い旅をしている。終わりを見据えてはいるけれど、いつ届くのかはまったくもってわからない旅を。終わりを渴望してはいるけれど、進んでいる気がまったくしない旅を。絶対に諦めないと言った少女は、当て所ない旅をずっとずっと続けている。

続けば続く程彼女の心は冷気を帯びて、進めば進む程何か大切な物を落としていった。けれど彼女は諦めない。大切な、本当に大切な友人が、何よりも大切だから彼女は諦めない。

そして、何度目かもわからない世界の果てに……彼女の心は遂に張り裂けてしまった。

——否。はっちゃけてしまった。あまりにも上手くいかない世界に憎しみを滾らせて、そっちがそうであるならこっちもこうしてやる、と。

見滝原の人々を陰から守る魔法少女『巴マミ』は、今日も今日とて魔女と使い魔狩りに励んでいた。人に仇なす化け物を放ってはおけぬと、誰にも感謝されない善行を積んでいるのだ。魔女の多い見滝原の地にて、それでも生き残り続け化物を屠る彼女。戦い続けることを強制される魔法少女の世界において、それは強者の証明であった。〃永く生き抜いてる〃という事実こそが魔法少女としての実力を表しているといつてもいいだろう。

戦い続けなければ死の運命が待ち受ける魔法少女。故にその平均寿命はあまりにも短く、そもそも大人になれた魔法少女がほとんどいないという事実がその過酷さを物語っている。そんな世界において、二年の永きに渡り——それも戦いの頻度が異常に高い街で——生き残る、というのには並大抵のことではない。

しかしそんな彼女も、今日の魔女の手強さには舌を巻いていた。その豊かな経験が齎す直感が、目の前の魔女が大した敵ではないと訴えているにもかかわらず、だ。防御、攻撃、速度、どれをとっても二流だった。しかしいざとどめをさす段になると、奇妙なことに〃一手〃足りなくなるのだ。

偶然も重なれば必然。その違和感の間違いなく目の前の魔女の能

力であると確信し、彼女に警戒を促す。現役最強とも目されるママは、たとえ弱そうに見える魔女であっても油断はしない。魔女には固有の能力を持つものが存在し、それによつては戦況を引つ繰り返されることも経験済みだ。

『強さ』と『能力』は比例しない。どんな弱い魔女にだって、鬼札は存在しうる。そんな心持で戦いを継続していた彼女は――しかしあつけなく敗れた。

敗れ“かけた”。なんてことのない、避けられる筈の攻撃が致命的な一撃に変わる。必中を確信した攻撃があつけなく避けられる。まるで時間が飛んだかのような出来事が時折訪れ、故に彼女はその実力からは考えられない程あつさりと命を散らしかけたのだ。

「――あ…」

もう避けられない。遠目に見えた車が次の瞬間、眼前に現れたかのようなコマの飛び方。わかるのは、おそらく自分はこちらまでだという事実だけ。発した言葉は恐怖の絶叫でもなければ悔しさの叫喚でもない。嘘だ、という混乱だけだ。慢心でも過信でもなく、己は強い。それがこんなにも他愛なく死ぬなんて、と。

「大丈夫よ」

「――え？」

そして諦めがママを襲う、その刹那。彼女は抱きしめられた。幼くして両親を失った経緯もあり、ママは他人の体温をあまり感じたことがない。だからこそしっかりと抱きしめられたその状況に混乱し、攻撃がこないことに戸惑った。

顔をあげれば、そこにいたのは可憐で凛々しい黒髪の少女。自分の背中に手を回し抱きすくめ、片腕に装着した盾で魔女の攻撃を防ぐ魔法少女の姿があつたのだ。

「立てるわね？」

「え……あ、はい……っ、ええ。ありがとう」

おそらくは自分よりも年下の魔法少女。だからこそ僅かながらのプライドが彼女を奮い立たせた。情けなさ、ほんの少しの敵対心。そう、魔法少女は基本的に相容れないものだ。ソウルジェムの穢れを

吸うグリーンフシードにも限りがあり、それを落とす魔女の数にも当然限りがある。下手をしなくとも奪い合いが起こるといふのは、マミの培ってきた経験からすれば当然だった。

しかし助けられたことは事実。グリーンフシードが目当てだということならばマミが死んだ後に魔女を攻撃すればいいだけのことだ。故に彼女は、あつという間に目の前の魔女を撃破した魔法少女に恩を感じていた。

魔女とその結界が揺らぎながら消失し、鋭い針がついた球体がカツンと地面に突き刺さる。紫を基調とした魔法少女は、そのグリーンフシードを拾い上げマミの元に戻った。

背丈はほぼ同じ——マミの方が1、2センチほど高いだろうか。紫の魔法少女……『暁美ほむら』は、マミの側に戻る——そして近くまできてもその歩みを止めない。狼狽える黄色の少女の、その首の後ろに手を潜り込ませる。キスでもしようかという程の接近、接触。更に右手を彼女の頬に添え、数瞬見つめ合った後その手を頭の方に動かした。

手にはグリーンフシード。マミの頭にあるソウルジェムにそれを近づけ、穢れを吸い取ったのだ。

「油断は禁物……百も承知でしょうけれど。それと、ああいう時は体よりもソウルジェムを優先した方がいいわ。グリーンフシードに余裕があるなら、どんな大怪我だっていずれば復活できるもの」

「あ、ありがとう……」

「どういたしまして」

マミのソウルジェムが輝きを取り戻したことを確認し、ほむらはまだ使えそうなグリーンフシードを少女の手に握らせる。そして固まっていた少女は握らされたものの正体に気付いた瞬間、申し訳なさそうにそれを固辞する。

「あ、あなたが倒したんだもの。気持ちは嬉しいけれど、使わせてもらっただけで充分だわ」

「…暁美ほむら」

「えっ？」

「私は『曉美ほむら』。明日から見滝原中学に通うことになるのだけど……『仲間』内でグリーンフィードを共有するのは迷惑かしら」  
「あ——」

いまだ吐息がかかる程の距離で微笑む紫の少女。マミはその笑みと、感じる体温に頬を染めながら自分が満たされていくのを感じていた。誰にも褒められず街を守り、それに時間を取られるせいで友達付き合い合いも希薄。基本的に魔法少女とは仲良くなれない。故に彼女は孤独で、そして寂しがりやであった。

家に帰つても待つ者はいない。人と話している時間と、魔女と戦っている時間。後者が多い日もあるくらいだ。そんな孤独な日々を送っていた彼女にだからこそ、『仲間』という言葉は殊更に甘美に感じられる。信用できるかに関しては——自分が邪魔なら、排除するタイミングはいくらでもあった。それどころかわざわざグリーンフィードを使ってくれた。

その事実だけで十二分だろう。更には自分が苦戦した魔女をいとも容易く滅ぼしたのだ。あらゆる意味でほむらの言葉は彼女に至福を齎した。

「わ、私はバマミー！」

「知ってるわ。見滝原の魔法少女といえば、現役でもトップクラスだつて有名よ」

「…さつきみたいな様で言えたものじゃないけれど、ね」

「それに関しては気にしないことね。少し特殊な魔女だったみたいだし……それに」

「…それに？」

「貴女の魔法は、誰よりも私の魔法と相性が良い」

少し落ち込むマミ。その様子を見たほむらは、彼女の手を握り指を絡ませて固有の能力を発動させた。魔法の強さと能力は比例しない——それに関しては魔法少女として同じことだ。魔法少女の才能という点では相当な下位に位置するほむらだが、彼女の能力そのものは最上位といつてもいいだろう。時間を停止させられる能力など、まさに神の如き御業なのだから。



「——すごい……！」

「そのかわり、ほとんど攻撃能力がないの。さつきみたいに兵器に頼らなければ弱い魔女にも苦戦する」

「それでも充分すぎるじゃない……そっか、遠距離攻撃が得意な私には最高のパートナーってわけね。ええ、任されたわ！ これから私が貴女の矛になる！」

「なら私は貴方の盾になる。安心して。どんな敵にだって指一本触れさせない」

「え……ええ！」

にこりと笑うほむら。彼女は自分が美少女であるということを感じており、たとえ同性であってもそれが魅力的に映ることを理解している。そしてこの笑顔は偽物などではなく、計画の第一歩が成功したことに對する笑みでもある。そう、彼女の『魔法少女掌握計画』の第一歩が、だ。

そして『兵器』という部分にまったく突っ込まないマミもどうかしているが、そこはやはり仲間との出会いが彼女を浮つかせているのだろう。

かくしてほむらのほむらによるほむらのための、自作自演の救出劇は幕を閉じた。そう、彼女の能力があれば気付かれないように戦闘の邪魔をすることなど朝飯前である。



最悪の世界線——それは誰も彼もがほむらを信用せず、あるいは仲間違いし、酷い時には自滅するような世界。幾度も世界を繰り返す彼女であったが、人間関係において上手くいかないということは、実のところ意外と少ない。最後の最後で拗れる、というならばかなりの頻度で存在するが、基本的には性格も性質もよく見知った相手との触れ合いだ。何に不快感を感じ、どういったことをすれば怒り、何をすれば喜ぶのかは熟知しきっている。

故にそつない人間関係を築く程度のことならば容易い。しかし状況がそれを許さない場合、険悪な関係になるのだ。ほむらにとつて優先すべきは『鹿目まどか』という存在だ。彼女を守るためならば、他の全てを犠牲にできる——たとえそれが自分自身であっても。とはいえ鹿目まどかという少女も、こちらはこちらで自己犠牲精神の塊のような性格だ。

恐怖に怯え、時には蹲り立ち止まる、か弱い少女だ。しかし最後には他人の為にあつさり恐怖を、怯えを、躊躇を乗り越えてしまう——否。踏み越えてしまう。だからこそ彼女の周囲全てを気にかけてければならず、時には車に猫が轢かれたなどという理由で魔法少女への道を選択してしまう故に、あまり目を離せない。

そしてまどかが魔法少女になる決断をする最大にして最多の要因。それが『美樹さやか』である。単純一途で向こう見ず、喧嘩っ早く考えてなし。けれど情に厚く、他人を思いやる心が強い少女であった。それは人間社会においてはメリットもデメリットもある、良くも悪くも『どこにでもいるタイプ』といえるだろう。

しかしその性質は魔法少女としては最悪で、悪循環に陥った際はすぐに魔女化してしまうような性格だ。だからこそほむらは彼女をあまり好ましい存在だとは思っていなかったのだが、今回ばかりは気にしないことにしたのだ。誰も彼もがキュウベエの甘言に騙され、誘惑され、破滅する。

——ならもういい。あんな腐った孵卵器に誘惑されるアホ共なら、いつそ私が誘惑してやる。たとえそれが魔法による自作自演の「劇

“であつても。そうはつちやけたのは自然の成り行きであつた。

「危ない！」

「……えっ？ あ——」

「うそ——」

見滝原は新興都市である。『近代的』をコンセプトに、前衛的な創作物や建築物が溢れている。ガラス張りの学び舎や、光ファイバー理論を応用した光る噴水などが代表的な例といえるだろうか。一時の建築ラッシュは過ぎ去つたものの、まだまだ工事や改修事業などがそこかしこに見受けられる。

改装途中のマンションなど珍しくもない。ただしその真下を歩いている女子中学生達に、鉄骨が落ちてくるような不運はそうそうないだろう。しかし今回ばかりは、一人の少女の思惑が絡んだ結果、そんな事故が起こる結果となつた。これにより責任者の首が飛ばないように、精神異常者の悪戯を装うことも忘れない。なるべく人に迷惑をかけないようにという立ち回りは、彼女に残つた少しばかりの良心だ。

鹿目まどかと美樹さやか——彼女達が落下する鉄骨に気づき、しかし回避できないようなタイミングで叫び声をあげる。走馬燈が流れるほどの死の恐怖を味わうだろう、そんな刹那。それを確認した後、時間を止めて近付き、彼女達を抱えるように飛び掛かり時間を解除する。

それがもたらす結果といえば、自分を顧みず他人を助けた美しい少女の完成だ。三人共が倒れこんだ後、彼女はもう一度時間を止める。超重量の鉄の塊が地面に落下したのだから、石の破片が巻き散るのは当然のことだろう。その中でも比較的大きな破片を選び、彼女はそれを自分の後頭部に叩きつけた。

小さな破片で頬にも傷をつけ、“護つた”という印象を殊更に強く植え付ける。普通の日常生活を送る女子中学生が、そんな危機的状況に陥り、あまつさえ血を流して助けてくれた存在のことをどう思うだろうか——ああ、当然ながら初対面としてはこれ以上ない好印象だろう。命の危機を感じることで男女の關係に持ち込める確率が上がる、

有名な実験『吊り橋効果』に近い成果が見込める……この場合それ以上だろうか。

もちろん同性愛の気がない少女達にとってそのまま恋愛感情に発展するような事態にはならないが、そのきつかけ程度になれば充分なる。それがなくとも、命の恩人という事実は、それ以降の人間関係において非常に役立つファクターとなるだろう。

ほむらが今までこういったことをしなかったのは、当然ながらその行動が『卑しい』からこそだ。卑怯で、最低で、クズの所業だからだ。けれど本当にそうなのだろうか。こんなことをした結果、得られるものは『希望的観測』。鹿目まどかも美樹さやかも、巴マミも佐倉杏子も、そして見滝原そのものも救えるかもしれない可能性だけだ。

しかしこんなことでもしなければ、確定するのは『絶対的な事実』。宝物のような少女も、泡と消える人魚姫も、本当は泣き虫の先輩も、寂しがり屋の一匹狼も、みんな死ぬ。そして見滝原は壊滅し、大勢の死者が出る。

——本当にこれは卑怯なのだろうか。

「大丈夫？」

「——あ……え？」

「痛っ……え、と……助けてくれたの？ あ、ありが——ってあんな、血が……！」

「あ……ごめんなさい、制服に血が……」

少女達に微笑み、血を流しながら無事を問いかけるほむら。彼女達へ覆いかぶさった状態でそんなことをすれば、滴る血液が二人を汚すのは当然だ。申し訳なさそうに白いハンカチを取り出し、さやかの制服の首元についた血を拭う。もちろんそんなことで綺麗になるわけがないのは彼女も承知している。

これはパフォーマンスだ。自分の怪我より相手が汚れることを厭ってしまう健気な少女の演出。そしてとどめにふら付いて寄りかかれれば悲劇は幕を閉じる。

「そんなこと気にしてる場合じゃないでしょ!? ああ、もう……血が止まらないよお……誰か——」

「あ、あ——そうだ、救急車……！」

「——暁美さん!？」

人通りの少ない道路。それでも野次馬が少しづつ集まり——待ち合わせの時間通りに現れた魔法少女が、血を流し倒れかけている魔法少女へ駆け寄る。その怪我を見て、事態を把握する前に、そして少女が携帯で救急車を呼ぶ前にほむらへ声をかける。その声の一つ領くと、ほむらはマミのソウルジェムからリボンが現れ、四人を繋いだことを確認して——最後にもう一度だけ時間を止めた。



風見野市。広くもなく狭くもない、そんなこの街を縄張りに行っているのは『佐倉杏子』という少女だ。彼女も経験豊富な、歴戦といつてもいいほどの魔法少女である。固有の能力がとある事情により使用できないにもかかわらず、現役の魔法少女の中でも上位に食い込む実力の持ち主だ。

自分が願った奇跡で家庭が崩壊し、拳句の果てに全てを失った。そんな過去を持ちながらも彼女は強く生きている。それはある種の諦観ともいえ、しかしだからこそ生き続けるための条件をクリアしていない存在だ。感情の振れ幅が大きい人間こそが、もつとも魔法少女に向いていない存在だ。それを考えれば、斜に構えつつ“生きるために生きていく”杏子のような人間こそが魔法少女に相応しいのだろう。

それでも心の奥底では、光に憧れていた。人を助けるために魔法少女を続ける『巴マミ』のような存在に憧れていた。大事なものを失っ

て、自暴自棄になって、それでも親身になってくれた魔法少女の先輩。結局意見の食い違いでその絆を振り払い、今に至る。自分はそんな綺麗事で生きていけないような人間じゃない——そんな風に諦めてはいても、心のどこかでまだ繋がりを求めている。あるいは「弱肉強食」という自分の信条に従って、自分よりも強いであろう彼女を認めているのかもしれない。

——ああ、今日はいくらでもないことを考えてるな。

そんな風に、とあるビルの屋上で満月を見つめる杏子。取り付けられた高い柵を乗り越え、屋上の端に座りこんで足をぶらぶらとさせている。魔法少女にとつてこの程度は危険でもなんでもない。たとえばまかり間違つて転落したとしても、どうにでもなる。もちろんそのまま地面に激突すれば死は免れないが、そんな間抜けをやらかすのは成りたての新人くらいのもだろう。

高所の風に髪を揺らしながら、菓子を口に放り込んで益体もないことを考える。そしてそんな彼女の背後、屋上への入り口から、この場所にまつたくそぐわれない少女が姿を現した。

「…こんばんは」

「…あん？ 誰だよオマエ」

「あなたの『ご主人様』よ」

「はあ？ なに言ってるのさ——っ!？」

その姿を認めた杏子は、服装から見て同業者であることを悟る。縄張り争いにでもきたのかと眉を顰める彼女であったが、次の瞬間驚愕の声をあげる。どこの誰とも知れない魔法少女の足元にドサドサとばら撒かれたのは、億はあろうかという札束と、グリーンフシードの小山だ。いったい何事かと少女を見る杏子。しかしそんな視線はどうでもいいとばかりに、少女は言葉を続けた。

「この世は弱肉強食…それが自然の摂理でしょう？」

「…はん、わかってるじゃんか。それとそれはなんか関係あんの？」

私は弱い肉だから、これで舎弟にしてほしい——なんて顔じゃないよなあ」

「ええ。これはチップよ」

「チップ?」

「掛け金。私が負ければこのお金とグリーンフシードは貴女のもの。貴女が負ければ——向こう一か月間、私のものになりなさい」

「——はっ、正気かよテメえ。金はともかく、その量のグリーンフシード……溜め込むのにどれだけかかった? それとも……勝てると思ってるのか? なあ!」

「…怖いのか?」

「あん?」

「貴女の一ヶ月にはこれだけの価値がある。私にとつてもこれはなくてはならないものだけど……それを賭けるだけの理由がある。強さこそが正義なんて標榜してる貴女が勝負を受けないなんて、想像もしていなかったのだけれど——ごめんなさい、それならいいわ。期待外れもいいところだもの」

「…っ! ——いいぜ、その安い挑発……受けてやるよ。落ちてる金は拾う主義だから——なあ!」

少女が銃を取り出したのを合図に、杏子は槍を構えて突進した。どんな思惑があろうが、どんな裏があろうが、ぶちのめせば終わり。それが彼女にとつての弱肉強食で、たった一つの信条だ。そしてグリーンフシードや金も魅力的なことに違いはないが、一番の目的は『舐めた女』をぶん殴ることだ。自分が勝つことを疑っていない——それが少女の態度から見え見えだったからこそ、勝負を受けた。杏子にとって「面子」はなによりも大切だから。

「そんな盾で受けきれるもんだと思ってるなら……! そのまま死んじまいな!」

自分の速さに反応すらできていない、小さな盾を構える少女。角度自在の槍にかかれば、もはや勝利など疑いもない……そう考えて腕を振りぬいた。振り切つて——そして何の感触もない。いや、感触はあった。自分の後頭部に触れる、冷たい金属の感触が。

「まだやる?」

「…っ! ……いいや、私の負けだ」

まるで世界が自分をおいて進んだかのように、なんの脈絡もない敗

北。それが必然であったかのように事が終わり、杏子はストンとそれを受け入れた。勝負を受けて、そして負けた。ならば勝者に従うのが「筋」で、彼女にとってそれは当然の理屈であった。口惜しさよりも先に受け入れたのは、何一つ『理解』できなかつたからだろう。何をされたかもわからない、何が起こつたのかもわからない。あるいはそれを知りたいから自然と受け入れられたのかもしれない。

もしかしたら——自分を必要だと言つてくれたからなのかもしれない。

懐から何かを取り出して差し出す少女。暗闇の中でもわかるその形は、自分が好きなチョコ菓子。まったくもって似つかわしくない口調で、そして少し皮肉気に少女は言った。

「…食うかい？」

「——ふっ、あははは！ うん、あんた……わかつてるじゃん！」

満月の下、足をぶらぶらとさせてビルの上でお菓子を頬張る魔法少女。数刻前とは異なつて、もう一つ影が増えていた——そんな夜。

ワルプルギスの夜まではまだ少し遠い、そんな夜の出来事であった。



## 上条君の災難

カツ、カツ、カツと廊下を足で叩く音がする。学校指定の靴では鳴りようがない音であったが、本人が持つ鋭い雰囲気がそう聞こえさせるのかもしれない。

教師がまったく必要性の感じられない無駄話に興じるのは、彼女の人生においていったい何回目なのだろうか。目玉焼きの焼き加減の話と時期外れの転校生の紹介、比べるべくもない重要度だ。

しかしだからといって乱入などしてしまえば、いきなり悪印象のスタートになってしまう。だからこそ彼女はいつも通り苛つきながら足を踏み鳴らし、不満を人ではなく物に当てているのだ。

――では！ 転校生の紹介に入ります！

――普通そつちが先だろおー！?

目玉焼きの焼き方であったり、あるいはコーヒー党か紅茶党かであったり、理由は時たま変化する。さやかの突っ込みも時折違いを見せ、敬語であったりなかったり。そんな些細な運命は簡単に変わるけれど、やはり絶望への道は絶対だともいうように頑なだ。

何をやってもどうしようもない。だからこそ、今回はあえて『どうしようもない自分』になってみようというアプローチである。臆病で何もできない自分は随分と前に消えてしまった。そして非情で冷徹な自分でもどうにもならなかった。

じゃあ次は？ オークー、今度は『完璧』になろう。裏でどんな**やま**しいことだってしよう。その代わり……全部を救ってやろう。ちつぽけな自分ではたった一人の友達で手一杯なんだと、そんな言い訳は捨ててあらゆるものを己の掌で踊らせ、そして手中に収める。彼女は――暁美ほむらはそう考えた。

つまり、ときめきホムリアルの始まりであった。

教師に促され、教室へ足を踏み入れる。転校生というだけでも注目されるには充分だが、さらに彼女の美しさも相まって視線が集中する。初めての紹介……一度目の世界から考えると、髪型と眼鏡以外に

容姿の変化はないというのに、不思議なものだ。

しかし必然でもあるのだろう。猫背でおどおどと、そして不安気な少女。対しては胸を張り、意思の強さに溢れた少女。雰囲気というのは、人が抱く印象に対してかなりの比重を持っている。精神的に未熟な者は顔に表れるというが、それはきつと雰囲気込みのものなのだろう。内面の変化が彼女の触れがたい美しさに影響を与えているのは確実であった。

そして教室に約二名、転校生の美しさや珍しさではなく、その存在そのものに驚いている者がいる。言わずと知れた魔法少女予備軍——鹿目まどかと美樹さやかだ。

出会いとは人にとって……特に女性にとってとはひどく運命的なものだ。たとえ偶然でも、あるいは偶然だからこそ、そこに特別な何かを感じてしまう。

故にほむらはこのクラスへの転校を彼女達に説明していなかった。三人の絆が必然で、衝撃的な邂逅は運命だったとでもいうような演出を優先したからだ。

電子黒板へ自分の名前を綴り、生徒達に名乗る。青い髪の少女と桃色の髪の少女へウインクを忘れずに。自己紹介の後はそのまま席へ向かうのがいつもの行動であったが、さやかの性格を考えるときつと——

「ほ、ほ、ほむら!?! なんでここに!?!」

「転校してきたから……以外に理由があるとは思えないのだけれど」

「そ、そりゃそうか……ってわかってたんなら言っとけえーい!」

「同じクラスになるかはわからないもの」

「そ、そうだけどさー……」

——ああ、こうなるだろうなとほむらは微笑んだ。たった一人の少女のことだけをひたすら考えていた今までは、言ってしまうえば視野狭窄だったのだろう。煩わしい雑音にしか聞こえていなかったさやかの声も、違う視点で聴いてみれば心地いい。

空回りはしていたけれど、いつだって必死だった。実らないと知っているから無様に感じていたけれど、それを嘲ることの方がどれだけ

滑稽だったのだろう。走り続ければいつかは辿り着くと、他ならぬ自分こそがそれを目指していたのに。

自分の席へ向かう途中、座っているさやか隣の隣で立ち止まる。いまだ混乱冷めやらぬといった風の彼女に、ほむらは謝罪の意味も込めてーおもむろに抱きついた。

「お、おおーう!? なな、なにになになに!?」

「…ああ、ごめんなさい。こっちの国ではハグは一般的じゃなかったわね」

「ふおお…インターナショナルな文化が遂にさやかちゃんにも…ってほむら、海外で暮らしてたの?」

「ええ。小さい頃、少しだけ群馬でね」

「へえー…って日本だよそれ!」

「そうだったかしら」

少しばかり顔を赤らめながらも、ノリと突っ込みを忘れないさやか。そしてそんな二人の様子を見て、暴走する少女がもう一人。

「あ、ああ…そんな、さやかさん…!」

「ど、どしたの仁美?」

「まどかさんというお嫁さんがいながら…不潔ですわああー!!」

「ちよつと待てえーい!! いや、ほんとに待って仁美いー!? 今から授業だよ!」 どこいくのさ! …あー…行っちゃった…」

「面白い娘ね」

「普段はおしとやかなんだけどねえ…」

両手で顔を覆いながら教室の外へ走り出ていった少女『志筑仁美』。さやかしづきひとみの恋愛において常に障害となるお嬢様であり、妄想の激しい猪突猛進ガールでもあった。さやかとまどかのじゃれあいを見て、邪よこしまな想像を膨らませることもしばしばだ。

「あ、あの! ほむらちゃん!」

「どうしたの? まどか」

「え、えつと…その」

「…ふふ。これからよろしくねーまどか」

「うえひゃあ!? あ、あう…はい…」

「群馬って進んでるんだあ…」

さやかと同じようにまどかにもハグをして、自分の席へつくほむら。自分達にも群馬流の挨拶をしてくれないだろうかという、男子生徒の熱い視線を無視して授業の用意を始める。取り敢えずは上々の始まり方だな、と口元を緩ませるのであった。



魔法少女曉美ほむらの目指すところはなんなのか。それに関して、今までは鹿目まどかの救済だけを考えていた。しかし今回ばかりは全てを救うと決めたのだ。引いては魔法少女と、その才能を持つ者達の信頼を勝ち取ることが、勝利に繋がる。

しかし友人や仲間といった括りでは限界があった。じゃあもう恋人や愛人でいいじゃない、というのが彼女の出した結論だ。実際問題、恋愛感情というものは何よりも強い『鎖』だ。落ちてしまえば何よりも固い絆となる。

翻って、各人の恋愛模様はどうだろう。鹿目まどかは今のところ『恋に憧れる少女』だ。特定の相手にそういった感情を抱いてはおらず、きっかけがあれば女性に心が傾くこともあるだろう。

巴マミはそもそも恋愛に現<sup>うつ</sup>を抜かず暇がない。一人暮らしというのはやる事が多く、それに加え学業も疎かにはできず、更には魔女や使い魔の搜索と討伐がそこに追加される。恋愛どころか友人関係すら希薄なありさまだ。故に孤独感を埋めるための何かに飢えており、そこに男女の区別はない。

思春期真っ只中に両親を亡くしたせいか、お姉さん気質でありなが

ら他人に母性や父性を望んでいる節すらある。つまりー非常にチヨロい人であった。間違はなくヒモを育てる才能があるだろう。一度依存の対象を見つければ、あとは崖を転がり落ちるように気持ちが傾く筈だ。

佐倉杏子は見た目と裏腹に『世話焼き』だ。弱者は食い物であると嘯うそぶいているが、実のところ典型的弱者に頼られればかなり弱い性格をしている。そして彼女もやはり寂しがりやで、一度懐に入ってしまったら心の内に入るのは難しくない。

とはいえそこに至るまでが非常に難易度の高い人物であることも確かだ。故にほむらは過程をすっ飛ばして、形から入ることにした。それが先日ビルの屋上で的一幕である。

そして恋愛面においてはずば抜けて面倒な存在ーそれが美樹さやかだ。何しろ既に想いを寄せている男性が、しかも幼なじみという筋金入りの設定で存在するのだ。普通であれば攻略の糸口さえ掴めない、難易度のワルプルギス級の相手であった。

その上ほむらは『全員が救われる道』を選んだのだ。さやかが悲恋に絶望しているところにつけこんで、歪んだ愛でがんじがらめにするつもりなど毛頭ない。

ならばどうするか。『恋愛が実らない』という結果において、一番傷つかない過程とはなんだろう。

ーそれは『冷める』ことだ。『想いが届かなかった』のではなく、対象が『惚れるような人ではなかった』となれば、大した傷もなく恋愛を終えるだろう。

恋は盲目とよくいうものだ。だからほむらは、磨りガラス越しのさやかさやかの視界を変えてみせた。ただし磨りガラスどころか、ステンドグラス越しほどの分厚い視界に、ではあったが。

「にしてもさ、ほむらー。ほんとに着いてくるの？ 休学中のクラスメイトなんて、いっちゃえば赤の他人だよ？」

「そうね……でも挨拶というのは大事よ。赤の他人だからこそ、礼を尽くすの」

「ぬう…」

「心配しなくても、誰もとったりしないわ」

「なにやつ！ なな、なんのこと!？」

「わかりやすい」

「うう……たはは、敵わないなあ……」

学校帰り、事故で入院中の幼なじみのお見舞いへ向かうさやか。彼女がその幼なじみへ懸想していることは、クラスメイトのほとんどが知っているほどわかりやすい。知らぬは当人ばかりなり、といったところだ。

そんな彼女へ随伴するというのは、ある意味無料ととられる行動だろう。しかしこれから起こる騒動にあたって、その直後のフォロースが重要なのだ。騙くらかすように申し訳なく思うほむらであったが、どのみちほぼ実らぬ恋だ。ありとあらゆる世界を巡って、ただの一つも成功したことがない恋を、せめて優しく介錯するのは傲慢だろうか。

己のように『成功を引くまで』やり直し続けられるのならともかく、たった一回で「ほぼゼロ%」を成功させろというのは無茶な話だ。そもそも幼なじみの方にそういった感情がなく、更には恋愛面よりも音楽の方に全霊を砕いているのだ。失敗も無理からぬ話だろう。

「うー、でもほむらみたいなのがお見舞いにきたらさあ……恭介が惚れちゃわないか心配だ……」

「あら、そんなことないでしょう？ 私よりも貴女の方が可愛いもの」  
「鏡見て言えよう！」

「…自分を過小評価しすぎよ、さやか。もし私が貴女みたいな娘に想いを寄せられていたら、絶対に放っておかないのに……」

「う、うええ……？ やだな、照れるじゃんか……」

「嘘偽りのない本音よ」

「ぬあー！ くすぐりたい！ ほらほら、行くよほむら！ もうすぐそこだー！」

容姿を誉められ慣れていないさやかは、赤面しながら小走りになる。そんなところが本当に可愛いな、とほむらは微笑んだ。

大きな病院が視界に入り、鞆に隠している「グッズ」を意識する。

さやかは幼なじみ——上条恭介には悪いことをするな、と顔を臥せるが、しかし間接的とはいえ随分と苦しめられてきた相手だ。彼がさやかを受け入れれば、これほど長い旅路にはならなかっただろう。

逆恨みには違いないが、感情というのはどうしようもない。それに被害は最小限に留める予定だ。世界平和のために『少し恥ずかしい思い』をしてもらうだけなのだから我慢してくれ、とほむらはため息をついた。

「とうちやーく！ 入るよ恭介ー」

「…お邪魔します」

——ここだ！ とほむらは時間停止を発動させる。開きかけている扉の隙間から部屋に入り、相手を確認する。裕福な家庭だけあって完全個室だ。物憂げにCDを聞き耽っている様子は、なるほど複数の女子に懸想されるのも納得の外見だ。

そんな彼の様子など気にしないとばかりに、ほむらはまず掛け布団をひっぺがした。続いてズボンと下着をおろし、中学生にしては立派な象さんに新鮮な空気を触れさせてやる。

口元に手を当て、頬に赤みが差すほむら。実物を見たのはこれが初めてなのだろう。つんつんと興味深げに触れたあと、頭をふって作業に立ち返る。

聞いているCDの音源を別のものに差し替える。そしてベッドの上にゲイ雑誌の、特にエグいページをこれでもかとばら蒔いた。ついでに極太パイプやローターを尻の付近に置き、最後に彼の右手を象さんに添えてやる。

イヤホンを抜けば、これで完成だ。上条恭介ホモ作戦……これがほむらの出した答えである。彼が幼なじみを振ったり、もしくはその親友と付き合い始めると、崩壊の序章が始まる。

しかし好きな人が『同性愛者』だった場合はどうだろう。恐らくは大抵の人が『仕方ない』と思う筈だ。もはや前提条件がどうしようもないのだから、恋心もへったくれもないというものだ。それに『ホモが嫌いな女子はいない』という至言もある。きつとさやかも失恋を受け入れ、上条×中沢などといった関係を応援する側に回る事が出

来るだろう。

そう確信し、ほむらはなに食わぬ顔で元の位置に戻り、時間停止を解除した。

「来てやったぞー、恭介。さやかちゃんだけだと思った？　なんと今日は美少女もつれてきてやつ……た……ぞ、え……？」

響く（男同士の）嬌声。下半身丸出しでゲイ雑誌を広げ、右手を息子に添え、変な液体がついたジョークグッズを傍らに置く幼なじみ。尻すぼみに声が消えていくのは当然の話だろう。

「やあ、さやか。どうつーうわあ!?!　な、なんつ……!?!」

「い……」

「ちがつ……!　違うんださやか!　これは……!　い、いったいなにが……!?!」

「いやぁー……!!」

脱兎の如く駆け出すさやか。思春期の少女からすれば、ショック極まりない場面だ……それも仕方ないだろう。わたたとズボンを上げてCDプレイヤーのスイッチを切る恭介。その姿に両手を合わせながら、ほむらはさやかを追いかけるのであった。



ドク、ドク、ドクと心臓が悲鳴をあげている。全速力で走ったせいでもあるし、想い人のオットセイを目撃したせいでもあるし、その想い人が違う世界の人だったという混乱のせいでもあるのだろう。元より裕福で才能ある幼なじみは違う世界の人ではあったが、今回のそれは意味合いがまったく違う。

病院の裏手にあるこぎつぱりとした中庭のベンチに座り、動悸を抑



えるさやか。まさにどうすればいいのかわからない、といった風だ。失恋ともなれば落ち込んで然るべきなのだろうが、今はおちんこでた場面のせいでそれどころではなかった。

そんな彼女の前に、ようやく追い付いたほむらが姿を現す。項垂れるさやかの横に腰をおろし、然り気無く手を握った。

「…大丈夫？」

「う、うん……あはは、その、なんかごめんっていうか……」

「何故あなたが謝るの？」

「いやあ、私がお見舞いに行くなんて言わなきゃ……その、あんなの見ずに済んだのに、ってさ……」

「男の子だもの。女と違って物理的に溜まるものがあるんだから、仕方ない部分もあるんじゃないかしら？　そもそも着いていくといったのは私よ。責任を感じられても困るわ」

「で、でも……！　男だよ！　あんな趣味だったなんて……ああ、そっか。女の子に全然興味なさそうだったのって……そういうことかあ……はは……」

「…」

しゅんとするさやかを見てーああ、やっぱりまだマシだな、とほむらは目を細めた。振られたり、仁美と恭介が仲睦まじく歩いている様子を見てしまった際は、比べ物にならないほどシヨックが少ない。

ならばまあー酷いやり方ではあったが、間違いではないのだろう。あとは慰めつつ、恭介に対するフォローを入れるだけだ。このままでは恋愛どころか、友人関係にすら輝がはいってしまったままだろう。それはできるだけ避けたいというのがほむらの本音だ。

こちらに視線を向けないさやかに対し、首もとに腕を引っ搔けて、無理やりこちらへ引き倒す。ようは『膝枕』の状態だ。体格も力もさやかの方が大きいため、少しだけ腕に魔力を通す。

「ちよ、ちよちよっ!?　ほむら!?!」

「ごうでもしないと目を合わせてくれないもの」

「い、いや、だからって…」

「今……上条君のこと、どう思ってるの?」

「…っ!」

視線をそらさず、しっかりと見つめて問い掛けるほむら。その問いに、瞳をぐらつかせるさやか。彼女もいきなりすぎてどうすればいいのか、自分がどう思っているのかすらわからないのだろう。

「もう、自分でもよくわかんないよ…」

「そう……じゃあ質問を変えるわね。上条君のこと、嫌いになった?」

「…ううん」

「今まで彼を好きだったことを後悔してる?」

「…ううん、してない」

「なら……貴女の愛はきつと誠実だった。恋は憎しみに変わるけれど、愛はそうじゃない……さやか、貴女は彼が男しか愛せないことを受け入れられる? 祝福できる?」

「…」

「彼のどこが好きだったの?」

「…バイオリン。小さい頃あいつが、恭介が弾くバイオリンの音色を聞いた時……すごく感動したの。こんなに人の心を震わせられる人がいるんだ、って」

「彼が男を好きでも、その感動は薄れていないのね?」

「…うん」

次第に力強い目を取り戻し始めるさやかに、優しく微笑みながら頭を撫でるほむら。思えば、恋話などただの一度もしたことがなかった。それで彼女のことを把握しているなどと、よくいったものだとは自嘲する。

「…そうだ。私、あいつのバイオリンを弾く姿が好きなんだ。そう、そうだよ……恭介がどんな性癖でも、大丈夫だよ。綺麗な音色を聞けるだけで……私は満足だから!」

「…ええ」

「その……ありがとね、ほむら。一人で行ってたら、ずっとどうしようじ悩んでたかも」

「どういたしまして」

「ところでですね。そろそろ恥ずかしいんですけど…」

「感謝してくれてるんでしょう？ 私はもう少しこうしていたいわ」

「うー…」

ずっとずっと、膝の上で愛おしそうにさやかかの頭を撫で続けるほむら。彼女達以外に人がいない訳もなく、時折微笑ましそうに視線が行き交っている。

「あのさ、もしかしてほむらも同せ…」

「ん？」

「あう…：や、やつぱなんでもないっ！」

「ふふ、変なさやか」

「ううう…」

真つ赤になりながらふて寝するさやかと、満足そうにそれを見つめるほむら。爽やかな風がふわりと中庭を通りすぎ、二人の体温を優しく冷ましていった。

## 意外と素直な孵卵器

もう数えるのも億劫になるほどの遡行の果て。ワルプルギスの夜まであと一ヶ月となる、時間遡行のその初日。彼女は自室で思考に耽っていた。今まで救えなかったかけがえのない友達の言葉を、何度も何度も反芻する。

――それでも私は魔法少女だから。この街を救いたい。

――キユウベえに騙される前の、馬鹿な私を助けてあげてくれないかなあ。

――私、それでも魔法少女になる。魔女になるって解ってても。

――ほむらちゃんは強いね。私もそんな風になれたらなあ。

――誰かに頼られるって、ほんとに嬉しいなって。

――変態！ 変態！ 変態！

笑っている少女。泣いている少女。儂げな少女。力強い少女。世界によって様々で、けれど全てが大事であって――混ざりあって、溶け込んで、体を満たす。

ほむらは目を開けて、両手で頬を叩いた。自分で自分を叱咤する、鼓舞する。眼鏡を外したただけでは届かない。髪をほどいたところで救えない。だから強く強く念じた。

彼女は今から舞台役者。誰もが羨むスーパースター。救われるべき者を当然のように救い、悪者には鉄槌をくだす。けれど卑怯な手だつて使う、ちよつぴり物騒なダークヒロイン。

二枚舌の宇宙人が相手なら、彼女の舌は三枚にも四枚にも増えている。最初に憧れた魔法少女のように、太陽みたいにはなれないけれど、白鳥を目指してみよう。水面下では必死に足をバタつかせるけれど、優雅に辿り着いてみせよう。

――ほむらはそう誓った。

その夜。ほむらはいつも通り、所定の場所に出る魔女を狩っていた。もはや作業と化したその戦いも、心機一転してみれば清々しいものだ。カツンと落ちたグリーンシールドを盾にしまい、ストックを増やす。

ワルプルギスの夜クラスの魔女であればともかく、雑魚といってもいいレベルの敵であれば、彼女はほとんど魔力を消費しない。火力を重火器頼りにしている都合上、攻撃に魔力をほとんど割かないからだ。銃弾に纏わせる程度であれば、直接魔力で攻撃するよりも遥かに燃費がいい。行動パターンも完全に把握している以上、時間停止すら必要がない。

魔女の結界が崩れ、景色が歪み始める。そろそろか、とほむらは色んなものを飲み込んで、笑顔をつくった。憎しみも、悔しさも、悲しさも、全てを飲み込んで、待ち受けるのは全ての元凶だ。

インキュベーター……通称『キュウベえ』。いたいけな少女を地獄の道に引きずり込む、白い悪魔だ。大きい視点でいえば宇宙の救世主なのかもしれないが、少なくとも感情ある生物から見れば最悪の侵略者に違いない。

けれど彼女はもう気にしないことにした。というよりも、合理的にいくことにした。感情がないと自称するキュウベえ相手に、怒りを向けることの愚かしさに気付いたのだ。

ゲームで理不尽な負けかたをしたからといって、コントローラーに当たり散らす人間は馬鹿だ。クレイゲームで景品を取れなかったからといって、ガラスを叩く人間は馬鹿だ。

それと一緒に、キュウベえは性能が高い電化製品なのだ。基本的に

決まり事は破らない、叩けば直る(復活する)、量産品の消耗品。それに感情を乱すこと自体、不毛としか言いようがないだろう。

故にほむらは覚悟を決めた。これからの日々は、基本的に逆張り予定だ。今まで蔑ろないがしにしてきた人達に愛を振り撒いていく心算だ。

ならばキュウベえは？ その答えはー

「あら、遅かったわねキュウベえ」

「僕は僕を必要としている魔法少女のところに現れるからね。手持ちのグリーンシードはまだ使えるみたいだし、君にとってはまだ会う必要がなかったんじゃないかな」

「そうね……ならどうして会いにきたの？」

「それは君の方が知っていそうだけど……言葉にした方がいいかい？」

「ええ。是非」

「うん、それじゃあ聞くよ。君はいったい何者なんだい？ 契約した覚えのない魔法少女なんてものは、ありえない筈なんだ。だけど現実には君はいる」

こてんと首を傾げて問うキュウベえ。中身を知っていれば、あざとさというよりも不気味さを感じるだろう。彼はー「彼等」は、少女が受け入れやすい姿形や仕草を研究して実践しているだけだ。そこに一切の愛嬌はない。

しかしほむらは意に介さず、キュウベえを抱き上げて歩きだした。目指すは我が家。別に人に聞かれなければどこだって構わない。しかし己の本拠地ホトムの方が安らぐのは確かであり、これから彼を騙くらす都合上、少しでもリラックスできる方がいいと判断してのことだ。

「どこへ行くんだい？」

「私の家よ。少し長くなりそうだから」

「別にさっきの場所でもよかったんじゃないかな。人が通ることもないだろうし」

「駄目よ。全然駄目だわ、キュウベえ。ママからよく言われてるでしょう？ 男の子なら女をエスコートしなさいって。あんな埃臭いところで女の子とお喋りしようなんて、キュウベえ失格だわ」

「訳がわからないよ……それにママのことを知っているのかい？」

腕の中のキュウベえを弄くり倒す。銃殺、爆殺、斬殺とかなりのパターンを体験してきたほむらであったが、そういえば間近で観察したことはなかったな、と好き放題に弄りだす。謎の耳毛に謎のリング。無機質な目をつつき、グリーンフィードが放り込まれる穴の部分を押したりへこましたりと好き勝手だ。

「その行動にはなにか意味があるのかい？」

「そうね……強いて言うなら『意味がないことに意味がある』といったところかしら」

「どういう意味だい？」

「つまるところ……」

「うん」

「意味はないわね」

「そうなんだ……なら何故そんなことを？」

「ふふっ……質問ばかり」

「なぜ笑うんだい？」

「それが解れば貴方も魔法少女ーいえ、魔法キュウベえになれるでしょうね」

キュウベえをからかいながら帰路につくほむら。出来の悪いAIかのような質問攻めに苦笑する。疑問を知りたいというのは感情ではないのだろうか。それともその答えを知識に組み込むことで、より少女達の勧誘を成功させやすくするつもりだろうか。そんな益体もないことを考えながら、家の扉を開けた。

「素敵な部屋だね」

「それ、誰にでも言ってるんでしよう？」

「そんなことはないさ」

「嘘よ」

「嘘じゃないよ」

「じゃあ証明して。私の部屋を愛してるって……！」

「いや、愛してはいないけど……」

「知ってるわ」

キュウベえをからかう、というのはほむらにとって今までにない体験だ。意外とそんなところから突破口が見えたりするんじゃないかと、会話を続ける。そして彼女が改めて感じたことは、何度もやり直しているというのに、知らないことが非常に多いという点だ。

どこもかしこも柔らかさが一定だったり、耳毛を上げてても穴がなかったり、謎のリングを取り上げるとほんの少し不快そうにしたり、尻尾の付け根を強く押すと『きゅっぷい』と声が出たりと、間違いく不思議生物だ。

「そろそろ話をきゅっぷい、始めきゅっぷい、てくれないかな。ここまでぞんざいに扱われきゅっぷい、たのはっぷい、久しぶりきゅっぷいだよ。きゅっぷい」

「ふふっ」

「きゅっきゅきゅきゅっきゅっききききゅっきゅきゅっぷきゅっぷいきゅっぷいきゅっきゅきゅっきゅきゅっぷい」

「ふふっ……！」

「僕で遊ぶのはやめてくれないかな！」

「あら、怒ったの？　もしかしてキュウベえ……怒ったのかしら？　おめでとう、きつと貴方ならエントロピーも凌駕できるに違いないわ」

「怒ってないよ。僕に感情といった類いのものはないからね。そういった発言が出るってことは、君もそれを知ってるんだろう？」

「すごい早口になったわね」

「そんなことはないさ」

本題に入りたがるキュウベえを無視して、モルモットにし続けるほむら。いつもいつも逃げられていただけに、とても新鮮な感覚なのだろう。なによりこの口達者な孵卵器に対し、会話で主導権を握ったのは初めてのことだ。それだけでも進歩といえるだろう。

「そろそろ本題に入りたいのだけれど」

「うん。それは僕のセリフだよ」

「かもしれないわね。じゃあ……質問形式にしましょうか。何が知りたいの？　キュウベえ。男が女の子へ質問する時は紳士的に、よ」



「うん、それじゃあまずは名前からお願いしようかな……おっと、僕の名前はキュウベえだよ」

「ふふ。そうね、紳士たるものまずは自分から名乗るべきよね。そして名乗られたのなら返しましょうー私の名前は『曉美ほむら』」

「ありがとう。それでほむら、一番聞きたいのはー」

「バッド。許可してもないのに下の名前で呼ぶなんて、チャラ男かホストか勘助の類よ」

「…それは失礼したね。それで、曉美ほむら。聞きたいことなんだけどー」

「そんな他人行儀なんて、悲しいわキュウベえ」

「どうしろっていうのさー!」

「あら…? 貴方、感情が…?」

「ないよ。僕に感情なんてもの、あるわけないじゃないか」

率直にあって、面白い。ほむらはそう感じた。最初からこっちの路線で攻めた方がよかつたんじゃないかという面白さだ。かなり昔、耳にした情報ー『僕達にとつて感情というのは、稀に起こる精神疾患のようなものだ』という発言は、実のところとても重要だったのではないだろうか、ほむらはそう考える。

感情無い生物が感情の獲得に奔走し、失敗したのは必然だ。理解できないものを、そして現物すらないのに得ることなどできはしない。感情が欲しいなら、感情ある生物から、前提を理解された上でアプローチの必要があるのかもしれない。

稀に起こる精神疾患とはつまりー今のほむらのような『いい性格』をした感情ある生物に、からかわれ続けた結果なのではないだろうか。

「そろそろ真面目に話をしましょう」

「…とても建設的な提案だね。それでほむら、君はどうやって魔法少女になったんだい? 僕達が関わらない魔法少女契約というのは聞いたことがない……とても不思議なんだ」

「そんなことないわ。私は貴方達に頼まれて魔法少女になったんだから」

「…？ どういう意味かな」

「鹿目まどか」

「…彼女が関係しているのかい？ あの信じられない因果の量を持つ少女が」

「そう。結果としていうなら、貴方達は誘蛾灯に引き寄せられた羽虫だったのでしょうね」

「…？」

「あの娘が魔法少女になり、魔女になった際、この星のノルマを越える量のエネルギーが得られる…：…そうでしょう？」

「うん、間違いないね」

きよとんとした風に耳を傾けるキュウベえ。それは魔法少女の真実を知っているというのに敵意の欠片もない珍しい存在への興味でもあり、自分達ですら最近気付いたばかりの、とてつもない因果量を持つ少女を知っているという情報への疑念でもあった。

「あの娘が魔女になればどうなるか、試算はできているの？」

「ある程度はね。ただ僕達も感情エネルギーというものに対して、完全に理解できているわけじゃないんだ。ソウルジェムが濁りきった際の感情の質、そして振幅によってどんな魔女になるかも変化する。一つ言えるとするならー最低でも地球という星は滅ぶだろうね」

「はあ…：…甘すぎるわ。スイートキュウベえと言ってもいい」

「訳がわからないよ」

大袈裟にため息をつき、肩を竦めて首を振る。まるで洋画のようなわざとらしさだが、キュウベえは感情の機微が理解できないからこそキュウベえ足り得るのだ。むしろ解りやすい感情表現の方が、彼等としても同じく解りやすいだろう。

「ちゃんと理解できていないエネルギーを扱う危険性…：…知らないということはないでしょう？ 貴方達から見れば、危険と知っていてなお原子力を扱っている人間達はどう映っているの？」

「それは心外だなあ。僕達に感情がないから完全に理解できていないだけであって、数千年にわたるノウハウはちゃんとあるさ。安全性に

問題はないよ」

「…そんなことだからああなるのよ」

「どうなるっていうんだい？」

唇を舌で湿らせて、突拍子もない大嘘を並べ立てる。彼等に対して詐術を持ち入るなどと、普通に考えれば正気の沙汰ではない。しかし案外と盲点ではないだろうか、というのがほむらの見解だ。

人間のことは知り尽くしているだろう。人間が嘘をつくということも知っているだろう。しかし彼等が嘘に対して被害を被ったことは、実のところ少ないのではないだろうか。彼等はその技術力をもつて多角的に判断できる。故にそうそう騙されることなどないだろうし、そもそも欲というものがほとんどない。嘘の必要性自体、今一つ理解できていない可能性すらある。

ならば検証不可能なほむらの言に惑わされる確率は、けして低くないだろう。ある程度の真実、そして彼等しか知り得ない筈の情報を引き合いに出せば、信憑性も高まるというものだ。

「まどかの魔女…：貴方達が名付けた《クリームヒルト・グレートヒエン》…：それがもたらした被害。聞いてみる？」

「…やっど解ったよ、ほむら。君は未来から来たんだね。それなら僕達に契約の覚えがないのも説明がつく」

「ええ、その通りよ」

「話を続けてくれるかい？」

「もちろん。そのために私は過去に戻ったんだもの…：貴方達に頼まれてね」

ヒントを散りばめて、聞く側に推測させる。それが嘘を真実に近付ける手っ取り早い方法だ。ただただ情報を垂れ流すだけでは疑念が鎌首をもたげてしまうーとはいえ感情のない彼等にそれがどれだけ通用するかは未知数だ。やって損はない、程度の話術だろう。

「貴方達が延々と、永い時間をかけて増やしてきたエネルギー…：宇宙の熱量の総和。その数%にもなるエネルギー量を持った魔法少女が魔女になる時、どうなるか…：本当に解らなかつたの？」

「…どうなつたんだい？」

「貴方達が増やしてきたと思いい込んでいた熱量……その全てを飲み込んで、最悪の魔女と化したわ。それが偶然なのか必然なのかは解らない。言えることはただ一つ。貴方達の技術力をもってすら、無数に広がる宇宙の種族への被害を止めることは出来なかった。覆したエントロピーは、それ以上の損失をもって大災害となった」

「それは……本当なのかい？」

「わざわざ過去に戻ってまで嘘をつく必要性があるのかしら。もう一つ言うなら、私は『手段の一つ』に過ぎない。貴方達が講じたいくつもの『対抗策』……その一つとして、送り込まれたにすぎないわ。もしかしたら私が過去に渡った後、解決手段を見いだして平和になった可能性だってある」

「…」

「それでも私は役目を果たさなくちゃね。キュウベえ……いえ、インキュベーター」。『鹿目まどかには手をだすな。彼女がその寿命を終えるまで見届けることが、破滅への回避手段となる』——確かに伝えたわよ」

「…」

無機質な瞳がほむらを見据える。あるいはそこにほむらは写っておらず、仲間、もしくは彼を創ったという「大元」へ報告中なのかもしれない。たつぷり数分ほど沈黙した後、彼は口を開いた。

「なにか証明できるものはあるかい？」

「無いわね。そもそも地球が滅びかけていた上、魔法少女になれる素質を持ったものが私以外にいないほど切羽詰まっていたもの。私自身がちやんと説明できるほど説明されていない。それに選択肢があれば、もう少しまともな魔法少女を選ぶでしょう？ 貴方から見ても、私の素質の低さはわかんと思うけれど」

「…確かに」

「貴方達が万能じゃないというのは、自分達でも理解しているんじゃない？」

「…それは神浜市のことを言ってるのかな」

「（——神浜……？）ん、そう……かもしれないわね」

「…うん、君の存在…そして役割は理解した。それが本当なら僕達も軽々しく契約することはできない。確かに突然といつてもいいほど急に表面化した彼女の素質は不自然だ。あるいは神浜にある、僕達が干渉できなくなった領域もなにか関係があるのかもしれない。同時期に二つの不可解な事態——偶然とは思えないからね。当分の間、鹿目まどかに契約は持ちかけないことにしよう」

「ええ、それがいいでしょうね」

キュウベエの出した結論に対し、素っ気なく返事をするほむら。しかし心の中ではこれでもかかとファンファーレが鳴り響き、盛大なパレードが開かれていた。一人になった瞬間、小躍りし始めることは間違いないだろう。

「じゃあ僕はこれで。とても有意義な時間だったよ、ほむら」

「ー待って、キュウベエ」

しかしキュウベエが帰ろうと動き出した際、重要なことに思い当たった。それは『ワルプルギスの夜』に対抗するための、戦力の確保だ。まどかとさやかか魔法少女にならないとなれば、上手くやったらしても戦力は三人。暁美ほむら、巴マミ、佐倉杏子のベテラン衆。

けれどそれでは足りないのだ。二回目の世界では三人で挑んだ。しかし及ばなかった。いくつかの世界で、四人の戦力をもって臨んだこともあった。結果は、今ほむらが戦い続けていることでわかるだろう。

けれど今回は、キュウベエが鹿目まどかに固執していない今回だからこそ、取れる手がある。基本的にキュウベエは魔法少女のサポート役なのだ。お願いすればある程度まで助力してくれるのは、魔法少女であれば誰でも知っている。

何故彼等がそんなことをしてくれるのかといえば、言わずもがな魔法少女の死因ナンバーワンが『魔女に敗北すること』だからだ。キュウベエは別段地球人を陥れたいわけではなく、エネルギーの確保のために働いているだけだ。魔法少女にはソウルジェムを濁らせて魔女になってほしいのであって、人のまま死んでしまわれてはその分のエネルギーは丸損になる。故にある程度までは戦闘の指南、補助く

らしいは支援していた。

そしてワルプルギスの夜への対策、準備期間において彼が暗躍するのは、鹿目まどかという少女が契約するための舞台作りのためだ。それがなくなつたとすれば、むしろほむら達を支援するのに否やはないだろう。

嵐が過ぎ去つた後、残つたのは魔法少女達の死体のみ……そんなことになれば勿体無いお化けが出てしまう。実際のところ、魔女との戦闘でソウルジェムが濁りきり、そのまま魔女になる魔法少女は少ない。

ソウルジェムは魂そのもの。それが濁っていけば苦しみを伴う。魔女化する直前ともなれば、動けたものではない。そして戦闘中にそんなことになれば、ソウルジェムが濁りきる前に魔女に殺されてしまうのは当然のことだ。

魔女になる魔法少女というのは、実のところ意外と少ないのだ。だからこそその事実を知る者が少なく、魔法少女システムが破綻しないというのは、皮肉かもしれない。

——つまり、今のキュウベえは限定的ながら味方として扱える。

「なんだい？ ほむら」

「少しお願いがあるのだけど……」

「うん。僕にできることならなんでも聞くよ」

「一か月後……ワルプルギスの夜が来ることは把握しているかしら」

「ああ、そうみたいだね。未来からきた君が知っているのは当然か」

「宇宙の延命のために動く貴方達のごことはソンケイシテイルケレド、私も一個の生命として、死にたいわけじゃないのよね。できれば協力してほしいのだけれど……」

「具体的にはどうしてほしいんだい？」

「ええ、無限ともいえる貴方達の物量をもってワルプルギスの夜を圧死させるプランとー」

「無茶苦茶だよ！」

「もしくは近隣の魔法少女の情報欲しいわ。特に巨大な魔女に有効な攻撃手段をもっているような娘の情報」

「う、うん……それくらいなら手伝うよ。それよりほむら、僕達は決して無限じゃないし、死んでしまうのは効率的によくないんだ。知っておいてくれるかい」

「了解よ」

何度も後ろを振り返りながら出ていくキュウベえ。それが名残惜しさと対極に位置しているのは誰が見ても解るだろう。

とにもかくにも上手くいったと、ほむらは喜んだ。いつ嘘がばれてもいいように、予定している行動を変えるつもりはない。しかしそれはそれ、これはこれ。狂喜乱舞のほむらは、あまりの嬉しさに服を脱ぎ、全裸で床を全速力で転がったり、ベッドにルパンダイブをしたり、巨大な錨いかり型の釣り時計にぶら下がってターザンを試してみたりと、全力で喜びを表現した。

「あ、ほむら言い忘れていたんだけど………えっと、何をしているんだい？」

「ーっ」

そして再び部屋へ侵入してきたキュウベえにそれを見られ、真顔に戻った。現在は荒ぶる鷹のポーズ（全裸）を決めていたところだ。これでもし自分が喜んでいることを悟られ、それが嘘の成功に起因していると看破されては台無しだ。故にほむらは、こういうしかなかった。

「…寝る前の……ルーティーンといった……ところかしら」

「そ、そうなんだ。集中していると悪いことをしたね。じゃあまた改めて話をしにくるよ………曉美ほむら」

『ほむら』から『曉美ほむら』に呼び方が変わっていることにそこはかとなない壁を感じつつ、今度こそ家を出ていったキュウベえを見送る。

これからーっ少なくとも一か月は、毎晩怪しまれないように裸踊りをするしかなかった………そんな日の夜であった。

## ひとりぼっちの最果て

見滝原でも有数の富豪——その一人娘である『志筑仁美』は、ここ数日の友人と、そして思慕の念を向けているクラスメイトの変化に戸惑っていた。

事故で入院していた想い人——上条恭介が復帰したのは、彼女にとっても喜ばしいことだ。バイオリンを弾くことは絶望視されていたとの話もあつたが、まるで奇跡のように神経が繋がったともつぱらの噂である。

そして友人の方。仁美が『お嬢様』と知っても、憚ることなく友人関係を続けていた少女、美樹さやか。彼女が上条恭介を好いていたからこそ、仁美は自分の想いを秘めていた。先に好きになったのは彼女だから。先に告白する権利は彼女にあると、そして友人を傷付けたくないと思っていたからこそ、胸の苦しみを無視して恋情を抑えていたのだ。

——志筑仁美という少女は賢く、そして聡い。友人が幼なじみへと向ける視線から、恋心という感情が薄くなっていると気が付くのには時間はかからなかった。それどころか最近転校してきた少女の方に気を向けている節すらあつた。

なにが起こったのだろう。仁美は疑問を覚えつつも、答えは出ない。まあ一学年上の先輩が魔法少女であり、某転校生に頼まれて怪我人を治したなどとは想像の範囲外だろう。加えてその怪我人がホモであり、そのせいで友人の恋心が冷めていったという経緯は、質の悪いジョークとしか思えないほど非現実的だ——ホモの部分は歪められた現実だが。

とはいえさやかはの恋心がなくなったというならば、仁美にとっては喜ばしいことだ。もう自分が彼を好きだと公言しても、誰も傷つかない。悲しむ人はいない。ならば誰憚ることなく告白ができる。そう考えるのはむしろ当然であつた。

——彼女を好きな男子生徒は割と多いため、悲しむ人はそれなりにいるが、本人が気付かないのは様式美というものだろう。



それはさておいて、まずは話を通す必要があると仁美は考えた。話と……そして筋を。いくら自分が推測したところで、確実にさやかの恋心が消えたと判断するのは早計だ。だからこそさやかに、今まで抑えていた己の慕情を伝えるのだ。

もしまだ恋愛感情があつたのなら、もはやそれは宣戦布告になつてしまう。さやかにいい機会でもあるのだろう。押すにも引くにも、さやかの出方を待つ日々が続いていた。友人との絆が大切だからこそ一歩下がっていたが、いつまでもそのままではいられないと考えていたのも確かだ。

故に彼女は、さやかを屋上に呼び出して事の経緯を伝えた。自分が上条恭介に恋していること。けれど美樹さやかという友人が大切に過ぎるから、ずっと我慢していたこと。裏切りのような感情を謝罪し、それでも言わずにはいられなかったこと。全てを伝え終わったあと、仁美は清々しい表情で天を仰ぐ。

後ろめたい、そして少しだけ疚しい秘密。胸を蝕んでいたとも、胸に巣食っていたとも言える秘め事は、どろどろと粘性を持つていた。しかし今すべてを吐き出したことで、たとえ話がどう転ぼうとも受け入れる覚悟ができたのだ。

悲しまれても、怒りを露にされても。祝福されても、喜ばれても。自分が選んだ結果だ。どんな結末を迎えても後悔しないと彼女は決めた。さやかが逡巡している様子を見ても、微塵の動揺もない。そう、何一つ後悔などしていないのだ。

「恭介、ホモだったんだよ……」

——そして彼女は後悔した。



ほむらは少し困っていた。ルンペン魔法少女『佐倉杏子』を内に入  
れることが出来たのは、最良の結果といえるだろう。しかしもう一人  
の魔法少女『巴マミ』と彼女の相性は、決して良いとはいえない  
ものだ。

彼女らに何かしらの確執があつたのは把握しているが、ほむらはそ  
の詳細を知らない。故に、杏子がもう少し落ち着いてから二人を引き  
合わせる予定だったのだ。

基本的にマミの側は、よほどのことがなければ「仲間」を受け入れ  
る。ほむらという新しい絆を得て、更に古い仲である杏子までが自分  
の下へ帰ってきたならば、間違いなく喜ぶだろう。

問題があるとすれば杏子の方だ。彼女は魔法の卵を『つまり』『グ  
リーフシード』を落とさない使い魔』を狩ってしまう魔法少女を馬鹿に  
していた。確かに鶏をヒヨコの内に絞めてしまつても、旨味はほとん  
どない。しかし問題はそのヒヨコが育つための餌が「人間」である  
という点なのだ。

魔法少女が生き延びるためには鶏が必要——正確に言うならば鶏  
が産み落とす卵が必要なのだ。

要約すると、自己犠牲の精神を容認するか否かでの対立。それによ  
つて彼女達は袂たもとを分かつたのだろう。とはいえ、今までの世界で二  
人が同時に仲間になつた時間軸もある。そんな時は大抵、杏子が『昔  
の自分』を取り戻した時だ。

結局のところ、彼女の本質は「善」なのだ。貧しくも幸せに暮らし  
ていた少女の身に、過酷な運命が振りかかったせいで歪んでしまつ  
た。父も妹も、自らの願いのせいで死んでしまった。

そんな中でさえ、心の奥底で『光』に憧れた。あるいは贖罪の意味  
もあつたのだろう。己が殺した父親が望んでいたのは人々の幸せだ。  
そんな人を自殺に追い込んで、おめおめと生き延びた自分が、それ  
も他人を犠牲にし続ける。自己嫌悪に苛まれるには充分な理由だ。

故に『誰かを救いたい』という深層心理の望みは、自分への赦しの  
道でもあるのだろう。きつかけさえあれば天秤がそちらに傾くのは  
必然でもあつた。

ーと、そこまで深く彼女のことを理解しているわけではないほむらだが、なし崩しの善行ですらきつかけになることを知っている。だからこそ、まずは仲良くなるのが先決なのだ。彼女に限らず、人間というものは己の帰属する集団の方針が、精神の軸になることがある。

暫くはほむらのやり方に従うと決めた杏子にとって、乗り気ではなくとも使い魔を倒すことは『絶対』だ。当然、それに際して人を救う場面は何度もあるだろう。実際に、ここ数日ですら幾人かの命を救っている。

魔女を討伐するに当たって人を救うことは今までにもあったが、それは『グリーンフシードのため』という理由ありきのことと、同時に使い魔を放置し続ける状況でもあった。

現状も『命令だから』という言い訳はできるが、見捨てるという選択肢が存在しない状況は、彼女のささくれだった心を癒す一助になっていた。『命令だから、自分はいま正義の味方なのだ』という、優しい言い訳。

それが続けば彼女はマミと仲直りすることもできるだろう。杏子は自分の大事なものを見捨てない。彼女がほむらを、マミを、仲間を大事に思えた時ーワルプルギスの夜と対峙するに当たってこの上ない戦力になる。

そのためにほむらは、彼女を自分の家に置いていた。ベッドはもちろん一つだけ。買うのが勿体ないという理由で、毎晩寄り添うように眠りにつく。薄い肌着だけでの密着は、互いの体温を預けあつた。基礎体温が低めのほむらは、杏子の温かさを求めるように抱き締めて睡眠をとる。

ーとまあ、そんな新婚夫婦のような生活が続いていたわけだ。しかしひよんなことから、その場面をマミに目撃されることとなつてしまったのだ。

「…あんだよ、マミ。何か言いたげじゃん」

「なぜ貴女がここにいるのかしら」

「ほむらに頼まれたからだけど？ 勝負に負けちまったんじゃあ仕方

ないからねえ……使い魔を狩るのも、悪さをしないってのも面倒なものさ。まあ食いつぱぐれとグリーンフシードの心配はしなくて済むけどね」

「…どういうこと？　暁美さん」

「…」

背中から汗を流し続けるほむら。別に悪いことをしているわけではないのだから、堂々としていればいいーそう思っただけでも、二人から発されるプレッシャーがそれを許さない。

まるで浮気が見つかった男のように、正座してうつむいたままだ。いまだ寝起きの服装そのままのため、汗で素肌が透けている。細身でありながら、現在のほむらは妙な色気を放っていた。

「どういうことも何も、お前だつて聞いてるだろ？　ワルプルギスの夜が来るつて」

「ええ。でも貴女には関係ないじゃない。それとも今更改心でもしたのかしら？」

「はっ……なに？　その上から目線。自分がやってることが一番正しい……って感じの目。イラつくんだよね、そういうの見てると」

「私が正しいかどうかは、私が決めることじゃないわ。でも貴女のやり方は絶対に間違ってる」

「んだと……」

「なによ……」

あわわあわわと右往左往するほむら。こういつた時に何もできないからこそ、できなかつたからこそ、何度もやりなおしてさえろくに戦力の確保もままならなかつた。元々、嵐がくれば伏して耐えるような性格の彼女だ。この場で能動的に動くというのは、とても難しい。

険悪に睨み合う二人。一触即発といった雰囲気。そんな彼女達を見て、ほむらはー自分活をいれた。

完璧になるのだろう、暁美ほむら。全てを救うパーフェクトな魔法少女になったのだろう、暁美ほむら。ならばこんなものは修羅場ではない。ふつと笑ってふあさつと解決すればいい……そう意を決して、勢いよく立ち上がった。

「きやつ!?!」

「おわっ!?!」

同じく寝巻き姿の杏子と、いつも通りお洒落なマミ。両方の腕を引つ張ってベッドに放り込んだ。重なるようにして倒れこむ二人。杏子が下で、マミが上だ。

「ぐあっーお、重っ…!?!」

「し、失礼ね! 平均より少し上なだけよ!」

「またケーキばっか食ってんだろ? んなこったからぶくぶくぶくぶく脂肪がつくんだよ」

「二日一個しか食べてないわ!」

「一年で三百六十五個ってやばくねえか…?」

マミの胸に顔が埋もれている杏子。全身でその体重を味わい、骨の軋む音が聞こえる。一つのケーキを角砂糖換算すると約十個。年換算で約四千個もの角砂糖を、朝昼晩の三食以外で摂取するマミの体重は伊達ではない。大体の栄養は胸にいつているが、余剰分が二の腕や太ももに表れているのは、彼女の密かな隠し事だ。

「っーか…:…いきなりなにすんだよ、ほむら」

「それにまだちゃんと理由を聞いてないわよ? 私達、仲間…:…なんだよね? 佐倉さんと協力するならするで、相談くらいはしてほしかった…」

ベッドから身を起こしつつ、ほむらに文句を言う二人。そのまま這い出ようとする彼女達を、再度押し倒して今度は自分も巻き込んだ。大きめのベッドとはいえ、三人ともなると流石に手狭だ。

「きやつ!?! ちよ、ちよつと暁美さん?」

「さつきからなんなんだ、おい」

「ーちよつとお話しましょう」

「…はっ」

「あ、暁美さん…?」

ほむらは知っている。自分の知るほとんどの魔法少女達は、多かれ少なかれ何かを抱えていることを。その最たるものが彼女達で、だからこそ繋がりを強く求めていることを。

人は一人では生きていけないのだ。ママも杏子も、一年以上を孤独に過ごしてきた。十代半ばの幼いとさえいえる二人は、どちらも親の死を目の当たりにしている。そしてその事実<sup>じじつ</sup>に罪を感じていることも同様だ。

両親との楽しい旅行<sup>りょこう</sup>ーそして事故。血を流し、激痛を耐え、朦朧とした頭で願ったのは自身の延命。ママは事切れた両親を無傷の体で見ている。ああ、なぜ自分だけの無事を願ってしまったのか。私<sup>わたし</sup>達<sup>たち</sup>を助けてと、そう願うだけで家族は救われたのに。

貧しくも温かな家庭<sup>かみん</sup>ーその崩壊。ぶらりと垂れ下がった父親と妹<sup>いもうと</sup>だったものを目にして、悟ったのは世界の摂理。杏子が良かれと思つて望んだ奇跡は、父親の信念を揺るがし、妹共々自殺へと追い込んだ。ああ、なぜこんなことになってしまったのか。ただただ、家族の幸せを望んだだけなのに。

心に入った輝<sup>ひび</sup>を埋めたい。それは人間として当然の感情で、本能だ。けれど容易に手に入るものではない。ママはそんな存在が現れる筈もないと諦観し、杏子は傷の舐め合いなど真つ平ごめんと見栄を張る。

ーなら暁美<sup>あけみ</sup>ほむら<sup>ら</sup>がそこに入ろうとほむらは考えた。覚悟とはそういうものだ。大事なものを救う覚悟は、どんな時だつて忘れたことがない。けれど誰かの大事になる覚悟など考えたことすらなかった。

『私なんて』と卑屈な感情がそれを否定していた。何度も見捨てた後ろめたさがそれを邪魔していた。そしてーワルプルギスの夜を越えた後、<sup>”自身を殺す”</sup>覚悟がそれを後押ししていた。

魔法少女の才能はみそつかず。それを固有の能力と、拝借した兵器で彼女は補っていた。けれどワルプルギスの夜の後のことを考えた時、誤魔化しはもう利かない。時間停止という能力は、本来の固有魔法<sup>まほう</sup>ー時間遡行の福次効果だ。つまりほむらが願いを望んだ日……約一ヶ月後を過ぎると、遡行も停止も使用できなくなる。

そうなると武器の補充もできず、残るものといえれば大した力もない弱者が一人。他の魔法少女の手助け無しには、おちおち生き残ること

さえ出来ないだろう。ただただ迷惑なだけの存在だ。故に鹿目まどかという少女が救われるという事実は、暁美ほむらという少女が死ぬことと同義である。

ーけれど今回のほむらは、それすら乗り越えようと誓った。ワルプルギスの夜を越えても死を選ばない。たとえママや杏子に迷惑をかけようと『暁美ほむらが死んでしまう』方が、それ以上に悲しいと……彼女達の『大切』になる覚悟をした。

だからこそーそれを更に越えて、彼女達を大切にする誓いを立てた。

「…ママ。貴女、どうやって入ってきたの？」

「あ、えっと……ごめんなさい。呼び鈴を鳴らしても出なくて、それで鍵が開いていたから……その、ちよつと驚かせてみようかな、なんて……」

「…杏子。昨日、最後に帰ってきたのは貴女だったわね」

「い、いや……ホテルって大概オートロックだから、あんま鍵かける習慣がなくてさ……」

ほふんとベッドの上に投げ出される三人。ママと杏子が端で、ほむらが真ん中だ。仲裁者としては相応しい立ち位置ーというより寝る位置だろうか。

「そう……じゃあお仕置きが必要ね」

「ちよ、ちよつとうっかりしただけじゃねーか！」

「そのうっかりが悲劇を生むことだってあるわ。入ってきたのがママだったからよかったものの……もし変質者だったらどうなっていたか。二人とも縛られて、身体中を<sup>なぶ</sup>縛られて……『絶対に負けたりなんかしない』なんて言いながら薬で墮とされる貴女の姿が目には浮かぶわ」

「あつてたまるかっつーの！ だいたい普通の奴があたし達魔法少女に勝てるわけないじゃん」

「じゃあその変質者がママで、私達をリボンで縛って、身体中を<sup>なぶ</sup>縛りはじめたらどうするの？」

「そ、それは……」

「するわけないでしょう!？」

珍しく突っ込みをいれるマミ。とはいえ自分が変質者扱いされては、乙女として言いたいこともあるだろう。くるんと巻かれたサイドの髪が、怒ったようにふよんと揺れる。しかし今度はそんな彼女の方を向き、ほむらは追及を始める。

「マミもマミね。住所は知っていても、本当にここが私の家かどうかはわからないでしょう。違っていたらただの不法侵入よ?。」

「う……で、でも表札に『暁美ほむら』って書いてたわ」

「絶対じゃないわ。実は『暁美はむら』と書いていたのかもしれない。その『はむら』が変質者で、貴女の不法侵入をたてにエツチな要求をしてきたら?。『胸だけなら……』なんて言いながら最後までされる貴女が目には浮かぶわ」

「どんな確率!? そんなのあるわけないじゃない!。」

「じゃあその変質者が杏子で、ホームレスなこの子が空き家を求めてそこにいたとしたら?。」

「そ、それは……」

「誰が変質者でホームレスだコラあ!。」

根無し草で、ホテルを転々としている杏子。ホームレスといえばホームレスだが、真正面から言われては怒りたくもなるだろう。

右隣から腕をつねられ、左隣から頬をつねられるほむら。しかしどこか嬉しそうでもあり、息の合ったベテランコンビに苦笑する。

「……やっぱり仲が良いのね、二人とも」

「だ、誰がだよ!。」

「……ええ、そうね。仲が良いなんてとんでもないわ。グリーンフィードのために使い魔を放置する人となんて、仲良くできるわけがない……絶対相容れない」

「……」

マミの冷たい言葉に顔を歪める杏子。先程のやりとりで、仲が良かった昔のことを思い出していただけに、その言葉が胸に突き刺さる。しかし売り言葉には買い言葉で返す彼女の性格だ。反論と、マミのやり方を小馬鹿にする言葉を口に出す——その直前。ほむらの指



が彼女の唇を塞ぐ。

「マミ」

「…な、なによ。曉美さんだって、佐倉さんのやり方が正しいなんて思っていないでしょう？」

「いいえ。魔法少女としては杏子のやり方が一番理にかなってるわ。私自身も、使い魔を狩るのは効率が悪いと思ってる」

「ーっ！ そんな、な……嘘でしょう？ そんなこと言われたら、私……」

「勘違いしないでほしいのは、そう思っただけでも行動は別だっということ。目の前に使い魔が現れればちゃんと始末するし、殺されかけている人がいればそちらを優先してる」

「え……？」

ほむらは効率性を求めて動いており、杏子の在り方が魔法少女に一番適していると確信している。しかし彼女がグリーンシードのために使い魔を放置したり、人を見捨てるかといえば否だ。それはほむらの善性というよりも、まどかやマミに顔向けができないという理由から。

いつだって人を救おうとする、そのために魔法を使う少女達。そして彼女達こそが、魔法少女として不慣れなほむらをサポートし、なんたるかを教えた師匠でもある。

魔法少女のなんたるかーその真実こそ、教えとかけ離れてはいない。だからといってそのやり方が間違っていたなどと、ほむらは微塵も思っていない。彼女達の尊い在り方あればこそ、かつてほむらは救われたのだ。恐ろしい魔女から守ってもらえたのだ。

そのやり方を否定するのは、自分の存在を否定することに他ならない。だからこそ、たとえ己が高尚な人間であらずとも、魔法少女としての在り方だけは変えていない。それが彼女の矜持だ。

「貴女のように真っ直ぐな人間ばかりじゃないとー前を向いて歩ける魔法少女ばかりではないと、理解しなさい……マミ。私だって、本来なら杏子のやり方が望ましいと思うタイプのー貴女に言わせれば、相容れない類いの魔法少女よ」

「な、なら……どうしてそうしないの？ どうして……私を助けてくれたの？」

「それが死んだ私の友人と……先生の教えだから。そしてマミ、貴女が大切だから」

不安そうに、瞳を揺らしながらほむらへ問い掛けるマミ。反して、杏子は口をつぐみながらじっと聞いている。既に三人とも身を起し、三者三様の体勢だ。それでもまだベッドの上から離れないのは――繋がりやを絶ちきれない、絶ちきりたくないという思いが捨てきれないからだろう。

「マミ。人は大事なもののために生きてるの。私は貴女が好きだから……貴女の悲しむ顔を見たくないと思うから――その思いが『使い魔を狩る非効率』なんかよりずっと大切だから、そうするの。それでは駄目かしら……？ 魔法少女は心根から正しくなければ……駄目かしら」

「あ、あう……そ、そそ、そんなことはないわ！ 結果的に救われる人がいれば、大丈夫だと思うの！」

「ありがとう。杏子はどう思う？」

「あん？ ……まあ人それぞれじゃねえの？ あたしには関係ないけどな」

ほむらとマミのやり取りを見て、少し不貞腐れたような態度を見せる杏子。数日とはいえ枕を共にした少女への嫉妬もあり、かつて慕っていた先輩への嫉妬でもある。自分の友達同士が仲良くやっている、妙な疎外感を覚える現象に近いだろう。

「それ自体は正しいと思ってるのね？」

「まあな。お前らの大切は“それ”で、あたしの大切が“これ”だって話だろ？ 間違ってるねーよ。つまり……相容れないってこった」

「……ですって、マミ。良かったじゃない」

「……え？」

「……はあ？」

杏子の発言のどこが良いのか――マミと、そして口にした当人すら間抜けな声を出す。ますますもって相容れないことが理解できた

……それだけなのに、と。けれどほむらは微笑んだ。その『思い』が正しいという言葉、それこそが聞きたかったのだという風に。

「マミ。私は一ヶ月間、杏子に協力してもらおう約束をした」

「“協力”ねえ……ま、どっちにしても一ヶ月だ。あなたの言い方に倣なまつて言えば、あたしは約束を通すことが“筋”で、それが大切だと思ってるから従ってるだけだ。それ以降は仲良しこよしなんてー」  
「ええ、そう。貴女が一ヶ月以内に私とマミを『好き』になればいいのよ」

「ーは？」

「そうよね、マミ」

「ーえ？」

「この一ヶ月で、杏子が『やり方』を変えなくなるくらい……私達がこの子の『大切』になればいい」

もはや暴論としか言えないほむらの言葉。少なくとも本人の前で宣言するようなことではないだろう。普通は頑なに、意固地になるのが当たり前だ。しかしそれを差し引いても、ほむらはこの方がいいだろうと考えた。その方がー間違いなくマミのやる気が増すだろうから。

「ーそっか！　そういうことね！　…佐倉さん！」

「は、はあ……？　つーかなにやる気だしてんのさ。んなこと言われて好きになるやつなんいねーよ……ぶむぎゅっ！　むぐっ!？」

「私、頑張るからね……！　ケーキだっていっぱい焼いてあげるんだからー！」

「むー！　むー！」

「ふふっ」

マミのふくよかな胸に抱き締められ、苦しそうに暴れる杏子。しかし本気で嫌がっていればすぐに出られそうなものを、妙に時間がかかっているようだ。そんな彼女達を見てーほむらはふあさつと髪をかきあげた。

突然の訪問のせいで少しばかり睡眠が足りていない。少し手狭にはなるが三人で寝るのもいいだろう。そう思い、横になるほむら。

そしてそんな騒がしい彼女の部屋に、壁をすりぬけながら白い小動物が姿を現した。

「やあ、暁美ほむら。言われた通り、近隣の魔法少女の情報を持ってきたーおっと、今から寝るところだったんだね。ところで例のルーティーンとやははしないのかい？」

ーほむらは服を脱いだ。

## 楽園（ハーレム）行き覚醒前夜

見滝原総合病院。この場所は見滝原市のほぼ南端、線路を越えると別の市に入るところに位置している。南側の線路を越え、西の河を渡れば更に別の市へ続いている。

その関係上、三市に渡って病人や怪我人が集う病院だ。故に診察者の数も多く、もしこのような場所で魔女が発生した場合、多大な被害をもたらすだろう。

そして今日この日こそ、グリーンシードが孵化し「お菓子の魔女」「シャルロット」が、結界を生み出す日であった。時間軸によって様々な変化はあれど、この魔女に限ってはまず間違いなくここに出現するのだ。

ほむらも何となくは気付いているのだが、「変化のない事象」とは誰かしらの強い意志が介在していることが多い。例をとってみれば、まどかとさやかか公園でクレープを買う日がある。まどかか九割五分でトリプリーチゴクレープを注文するが、さやかはまちまちだ。これはまどかの嗜好が偏っており、よほど気分ではない限り自分の好きなものを選ぶということなのだろう。そしてさやかは取り立ててクレープの種類に執着がないため、注文もバラバラになるのだ。

それを前提に考えると、お菓子の魔女はこの病院に執着があるということになる。魔女にそういった性質があるのかという疑問はー間違いない。是であった。むしろ全ての魔女はなにかしらに執着しており、場合によってはそれが弱点にもなる。

お菓子の魔女シャルロットを例にすれば、彼女は「チーズ」がとても大好きだ。しかしお菓子溢れる結界にはチーズだけが存在しない。一欠片のチーズもありはしない。だからこそこの結界にそれを持ち込み、魔女の目の前におけば夢中となる。チーズある限り簡単に隙を作れるということだ。

とはいえ魔女に詳しいほむらといえども、そこまでは知る由もない。どんな偶然があろうとも、魔女の前でチーズを取り出すような事態にはならないからだ。

シャルロットは強大な魔女である。それは偏ひとえに生前の魔法少女の実力が高かったということなのだろう。行動パターンを知り尽くしているほむらでさえ、時間停止に頼らなければ勝ち目が薄い。そんな魔女だ。

ー逆に言えば、時間停止があればまず勝ち揺るがないということでもある。というよりもこの見滝原に出現する魔女は、既にほむらの敵にはなりえない。杏子がダンスゲームで低い点数を取らないように、多少のミスがあつたとしても簡単に挽回が可能なほど、全てに慣れているからだ。

つまり一人でも充分に対応可能な敵だ。となれば杏子やママには別の場所に出現する魔女を狩ってもらった方が効率的である。グリーンフシードはいくらあつても貯めすぎということはない。別行動は必然の成り行きであつた。

ーしかし。

「なぜ現れないの…？」

時間になつても現れない。そんなことは早々ないのだがーと訝しむほむら。今までこの魔女が発生しなかつた極稀な時間軸のことを思い返し、今回との類似点を探る。

両方で共通することといえば…：そうだ、上条恭介の有無ではないか、とほむらは思い当たつた。彼が右手の怪我に悲観し、さやかが契約する前に命を絶つた世界がある。その時、魔女は現れなかつた。そうするとどういふ推測が成り立つのか。

ー気付いた瞬間、ほむらはぎしりと歯を擦り合わせた。上条恭介が入院したままであれば、まどかとさやかは此処へ必ずやつてくる。そしてその時に孵化寸前のグリーンフシードを見つけてしまえば、幼馴染みをーそして病院にいる人々を守るために契約する可能性が高まる。

なんのことはない、その孵化寸前のグリーンフシードをキュウベえが置いたというだけの話だ。そもそも魔法少女がソウルジェムを濁らした訳でもなく、使い魔が成長して魔女になつたわけでもなく、都合よくグリーンフシードが孵化したという時点で気が付くべきだったの

だろう。

まったく、時間を無駄にしてしまったと踵を返すほむらであったがーそんな彼女の視界の端に、一人の少女が映った。第一印象としては見窄みすぼらしいといったところだろうか。あまり上等な服装とはいえず、ところどころにほつれが見える。ただでさえそんな身形みなりであるというのに、その中身も暗い雰囲気を纏っているのだ。

しかし何よりもほむらの気を引いたのは、その指にリングが嵌められていたからだ……魔法少女の証である、ソウルジェムの指輪を。

ほむらもベテランと言われるほどの魔法少女だ。見滝原以外の魔法少女も多少は知っている。しかしこれ程までに若いーというよりも「幼い」魔法少女は、後にも先にも一度きりしか見ていない。

基本的にキュウベえが契約するのは第二次成長期を迎えた年代の少女だ。その年代が一番情緒不安定であり、私生活の悩みなどでソウルジェムを濁らせやすいからである。

それ以前に、あまりに幼すぎると初回の魔女との戦闘で死んでしまう者が大半だろう。非効率なことを嫌うキュウベえが契約するとは思えない、というのがほむらの見解だ。

ーしかし今はそんなことを言っていられない。病院の入り口へ向かう少女のソウルジェムは、既にギリギリの状態だ。濁りが限界を迎え、自ら穢れを放ち始めている。そこまでいくと、グリーンフシードで穢れを吸い取ることが出来るかは五分五分といったところだろう。

「ー待ちなさい」

「…」

「待ちなさいー」

「…なぎさに言ってるのですか？」

「…！ ええ、そうよ」

およそ子供らしくないー子供にしているほしくはない瞳だ。絶望に染まりきっている。もう幾ばくの猶予もない、そんな不安定な雰囲気だ。ほむらは会話を後回しにして、盾からグリーンフシードを取りだし、彼女の指輪に近付けた。

「…っ、くっ…」

「…？」

少女はほむらの行動と、そして結果の両方に首を傾げた。なぜ見ず知らずの魔法少女が大切なグリーンフシードを使用してくれるのか……そしてなぜ自分のソウルジエムは輝きを取り戻さないのか。

その理由を知っている魔法少女は少ないが、当然ほむらにとっては既知である。ここまでソウルジエムの汚染が進んだ場合の対処法は、グリーンフシードではなく「希望」なのだ。

絶望するとソウルジエムは濁る——そしてソウルジエムが濁ると絶望しやすくなる。最低の悪循環システムを搭載しているのが、この宝石の特徴だ。そのループに嵌まってしまった場合、原因となった絶望を解決するか、あるいはそれを吹き飛ばすほどの希望を感じる事が魔文化を避ける唯一の方法である。その後、ようやくグリーンフシードを受け付けるようになるのだ。

「貴女、名前は？」

「…百江なぎさ、なのです」

少女の名は『百江<sup>ももえ</sup>なぎさ』。ほむらの預かり知らぬことではあったが、彼女は「お菓子の魔女」「シャルロット」の——その前身の魔法少女である。

彼女の母親はこの見滝原病院に入院しており、難病患者でもあった。そして貧困に喘いでもいる、世間的に見れば『可哀想な家族』といったところだろうか。

なぎさの魔法少女としての才能は、全体で見てもかなり上位に食い込む。そのせいで幼いながらもキュウベえに目をつけられ——そしてあまりにも容易い願いを叶えさせられた。

幼さ故に契約の意味も大して理解しておらず、願いを病気の治癒ではなく、母親がふと漏らした『チーズケーキを食べたい』などというちっぽけな願いで消費してしまった。ただ母親に喜んでもらいたかった……それだけのために。

本来であれば既に母親は死を迎え、なぎさも絶望し魔女になり、キュウベえに利用されているところであった。しかしこの病院で起こった奇跡——絶望視されていた上条恭介の快復という快挙が起き



たことで……その噂が駆け巡ったことで希望を得た患者は多い。病は気からという言葉は決して嘘ではないのだ。精神状態の躁鬱そううつが身体に及ぼす効果は無視できない。

その結果起きたのはなぎさの母親の僅かな延命、引いてはなぎさの魔女化の遅延だ。しかし問題が解決したわけではない。難病とはいえず手術をすればどうにかなる状態ではあったが、それには多額の金が必要だった。

事ここに至り、なぎさはようやく気付いたのだ。願うべきはチーズケーキなどではなく、病気の治療だったことを。その後悔はじくじくとソウルジェムを蝕み、母親が限界に近いことをなんとなく察したことも相まって、なぎさは今魔女化しかけている。

年端もいかない、本当に幼い少女だからこそ感情に制御がきかない。なぜ母親が死んでしまうのか。なぜたった一つの奇跡をくだらない願いに使用してしまったのか。なぜ周りは幸せそうなのに、自分と母親は不幸なのか。

なぜーなぜ誰も助けてくれないのか。

ああ、困ったら誰かが助けてくれるなどという考えは甘えだろう。けれど彼女はまだ十歳にも満たぬ少女であり、甘えが許されて然るべきだ。

それでも救いの手は差しのべられない。当然だろう、誰が好き好んで莫大な医療費を払ってくれるというのだろうか。無償の善意には限界がある。

なぎさはそれをこれまで理解しておらずーそして今は理解してしまっただけだからこそころで朽ち果てるのだ。言ってしまうえば世界のどこにでもある不幸で、今もどこかで起きている、珍しくもない悲劇の一つ。

子供が泣きじやくる。感情のままに、誰かを呪うこともせず、ただただ助けを求めている。張り裂けるような悲痛な叫び。そんなありふれた不幸。

ーほむらはそんな少女の手を握り、優しい声で囁いた。

「ー大丈夫。きつと助けてあげるから」

「…ひっ、うぐ……本当？　本当に……助けられるですか…？　ひぐ、ひっ…」

震える少女を抱き締める。悲しむ少女の涙を拭う。けれどまだソウルジェムはグリーンフシードを受け入れない。

「絶対に、絶対に助けてあげるから……お願い、泣き止んで」

小さな身体で、拙い言葉で、後悔を口に出している……けれど必死に運命と戦っている。それがどうしようもなく自分と重なって、ほむらも口元を引き結ぶ。しかしまだソウルジェムは穢れを放つ。

「ひぐ、ううう……お母さん、お母さん……ごめんなさい、なぎさが、なぎさが……！」

泣いた子供に声は届かない。空間が軋みだし、ソウルジェムから黒いもやが溢れ出す。けれどーほむらは諦めない。見ず知らずの少女を助ける意味などあるか……そんなことは考える以前の問題だ。完璧な魔法少女たれば「救えて当然」。ここでそれができないなら、これ以降だつて出来ないだろう。それが卑怯な手段を使つても悲願を成すに当たつて決めた、ほむらの信念だ。

「ひっ、ひっ……う……あーあぐっ……!?　…い、あ、がつー！」

泣き声がー苦痛の声に変わる。最後の一線を越えてしまった証拠だ。今までのほむらであれば見捨てていた段階の汚染。

青い輝きが黒に染まり、涙と共に醜悪な人魚姫と化した友人を思い出す。何度も何度も、数えることが馬鹿らしくなるほど見捨ててきた彼女のことを。

きつと救うために必要だったのは「愛」なんだろう。その時その場の上条恭介がいたならば、必ず彼女は耳を傾けた筈だ。

その手で大事な友達を殺した時間軸、ほむらのソウルジェムは手遅れに近かった。けれど生き延びたのはーやっぱりそれも「愛」なんだろう。

愛してくれる人が居なくなつた子供が泣いている。助けてと、助けてほしいと泣いている。

そんな少女の額に触れるようなキスをして、ほむらは駄々っ子をあやすように抱き締めた。

「ーとつてもケーキを焼くのが上手な友達がいるの。甘くて、柔らかくて、美味しいケーキ。お母さんが退院したら招待するわ。ふわふわで、ベリーソースが良く合うチーズケーキを焼いてもらいましょう」

「チ……ズ……」

「お母さんに『お帰り』って言ってあげよう？　ね……なぎさ。大丈夫、貴女の声は私に届いてる。これまで誰も助けてくれなかったのなら、これからは私がずっと傍にいてあげる……だから、だからーももう少しだけ、頑張ろうね」

「あ……」

ー最後の禁じ手。ほむらは自分のソウルジェムをなぎさのソウルジェムに近付ける。グリーンフィードとソウルジェムは、結局のところ同じものだ。むしろ後者の方が意図的に穢れやすく創られている都合上、『穢れを吸いとる』という一点に限ってはソウルジェムの方が優秀である。

徒党を組む魔法少女が非常に少ないため、知っている者こそ極僅かではあるが、『魔力の譲渡』という技術が存在する。しかしそれは美化された言い方に近く、悪い言い方をするならば『穢れの押し付け』のようなものだ。

とはいっても魔力を譲渡する方……つまり穢れを引き受ける方の任意で成り立つ技術だ。確かな信頼や親愛がなければまず使用はしないだろう。

ソウルジェムは魔法少女そのものであり、その名の通り剥き出しの魂といえる。文字通り魂と魂が触れ合い、なぎさは鳴咽おえつを止めた。

その温かさは、ずっと彼女が求めていたものだ。物心ついた頃には父親がおらず、我が儘を言い出す頃には母親が倒れ、同年代の少女よりもずっと不足していただろう『愛情』。

「あ……あ、う……」

「ほむら。私の名前は暁美ほむらよ」

「ほむら……」

「ええ、そうよ『なぎさ』」

「うっ、く、ひっ——うわあああん!!」

今までの涙とは質が違う水滴。頬から流れ出た雫がソウルジェムに零れ落ち、ようやく穢れの放出が止まった。すかさずグリーンフィードを近付け、二つの魂が輝きを取り戻したことを確認し、ほむらは安堵の息を漏らした。

ぎゅつと頭を押し付けてくるなぎさを撫でながら、莫大な医療費について考える。杏子への見せ金に使用した札束……あれで事足りるならいいが、となぎさに悟られないように小さなため息を吐く。それで足りなければ、また犠牲になつてもらわねば、と。

おはじき拳銃大好き、頭にヤのつく自由業……『暴力団』

おだんこ談合こねるよ、脱税ゼネラルコントラクター……『悪徳企業』

お食事券汚職事件は悪の華、裏金献金マイスター……『黒い政治家』

マジカルシーフ——魔法怪盗☆ホムリリイ。始まります。



“情報屋”というものは現代に存在するのだろうか。数世紀、十数世紀昔には確実に存在しただろう。古ぼけたバーでフードを目深に被った、怪しき全開の情報屋だつていたかもしれない。

とはいえ現代のそれと全く異なることは間違いない。今やネット全盛の時代、一般人でさえその気になれば情報屋まがいのことは出来るだろう。

故に“本物”の情報通に出会うことは、それだけで既に難しい。少なくとも単なるいち魔法少女に、そんな伝は存在しない。

「情報屋ねえ……いくらあたしだってそんなもんにも心当たりなんかねーよ」

「そう……アウトローな貴女なら、と思っていたのだけど」

「アウトローっておまつ、あたしのことなんか勘違いしてない？ そりや暗黙の了解とか、手を出すとまずいとこくらいは把握してるけどさ。ヤーさんくらいならともかく、企業だの政治家だのなんざ名前も知らねーよ」

「…今の首相の名前は？」

「…」

犯罪まがいのーというより、犯罪そのもので生計を立ててきた杏子。彼女ならば見滝原以外の『裏』に詳しいだろうとほむらは考えた。この見滝原ならいざ知らず、他の街にまで足を伸ばすことは早々ない故に、今までは必要なかつた情報だ。しかし既にこの見滝原では色々やってしまった都合上、違う街へ手を出す必要があった。

「う……そ、そうだ！ 情報屋かどうかは知んないけど、ちよつと前そこそ有名な『組』を潰した組織があつてさ……確かそのトップか構成員だかが『魔法少女』って話だ。あくまで噂程度だけどさ」

「魔法少女がトップの……組織？」

「ああーってもあんま悪い噂は聞かないけどね。ただ敵対するとかなりヤバいつて話……バリバリの武闘派らしいから、あたしも気をつけてたんだ」

「…組織の名前は？」

「確か……『蒼海幫』。華僑が中心の組織だった筈だよ。つーかチャイニーズマフィアだろうがイタリアンマフィアだろうが、海外のそつち系って容赦ないんだ。基本的に手は出さない方が賢明だね」

「…蒼海幫」

考え込むほむら。確かに杏子のいうように危険な部分もあるだろう。しかしトップか、あるいは高い位置に魔法少女がいるなら、与し易いという側面もある。普通のそういった組織に話を持っていくのは、基本的に無理があつた。子供が情報をくれなどと言っても門前払いが関の山だろう。

故にほむらは今まで何度も繰り返す度に少しずつ、足で情報を集めたのだ。だからこそ見滝原の裏稼業にはそこそこ詳しいのだが、今回はそんな手段が使える筈もない。

しかし魔法少女という共通点があれば接触のハードルは下がり、なおかつグリーンフシードという報酬も提示できる。それにあまり時間もない。なぎさの母親も限界が近い。ママミが回復魔法で命を繋ぎ止めてはいるが、基本的には外傷に効果を発揮するものだ。一刻も早く手術が必要で、そのためには金が必要だ。

真つ当なところから奪うわけにはいかないが、不当にー違法行為により溜め込んだ金を奪うことにはなんの躊躇もない。故に標的の早期発見が肝要なのだ。

蛇の道は蛇。裏に通ずる組織ならば、それに敵対的な組織の情報くらは持っているだろう。企業や政治家と癒着していれば、その辺りの情報にも期待できる。ほむらはそう考え、立ち上がった。

「じゃあ行きましようか」

「…あたしの話、聞いてた？」

「ええ。怖いなら来なくて結構よ……命令もしないわ」

「む…」

「意地で付いてくるのもやめなさい。ただー泣いた子供を助けたいというのなら、一緒に行きましよう」

試されているー杏子はそう感じ取った。そして彼女は、そういったことをされるのがとても嫌いだ。てめエは「何様」だよ、とし真つ直ぐに見詰めてくるほむらの視線は、上からではなく下から。品定めではなく「期待」。

きつと貴女ならーそういつた瞳だ。

「はん……性に合わないねえ。なんであたしが赤の他人のためにそんなことしなきゃなんないわけ？」

「…」

じつと杏子を見つめるほむら。まだ早いとは思わない。もう正義に傾いているのは明白だ。そもそもが正義感の強い少女だった筈だ……なにより、彼女は幼い少女を見捨てない。幼い内に死んだ妹に重

なる、泣いた子供を見捨てるわけがない。

知識としてそれを知っているほむらは、少し卑怯だろうかと目を瞑りー椅子から立ち上がる音を聞いて微笑んだ。

「ま、でも……ガキのキンキン声は嫌いなんだ。家がうるさくなくなったら堪ったもんじゃないね」

「ええ、そうね」

「…なに笑ってんのさ」

「いいえ、なんでもないわ」

引つ張るように手を繋ぎながら、ほむらは足取り軽く家を出る。想いは願えばきつと伝わる……少し前までは考えもしなかった綺麗事に、胸を熱くさせながら。絶対に今回で終わらせようと誓いを新たに、扉を開いた。

「ねえほむら……その子、誰？　なんでー手を繋いでるのかな」

ーそこに現れたのは、冷たい声で問い質してくる……さやかかの姿であった。

## 功夫淑女（カンフリーデイ）

ハーレムとはロマンである。そう考える男は多いだろう。あるいは女性の中にもそういった者は少なくないかもしれない。しかし本当にハーレムとはロマンなのだろうか。

現実を見据えれば、ハーレムというものが如何に難しいか解る筈だ。まず「ハーレム」にはしっかりとした決まりがある。正妻――つまり第一夫人の条件もさることながら、第二夫人、第三夫人を作るならば全員にお伺いを立てなければならぬ。

そして皆を平等に愛さねばならない。これは心情面にかかわらず、仮にその日が第一夫人とベッドを共にしたのならば、次の日は別の夫人といった風に公平さを保たねばならないのだ。

そもそも王族や皇族を除いて、一般市民が妻を多く持てるという状況はどこから始まったのか。それは戦争が盛んであった時、夫を失った女性が生きていくための救済措置が発端だ。

女性が社会に出ることを認めない社会。しかし戦争で男が減り、未亡人が増えてしまえばどうしようもない。故に余裕のある男が多数を養うために始まったのが一夫多妻制だ。もちろん国によって異なるが、基本的にハーレムというものは管理が非常に面倒なのだ。プライベートを重視する現代にあつては、一度体験すれば望まない人間の方が多くなるだろう。

ほむらが今回の時間逆行の際に決意した誘惑計画。それはそういった難しさをちゃんと踏まえているのかというところももちろん是だ。完璧に、完膚なきまでに全てを救うと決めたほむらが、その程度のことを考えていない筈もない。

マミと杏子の邂逅こそ慌てたものの、あれに関しては誘惑がどうの以前に、険悪になる要素が多すぎたためだ。もう少し両者とも仲を深めてからの予定であったため慌てふためき……しかし結果としては充分なものとなった。

今回に関して、さやかが家を訪ねてくるのは予想外の出来事であった。しかしほむらはその程度のことでは動揺しない。いずれは引



き合う彼女達の運命が、いま交わったというだけなのだから。

「こんにちは、さやか。随分と急な訪問ね……でも休日にも貴女と会えるなんて嬉しいわ」

「へっ!? あ、う、うん……その、近くまで来たから、いるかなって思ってたさ」

「ふふ、ありがとう」

「…クラスメイトかなんか?」

「ええ。『大事な友達』の『美樹さやか』。さやか、こっちは同居人で魔法少女のチームメイト『佐倉杏子』よ」

「ん? こいつも魔法少女ーってわけじゃなさそうだな。なんで知ってたんだ?」

「キュウベえが引きずり込む可能性が高かったからよ」

「ふうん……ま、そりや言うべきだ。わざわざ不幸になりに行くなんて馬鹿らしいもんな」

魔法少女の運命を知らなくとも、幸せに生きている一般人が契約することの良いとしない。それが佐倉杏子という人間だ。もちろんそこには打算も込みのーグリーフシードの取り分が少なくなるという事情も入ってはいる。

「佐倉杏子だ。ヨロシクな」

「えっ、あ、うん……美樹さやか、です……」

「かたっ苦しいなー、同い年くらいでしょ? 敬語やめてくんない?」

「…ん、わかった。『杏子』でいい?」

「おう。あたしも『さやか』でいいよな」

さやかと杏子は元々が相性の良い二人だ。出会い方がまともであればーほむらが『仲良くしてくれるよね?』といった雰囲気を出していけば、すぐに打ち解ける。そもそも殺し合う程に険悪であつても、最後には心中してしまうくらいに心が繋がりがやすい少女達だ。馬が合うというのはこの二人を指して言う言葉、という程に。

「えっと……今から用事だった?」

「…ええ、少し」

「…そっかー。ごめんね、変な時に来ちゃって」

「…」

ほむらは冷静に頭の裏で算盤そろばんを弾く。美樹さやかという少女はがさつで大雑把に見えるが、その実は繊細で打たれ弱い性格だ。気遣いも出来る人間だからこそ気にしていない風を装ってはいるが、現在の感情は「寂しい」の一語に尽きるだろう。

魔法少女の真実こそ話しているが、さやかもまどかも時に突拍子もない思い切りを見せることがある。契約する前に魔女の正体を説明したことは多々あれど、魔法少女になる決意の障害には意外とならないのだ。むしろ彼女達からマミに真実が伝わることを考慮して、説明しないことの方が多くなっただけだ。

『魔法少女ではない』という疎外感から契約の可能性が高まってしまえば本末転倒。「いくらなんでもそれはない」という常識を、易々と踏み越えるのが彼女達である。

それを避けるためにここで『一緒に行こう』と言うのは簡単だが、どうしたものかとほむらは悩む。

メリツトは『さやかかの心情』『さやかと杏子の良好な関係』『人手』といったところだろう。対してデメリツトは『危険』であるということだ。杏子曰く悪い噂を聞かないといえどもマフィア、あるいはそれに類するコミュニティなのは間違いない。戦う手段のないさやかを関わらせるのに躊躇いを覚えるのは至極当然の考えだろう。

しかし組織と接触するにしても、まずはどこにあるかを探さなければならぬ。そして探すにあたっては魔法頼りとはいかないのだ。どうしても足で探す羽目になる以上、二人と三人では効率も大違いだ。

実際の交渉にさえ席を外してもらえれば、一緒に行くという選択肢は悪くないのかもしれない。魔法少女として一緒にはいられない以上、出来る限りは同じ時間を過ごしたい。

なにより対等でいたい。頼られる時は力になり、頼るべき時はすがりたい。『守られているだけではなく、守りたい』と、他ならぬ自分がそう願って魔法少女になったのだから、除け者になる辛さなどほむらには解りきっている。

「…さやか、少しお願いがあるのだけど」

「え？ ーう、うん！ なんでも言つて！」

事情を話し、手伝いをお願いしたほむら。奮起するさやかと呆れる杏子を眺めながら、きつとこれで良かったのだろうかと思むらは微笑んだ。



新興都市『神浜』。そこはまさに魔窟である。魔女が多いとされる見滝原でさえ、基本的にはマミ一人で事足りているのに対し、神浜の魔法少女は数十人を越える有り様だ。だというのにグリーンシードの奪い合いにはなっていない。

魔女の多さが日本ー否、世界一であるということに疑いはない。そして魔女の強さもまた尋常ならざるものであり、この地の魔法少女は徒党を組み、協力を前提としているのも他とは違う点だ。

とはいってもそこかしこに魔女がいるという訳でもなく、はたから見ればごくごく普通の新しい街である。そんなこの街へ足を踏み入れる少女が三人。

『暁美ほむら』『佐倉杏子』『美樹さやか』。電車で言葉を交わす内にすっかり打ち解けた杏子とさやかを見て、ほむらは軽く息を吐く。大丈夫だろうとは思っていても、実際にどう転ぶかは未知数だ。世界を繰り返す度に大きさが変わる杏子の胸のように、相性という曖昧なものを信用しきれないのは当然の話だろう。ちなみにこの時間軸はボリウムも控えめなようだ。

「さて、と…：…んじや、まずは腹ごしらえだよな？ よく考えたら朝ごはん食べてねーし」

「そうね。なにかリクエストはある？」

「あ、あんたら……それでいいの？」

「いいんだよ。急がなきゃいけないのと、飯を抜くのは全然別問題だからな。無理やって体壊して、結果的に目的を果たせない方が馬鹿じゃん？」

「うーん……それもそっか！　…よし！　荒事は任せつきりになるんだし、お昼はさやかさんのお財布にまつかせなさーい！」

「ほんととか!?　良い奴じゃんかあんた！」

杏子を釣るなら飯で釣れ。もはやことわざにでもなりそうな鉄板の選択肢。さやかも狙ってやっている訳ではないのだろうが、気っ風の上さが良い方に転んでいるようだ。

「…大丈夫なの？」

「心配ごむよー！　お昼ご飯くらいなら大丈夫大丈夫。買う予定だったCDが……うん、必要なくなっちゃったからさ」

「…そ、そう」

なんとも言えない表情のさやか。それに若干の罪悪感を覚えながら、ほむらは目についた中華屋を指差す。中華とはいっても高級な雰囲気ではなく、街の定食屋然とした佇まいだ。安い、早い、旨いといったイメージが湧いてくる外装。暖簾をくぐり抜け、席につく三人。メニューも豊富で店内の雰囲気も明るい。きつと味も良いのだろうと思わせる装いだ。

「すいませーん！」

「おー！　ちよつと待ってなー！」

「はーい……子供？　この店の子かな？」

「かしらね。中華屋に欧州系人種ってすごい違和感だけど」

「なんでもいいけど腹減った…」

杏子が頼む品を決めていくに従って少しずつ青くなるさやか。大食漢ならぬ大食乙女の胃袋を甘くみていたようだ。そんな彼女の様子を見て冗談だと笑う杏子。ほむらのような余裕のある財政状況の相手ならばともかく、お小遣いでやりくりしているような学生相手に好き放題をするほど厚顔無恥ではないのだ。

「姉ちゃん達、注文は？」

「えっと、あたしは天津飯と…」

「ー貴女、魔法少女？」

「えっ？」

「ん？ そうだけど……姉ちゃん達もか？ ここら辺じゃ見ないけど」

「ええ。普段は見滝原と風見野辺りで活動しているから」

「ふーん……おい！ 鶴乃ー！ この姉ちゃん達、魔法少女らしいぞー！」

「ちよつ、ばつ……！」

見るからに子供っぽい少女店員ー彼女の名は深月<sup>みつき</sup>フェリシア。イギリス人と日本人のハーフであり、訳あつてこの中華飯店『万々歳』で働く十三歳の少女だ。その雰囲気通り、おつむの方はあまりよろしくなく、考えなしに発言することもしばしばだ。開店したばかりで客は少ないといえども、魔法少女云々を叫ぶあたりがその証明といえるだろう。

「こ、こ、こらーっ！ なに言ってるのフェリシア！ あ、なんでもないんです、なんでも！ 昨日『ポリキュア』を見たせいで魔法少女にハマっちゃったみたいで……アハハ」

そんなフェリシアの言葉を聞いて、慌てて他の客に弁明するー二人しかいないがー少女。こちらも少しお馬鹿な雰囲気だが、少なくとも常識は弁えている様子だ。名は『<sup>ゆいっる</sup>由比鶴乃』。年はほむら達より少し上、女性の黄金期ともいえる花の女子高生だ。この『万々歳』の店主の一人娘であり、フェリシアと同じく神浜の魔法少女の一人でもある。

「ご、ごめんねうちのフェリシアが…」

「大丈夫よ。気にしないで」

「それより早く注文させてくれよ…」

「はいはい！ オススメは炒飯だよー！」

「…メニューには『五十点炒飯』って書いてるけど…」

「へ？ …フェリシアー!!」

「だってみんな五十点って言ってんじやんか」

「だからって書くなー!!」

漫才のようなやり取りに苦笑するほむらとさやか。杏子は早く何か腹に入りたいと、机に突っ伏している。その様子を見た鶴乃が慌てて注文を取り、厨房へ伝えに走った。残ったフェリシアは、好奇心の強そうな目で会話を続ける。

「姉ちゃん達、神浜は初めてなのか?」

「ええ、そうよ」

「んじや、魔女には気を付けろよ。俺はよくわかんないけど、他の街よりこの方が強いからな」

「へえ……面白そうじゃん。なら腕つぶしに自信ありってどこか?」

「おう! 傭兵やってるからな! 報酬次第で姉ちゃん達も助けてやるよー!」

「ははっ……言うじゃねーか。ま、言うだけならタダだからねえ……ちなみにどのくらい取ってんのさ」

「たけーぞ? 一回千円だ!」

「ぶっ……!」

「ゴホッ、ごほーっ」

「ほ、ほむら? 大丈夫?」

出された水を口に含んでいた杏子とほむらは、フェリシアの安売りにっぷりにむせた。魔女との戦いなど、それこそ命懸けだ。それが千円……価格破壊というレベルではない。

とはいえ魔法少女の大半が学生だということを考えれば、お小遣いの数割、あるいはほとんどを占める値段ともいえるだろう。高校生以上ならばともかく、働くことのできない中学生以下にとっては妥当と言えなくもない。

しかし千円……ほむらは瞠目した。そして次に思ったのは、もしや戦力増強のチャンスではないだろうか、という点だ。彼女が言った通り、報酬次第で引き受けてくれるのならばこれほど有難いこともない。後は実力と日時の都合、ワルプルギスの夜という伝説に対し頷いてくれるかどうかだけだ。

「……ほむらは彼女の胸元にそっと三万円を差し込んだ。」

「ふあっ……!?!」

「フェリシア、後でお話ししましょう?」

「す、するする! いくらでも付き合おう!」

「なにやっつてんのお前……」

ほむらが選択したのは、バブリーなオツサンがキャバ嬢を札束で叩くようなやり方であった。しかし効果は靦面であり、一瞬にしてフェリシアはほむらをパトロンとして認めたようだ。

そうこうしている内に、鶴乃が厨房から舞い戻る。仕事はいいのかという疑問はもつともだが、既にほむら達以外は食事を終えて去ってしまった。そして新しい客もいない……そう、『万々歳』は閑古鳥がちよくちよくと訪れる店なのだ。

「いやー、ごめんごめん。それで……魔法少女ってほんと?」

「あつと、あたしは違います。この二人が……」

「暁美ほむらよ」

「佐倉杏子だ……ご飯まだ?」

「あはは、もうちよつと待ってね。あ、わたしは由比鶴乃っていうんだ。神浜……いやー! 世界最強の魔法少女だよ!」

「あつそ」

「むー! 信じてないなー!」

「それより、少し聞きたいことがあるのだけど」

「んー? なになに?」

やたらとテンションの高い鶴乃とフェリシアに辟易しながら、ほむらは目的の組織……『蒼海幫』の情報について尋ねる。魔法少女がその組織に属しているのならば、噂くらいは知っているかもしれないと判断してだ。

「蒼海幫? うん、知ってるよ。ゴミ掃除して街を綺麗にしてくれたり、通学路の見回りとか、あと迷い猫探しとか! すごい良い人達だよね」

「……」

「……」

「…杏子？」

「い、いや…：ほら、悪い噂は聞かないって言ったじゃん」

「ただの慈善活動団体にしか聞こえないわ」

「う…：うぐ…：いや！ 悪い奴ほど善人面するもんさ。おおかたそいつ等も裏でなんかしてんじゃねーのー」

「それは聞き捨てならないネ！」

「ー誰だー」

杏子が根拠のない罵倒を口にした瞬間、店の扉が勢いよく開かれる。そこにいたのは、あまりにもこの店に似合ったチャイナ娘ー蒼海幫の魔法少女『純美雨<sup>チユンメイユイ</sup>』であった。悪事は千里を走るといいうが、悪口は走る前に聞かれるものだ。自らの属する組織が謂れない悪口の対象になっていければ、彼女はそれを懲らしめることに躊躇などしない。

「あ、あわわ…：本物っぽいの来ちゃった…：！ 看板娘の地位が…：！」  
「どうでもいいから安心するネ。それよりお前、いま蒼海幫の悪口言たヨ。ワタシ、家族の悪口言われてそのままにするほどお人好しないネ」

「うぐ…」

どちらが悪いかというならば、間違いなく杏子が悪者だろう。それを理解しているからこそ、バツが悪そうな表情で顔を反らしているのだから。

剣呑な雰囲気で見つめてくる彼女を見て、ほむらも立ち上がる。経緯はどうあれ、目的の人物と早々に会えたのは幸運と言う他ないだろう。もし蒼海幫が単なる慈善団体だったとしても、魔法少女との繋がりは決して無駄にならない。先程のフェリシアがいい例だ。

「…お前ハ？」

「暁美ほむらよ」

「そうカ。ワタシはその奴に用があるネ。どいてくれないカ？」

「あの娘とお喋りしたいなら、私を倒してからいきなさい」

「い、いや普通に謝るって…：あたしがわるかー」

「了解ネ。表へ出るヨロシ」



「ええ」

「おーい…」

謝罪を口にする杏子を無視して、ほむらと美雨は店の外へ出る。美雨にとつては単なる障害の排除。ほむらにとつては関係を築くにあつたの取っ掛かりだ。

マミ、杏子、さやか、三者をメインとして……時には更に別の魔法少女達とかかわり合い、敵対してきたほむら。どういった相手にどういう付き合い方をすればいいかの経験は積んでいる。

美雨は杏子タイププー筋と面子を重んじ、魔法少女としての実力が両者の関係性にかんがりの影響を及ぼす性格だと推測したのだ。故に戦闘の機会を無理矢理つくった。

自分が悪いと自覚しているなら、杏子はきっちり謝罪する。どのみち和解するのならば、この機会を無駄にするのは勿体ない。プーほむらはそう考え、行動に移したのだ。

「…考えを変えるなら今のうちネ」

「一つ提案があるのだけど」

「…？」

「敗者は勝者に従う」……どうかしら」

「ふっ……いいネ、シンプルで解りやすいヨ。強そうには見えないけれど、本当にそれでいいカ？」

「問題ないわ。私に勝てる魔法少女なんて存在しないもの」

「ふーっ！ ハアアア！」

『蒼碧拳』プーそれが美雨の使う武術であり、最大の武器だ。魔女に對してならばともかく、対魔法少女戦ともなれば神浜でも五指に入る腕前だろう。然して離れてもいないこの距離、そして合図ありきでの勝負。素のほむらであれば、百回やって百回負けるような相手だ。

ギャラリーとして出てきた鶴乃とフェリシアも、美雨の勝ちはず揺るがないと見ていた。この二人も神浜では上位の魔法少女故に、大体の戦闘力は見れば解る。

かなりの差があろうともそれを覆しうるのが魔法少女だが、しかしほむらは明らかに『弱そう』に見える風貌だ。遠距離戦であれば勝負

は解らずとも、近接戦においての強みを一切感じない。

勝負は一瞬でつくー杏子以外の魔法少女は、それを確信していた。いや、杏子も確信してはいたのだ。違うのは勝者と敗者の予想、それだけ。

「ーハアツ」

「…っ！」

なんの前兆もなく美雨の背後に現れるほむら。既に攻撃の体勢に入っている少女の、その軸足を払う。重心が偏っていた彼女はそれだけで転倒しー瞬間、曲芸染みた動きで体を立て直し、ほむらに蹴りを放つ。しかし無理な体勢からの攻撃は大した威力を発揮しなかつたようだ。

盾を構え、蹴りを弾くと同時にまたも時を止めるほむら。なるほど、神浜の魔法少女は一筋縄にいかないようだと認識を改める。けれど彼女の優位は動かない。そもそも時を止める者に対し有効な手段を持つものなどごく僅かだ。

魔法の詳細を知っているならば対策もとれるだろうが、初見でほむらに勝利できる魔法少女はまず存在しない。勝てるとすれば、現代兵器をもものもしない防御力を持つ人間くらいだろうか。

ほむらは逆立ち状態の美雨に鎖を巻いていく。銃で決着をつけるのは、美雨のような超反応タイプには向かないのだ。いつのまにか後頭部に銃器を突き付けられていても、負けを認めるより先に体が反応する可能性がある。

しかし密着して関節などを極めようものなら、予想外の一手が起きた時に対応ができない。体が触れていた場合、時間を停止させても相手がごとになる。そうなれば負けはほぼ確実だろう。

故に鎖だ。気付いた瞬間には拘束されている。誰もが解る決着のつきかただ。

「…っ、なっ…!?!」

「終わりね」

そのまま地面に倒れそうになる美雨を抱き止め、決着を告げる。杏子は当然だとばかりに頷き、鶴乃とフェリシアは何が起こったのか理

解できず驚愕していた。ほむらの冷静沈着な雰囲気と強さ、そして内に秘めた優しさが『あの人に似ている』とーそう思いつつ。

ーそして一部始終を見ていたさやかは、ほむらの勇姿に悶え乙女心をときめかせていたのだった。

## 悪夢

ネット、あるいは街道でよく目にする『募金』。アフリカの恵まれない子達のため、災害の支援のため、高額の手術費用のためと、理由は様々だ。ちなみに最後の『手術費用』の募金に関してよく勘違いされるのは、手術そのものにかかる費用への誤解だ。

そもそも日本は医療保証が充実しており、海外のそれとは比べものにならない。如何に難しい手術といえど、患者が払う金額が数百万、数千万に上ることはありえない。金額に上限が設けられているためだ。延命治療を継続し、年間での医療費が馬鹿げた金額になることはあっても、手術そのものにうん千万、うん億円などと吹っ掛ける医者にはブラックジャックくらいのもだろう。

ならば超高額の手術費用が何故必要なのかといえ、海外へ赴く必要があるからだ。日本で認可されていない、しかし有効な治療を受けるためにはまず国を出ることが前提だ。それには渡航費、滞在費、そして医療費がかかる。

海外での手術費用というのは、たとえ簡単な盲腸などであってもべらぼうに高い。難病治療ともなれば桁が変わり、米国などでは『医療費破産』という言葉も珍しくはないのだ。

渡航費の方も、患者によってはそれだけで百万、千万単位となる。自力で渡れるというならばともかく、動けない上に命の危険がある患者を海外へ運ぶとなれば専用の飛行機が必要だ。

医療器機が揃った専用飛行機のチャーター費用、そして医師の付き添い。恐ろしい金額になるのは誰でも理解できるだろう。そしてその手続きに関しても相当な手間がかかる。

金を用意し、手続きをする。

ただそれだけのことかとても難しい。特にほむらにとっては、金の出所すら悟られてはならないものだ。悪どい金とはいえ、そんな大金を気軽に使用できるならば、悪党どもが資金洗浄ロンダリングに腐心する必要もないというものだ。

少なくとも一ヶ月以内にどうこう出来る問題ではない……それど

ころか、ワルプルギスの夜への対策を考えれば、掛けられる時間は更に少なくなる。それを解決するために、当初は杏子の魔法に頼ることを考えていたほむら。苛烈な性格や戦闘スタイルとは裏腹に、彼女の固有魔法は幻覚、幻惑に特化しているのだ。

自身の願いを否定し続けた生活を送る内に、使用出来なくなった彼女の魔法。しかし先日から復活を遂げたそれを見て、ほむらは杏子の精神状態に問題がないことを確信し、だからこそ神浜行きの際にそのような試し方をしたという事情もあった。

しかし問題もある。その固有魔法は視覚的に騙すことは出来ても、催眠状態に陥らせるほど強力な能力ではないのだ。精々が軽い暗示程度であり、細心の注意を払いながら、綱渡りのように事を進めなければならぬ。書類の改竄なども含め、非常に難度の高いやり取りが連続するだろう。ほむらはそう考えていた。

結局それが杞憂だったことに、彼女は自身への『追い風』を感じた。今までのどんな世界より上手く進んでいるこの時間。そんな中で新しい難事を抱えてしまったというのに、それを解決するのにぴったりの魔法少女と出会えた。それを追い風と言わずしてなんと言うのだろうか。

神など信じていないほむらであったが、それでも彼女――純美雨との邂逅には運命というものを感じ、感謝した。美雨の固有魔法……『事実の偽装』という、ほむらの時間停止にも匹敵する強力な能力。

美雨が魔法少女になった際に願った奇跡。それは所属する集団の救済――すなわち蒼海幫の危機を救うことだった。現在こそ平和な互助組織ではあったが、過去には杏子の情報通り危険な顔を持っていたこともある集団だ。戦後まもなくは相当過激なこともやらかしており、現在においても各方面にそれなりの影響力を持っている。

そんな彼等を疎ましく思う勢力も存在し、様々な陰謀を経て蒼海幫は一度窮地に陥った。犯罪の濡れ衣を着せられ、国家権力の標的となり、あわや壊滅の危機といったところで――美雨が奇跡を願ったのだ。

既に蒼海幫を壊滅させる手筈は整っていた。令状、指名手配、ガサ

入れの日時……それを覆す奇跡とは、つまり事実の改変。蒼海幫を追い詰める全てを、その資料やデータごと無かったことにすればいい。歴史の改竄ともいえる奇跡は、彼女に『事実の偽装』という強力な固有魔法をもたらす結果にもなったのだ。

不自然な大金。唐突な患者の移送、無かった筈の予定。付随する各所への申請、その許可。

諸々の事実は不自然にねじ曲げられて、しかし気付くものはいなかった。ほむらの時間停止、杏子の幻覚と暗示、美雨の偽装能力の三つが揃えば出来ないことの方が少ないだろう。それは必然の結果でもあったのだ。

「本当にありがとう、美雨」

「気にしなくていいよ、ギブアンドテイクだしネ。アイツら、ワタシにとっても目の上のタンコブだったヨ。金も武器も無くなったら、暫くはおとなしくなるネ」

「それでもよ。貴女と会えて本当によかった」

「…フフ、あんまり言われると照れるネ。また何かあつたら協力するヨ。友と家族は絶対に見捨てない……それが蒼海幫の掟ネ」

「ええ、ありがとう……それじゃ」  
「拜拜」  
バイバイ

僅か数日で事を終えたほむらは、美雨と友宜を結んだ後別れを告げる。ワルプルギスの夜に関してはまだ話していないが、力を貸してもらえる可能性は充分にできた。彼女の人脈の広さや単純な強さも考えると、良い縁を結べたのだろう。手を振って見送る美雨に微笑みを返し、ほむらは見滝原へと帰還した。

自宅へ戻り、玄関を上がった途端に飛び付いてきたなぎさをあやししながら、居間へ向かうほむら。紅茶を飲みながら寛いでいたマミと杏子へ声をかけ、事の顛末を話した。

「ま、一件落着つてどこか」

「ええ。といっても本命……ワルプルギスの夜を倒さないことには気を抜く暇も無いけれど」

「なぎさも頑張るのですー！」

「ダーメ。伝説の魔女が相手なのよ？　いくら魔法少女でも、なぎさみたいな小さい子はお留守番に決まってるわ」

「むー！　マミは心配性なのです！　こう見えてもなぎさは強いのです」

「そーいやまだ戦ってるって見てねーな……よし、いっちょ魔女探しと洒落こむか！」

「ちよつと、佐倉さん？」

自身を救ってくれたほむら、病院で母親に回復魔法をかけ続けてくれたマミ、治療の手筈を整えてくれた杏子、それぞれになぎさはとても懐いている。大好きな彼女達に恩を返す機会ともいえるワルプルギスの夜の襲来は、彼女にとって好機でもあった。

しかしそれには参加するなという過保護な言葉に憤慨し、抗議の代わりとでもいうようににもぞもぞと移動する。ほむらの膝上からマミの背中に場所を変え、小さな顎で頭をぐりぐりする様子はとても微笑ましい。しかしほむらはそれを見て強烈な悪寒に襲われた。今にも首無し魔法少女が誕生するような、謎の悪寒であった。

「なぎさがただのお子ちゃまなら甘やかしたっていいさ。だけど小さかろうがなんだろうが魔法少女だ。四六時中こいつの側について守れるってんならともかくさ、一人で戦うことだってあるだろ？　戦わせないのが優しさじゃなくて、戦い方を教えてやんのが優しさなんじゃないのか？」

「…それはそうかもしれないけど、だからってワルプルギスの夜を相手にするなんて…」

「だからなぎさは強いって言うてるのですー！」

「それを見るために今からー……っ！　…ははっ、グッドタイミングじゃん。魔女でも空気読むことあるんだねえ」

マミの言っていることも理解でき、杏子の言っていることも間違っているのではない。ほむらとしてもなぎさの参戦はどうすべきか悩んでいるだけに、二人の会話に口を挟めずにいた。

そんな状況で、見計らったかのように出現した魔女の反応。これ幸いとばかりに、杏子はなぎさを伴っての魔女狩りを提案した。そして

当人は勿論のこと、他二人も渡りに舟とばかりに立ち上がった。仲間の戦闘能力の把握は、連携において非常に重要だ。ワルプルギス戦の参加については置いておくとしても、なぎさの力を見る良い機会と言えるだろう。

「この反応だと……工場地帯の方かしら」

「ええ、おそろくね。急ぎましょう」

その場所に現れるとすればまず間違いなく『ハコの魔女』だろうとほむらは予想する。人の心を無遠慮に覗き、トラウマを映し出す意地の悪い魔女だ。その関係上、過去に辛いことがあつた魔法少女ほど敗北しやすい性質を持っている。

絶望と魔女化がイコールで結ばれる魔法少女にとって、中々にやりにくい相手と言えるだろう。相性で言うならば、四人全員が『悪い』とはいえ耐久性の無い脆弱な魔女でもあるため、速攻を仕掛ければ容易く仕止められる。謂わば能天気な脳筋魔法少女と相性の良い魔女である。

「っ……！ 相当集めやがったな……！」

「マミ、お願い」

「ええ、任せてちょうだい！」

結界に近付いたところで、魔女に魅入られた人々が虚ろな目をして集まっている様子が彼女達の視界に入った。混ぜてはいけない洗剤を一つのバケツに入れ、死に至るガスを発生させようとしている。集団自殺をしようというのだろうか。

かなり狭い密室でもない死亡は難しくないだろうかーという疑問はきつと野暮だ。魔女の口付けを受けた時点で、思考能力などあつてないようなものである。つまり操っている方のおつむがよろしくないのだろうか。

しかしそんなことは関係ないとばかりに、マミが魔法を繰り出す。操られ襲いかかってくる人々に対し、その全てをリボンで拘束していったのだ。この汎用性の高さこそが、彼女を強者足らしめている最大の要因と言えるだろう。

危害を加えたくなければ拘束を。敵に近寄られたならば銃身や砲



身で直接反撃し、遠距離ならば銃撃や砲撃を。回避が不可能ならばリボンで簡易結界を作り出し、そしてそれは他人にさえ及ぶ。

近距離、中距離、遠距離、拘束、回避、防御、全てを高い水準でこなし、更に高精度のリボン操作という特性上サポートすら得意とする魔法少女。それが巴マミだ。ほむらは彼女と出会った時『現役最強』という言葉で称賛を送った。それはお世辞でもなんでもなく、あらゆる局面において対処が可能なマミを、心底から強者であると理解しているからだ。

「ーあそこが魔女の結界の入口ね。みんな、準備はいい？」

「当然っしょー！」

「ええ、問題ないわ」

「なぎさの強さを刮目するのです！」

「お前ガキの癖に難しい言葉知ってんな…」

それぞれが魔法少女の衣装に身を包んでいるが、ほむらはなぎさのコスチュームを見てなんとなく既視感を覚えた。特に彼女が持っているラツパのような武器の柄に記憶を刺激されている。

しかしいま考えても仕方ないかと、意識を魔女に向ける。この結界は地面が存在せず、無重力空間に近い。しかし『意思』によって推進力を得ることが出来るため、通常では無理のある三次元機動を可能にしていた。

勝手が違うデメリットと縦横無尽に動けるメリット、相殺されてプラスマイナス0といったところだろう。ちなみにこういった空間への適応力は、大人よりも子供の方が高いことが多い。有りのままを受け入れる柔軟性が失われていないからだ。

「モベホーンの錆さびになるのですー！」

「ラツパの錆さびってなんだ…？ ーにしても…！ マジか…！」

「嘘でしょ…？」

先日マミが倒した魔女ー『薔薇園の魔女』の結界で見せた華麗な舞。襲いくる無数の使い魔を銃身で、あるいは蹴りで、マミ自身がミキサーの刃になったかのように高速で敵を駆逐していく一幕があった。

いま目の前で繰り広げられている戦闘は、その焼き直しのような美しさだ。細い木の枝のような脚が、四方八方から飛びかかる使い魔を正確に捉え蹴り飛ばす。

前方から群れがくれば、ラツパから吹き荒れるシャボンが敵を包み遠ざけ、離れたところで内部ごと破裂する。およそ一桁児童の戦闘展開とは思えない、強者の蹂躪がそこにあった。

「なぎさだって一緒に戦えるのです！ ワツフルの夜なんかちよちよいのちよいなのですよ！」

「なんだその旨そうな伝説は」

「うーん……これは流石に……認めるしか……ないわよねえ」

「心強いわ」

「えへへ……ほむらはなぎさが守るのです」

幼女に守られる自分を想像してしよんぼりするほむらであったが、およそ半月後には現実になっているであろうことを思うと笑い話にもならない。

とはいえ強い仲間が増えたのは喜ばしいことだ。何度も敗れたワプルギスの夜を相手取るには、戦力はいくらでも欲しい。そもそもなぎさを残していったとして、見滝原が壊滅すればどうなるというのか。

仲間を失い、帰る家すら失い、絶望に暮れて魔女化するだけではないだろうか。それならば共に戦い勝利を掴みとる方が余程いい。ほむらはそう考え、誇らしげに胸を張っているなぎさの頭を優しく撫でた。

「そろそろ近いわね……」

「ま、使い魔も大したことないし楽勝でしょ」

「油断は禁物よ」

「へーへー」

結界深部――魔女の根城。使い魔を蹴散らし、ボスを追い詰める魔法少女達。そこには……油断があった。警告を発しているほむらですら、過剰な戦力のせいかわかぬを隠しきれていない。

それは魔女の情報を知っているという傲りおごりもあったのだろう。『ハ

この『魔女』は複数の魔法少女で当たった時、負ける方が難しい相手だ。精神攻撃しかしてこないというのに、個別にしか対応できない『ハコの魔女』。

仮に一人が精神を乱されても、他の魔法少女が手早く倒せばそれで終わりだ。それ故の油断——そしてそれが悲劇の幕開けだったのだろう。ちよつとした気の緩みが死に繋がる……そんなことは解りきっていた事実だった。

『追い風』が吹いているなどと……順風満帆などと、まだまだ途中でしかないのに感じてしまった。きっとそれは報いだっただのだろう。希望は容易く絶望に転じる。ほむらはそれを誰より知っていた筈だ。それでも——油断してしまったのだ。

「あれが魔女か……？ 小っさいなおい」

「テレビ……？ 何か映ってるわ……」

忌まわしい過去が映し出されていた。誰にも知られたくはない、悪夢の先にある絶望が。時には追求され、涙を溢したこともある。もう大丈夫と強がって、それでも何度も失敗した。

——国が映し出されていた。

——日本列島が映し出されていた。

——日本列島の形をした“染み”が映し出されていた。

——ぶつちやけると布団におねしよをした証拠が映し出されていた。

「わああ——!! あー！ あー！ み、見ちやだめなのですよ——!!」

「あらあら、うふふ。なぎさはまだ子供だもの、仕方ないわ」

「えげつねえな……」

「綺麗な形ね」

「あう、うううう——!!」

顔を真っ赤にして怒るなぎさ。凄まじい勢いでシャボン玉が吹き荒れ、魔女とその取り巻きに付着していく。隙間なく埋め尽くされ、一つの巨大なワタアメのように変化したところで——その全てが一斉に爆発し、結界そのものを揺るがす程の衝撃となった。

景色が歪み、世界が現実へと戻る。なぎさも現実逃避をやめて現実

へと戻った。しかし幼くとも彼女は乙女だ。他人におねしよの跡を見られて平静でいられる訳もない。

俯いてぶるぶると震えている彼女を、ほむらは優しく抱き締めて耳元で囁く。おねしよなど誰もを通った道だと。小学生なら当たり前の失敗だと。裸踊りの方がよっぽど恥ずかしいと。

「…また布団を汚すかもしれないのです」

「そんなの気にしないわ」

「…一緒に寝てるほむらまで汚れるのです」

「むしろ嬉しいくらいよ」

「ただの変態じゃねーか」

「黙りなさい」

野暮な突っ込みを入れてくる杏子にピシヤリと言い放ち、なぎさを慰め続けるほむら。その甲斐あってか段々と立ち直り、幼い魔法少女は笑顔を取り戻した。

全員が気を取り直して周囲を見渡せば、マミが拘束していた人々が気を失って倒れていた。魔法の口付けは問題なく解除されているようで、命に別状はないだろう。発見されやすいように解りやすく被害者を並べ、今夜の戦いは終了ーといったところで、ほむらは被害者の中に知り合いを見つける。

『志筑仁美』。毎度毎度さやかから恭介を奪い続ける、生粋のネトリスト……とほむらは認識している。なんといっても『さやか魔女化』の元凶第二位だ。勿論彼女に責任を問うほど愚かしいことはないが、とにかく上条恭介と志筑仁美はタイミングの悪さに定評があるのだ。ほむらの視点からすれば、わざとやっているのかと言いたいくらいにさやかを魔法少女化させ、絶望させる。

嫌っているわけではない。しかしなんとも言えない思いがあるのも事実だ。世界によつてはまどかやさやかと友人になることもあるのだから、それなりに縁を結んだこともある。しかし彼女は習い事に忙しく、ほむらは一ヶ月という短い期間でやることが目白押しだ。接点の無さが関係の希薄さを助長していると言えるだろう。

「…」

「どうしたの？ 暁美さん」

「先に帰っていてくれるかしら。クラスメイトを送っていくわ」

「あら……お友達まで巻き込まれていたのね。了解、気を付けて帰ってきてね」

「お風呂沸かしておくのです！」

「ええ、後で一緒に入りましょう」

名家のお嬢様が集団自殺を目論んでいたとなれば、完全無欠に醜聞だ。催眠だのなんだのと世間を賑わすのはいつものことだが、彼女も頻繁に巻き込まれている。常であれば気にせず放置するところだが……というよりも、この事件はさやかが解決することの方が多いのだ。

この時点では戦力として当てにできるため、魔法少女の馴らし運転として放置が基本だ。さやかとは相性の良い魔女であるため、負けるのを見たことがないというのも大きい。

なんにしても、仁美にとってはかなりの厄介ことになるこの事件。病院での検査を始め、私生活における自由が更に少なくなるという事態に陥る筈だ。

それは少々忍びない……そう考えたほむらは、気を失っている仁美を抱き上げた。彼女が家を抜け出したことに気付かれるのは、日を跨いでからというのが多い。夜遊びを疑われるような娘ではないのだろう。時間停止を使用すれば、きつと何事もなかったと装える。

「う……ん……」

「……」

仁美の家——豪邸に辿り着き、どこから浸入しようかと周囲を確認するほむら。そうこうしている内に腕の中の少女が覚醒しかけていることに気付き、慌てて時間を停止させるが……少し遅かったようだ。

「暁……美……さん？ ……私………いったい……」

「……っ」

全てが灰色になった世界で、二人だけが色付いている。抱かれている少女はどこか惚けた思考で、まだ上の空だ。抱いている少女は、ま

だ間に合うかと一気に二階のバルコニーへと跳躍した。

部屋への扉は鍵がかかっていたが、魔法少女に対しそんなものは意味がない。容易く開錠し、ほむらは抱えていた荷物をベッドに押し込んだ。さっさと帰ろう、そう思っただけで離れる彼女であったが、スカート裾を弱々しく掴まれていることに気付く。

「なん……だか……怖い……目に、遭いましたの。でも……暁美さんが……助けてくれた……」

「…夢よ。目を瞑って、眠りなさい。起きたらいつもと変わらない日常が待ってるわ」

「ほん……とう……？」

「ええ。ゆっくりお眠りなさい……泣く必要なんかないわ。何も怖いことなんて無かったのだから」

目の端から零れる涙を、懐から取り出したハンカチで拭う。不安そうにすがり付く彼女の指を優しく開き、ほむらは瞼まぶたの上にそっと掌を乗せた。

「ゆ……め……」

「そう。悪夢は終わったわ。今度は楽しい夢を見ましょう？」

「ホモも……ゆめ……」

「そ、それは夢じゃないわ」

夢ではなく勘違いと言っただけでやっていたところだが、さやかのためには誤解を解くわけにはいかなかった。落ち着いたのか、それとも諦めたのか、すうすうと寝息を立て始める仁美。

ほつと安堵の息をついて部屋を後にする。その際、枕元にハンカチを置き忘れてしまったことが……ほむらの最大の失敗だったのだろう。ホモ夢という言葉に動揺したが故の失敗だったのかもしれない。

——翌朝、いつも通りにほむらは登校した。少し不安はあったものの、魔女に操られている状態など、実際問題として夢のようなもの。なんとなく違和感はあるにしても、証拠など何もないのだから大丈夫。何か聞かれたとしても、知らぬ存ぜぬで通そうと考えていた。

教室の扉をスライドさせる。彼女の登校に気付いたまどかときやかが手を振り、笑っている。そんな気安い関係になれたことを喜び、

ほむらも彼女達にー仁美を含めた三人に近付いていく。しかし到着するよりも前にその内の一人が立ち上がり、ほむらに駆け寄った。

「あけーいえ、ほむらさん。これ……受け取って頂けませんか？」

「…え？」

ほむらによく似合う、薄い紫色のハンカチ。一目で値段の高さが見える質の良さ。そんな贈り物を渡す仁美の頬にはーうっすらと赤みが差していた。

## 交わる運命

ワルプルギスの夜——その本当の脅威。それは街一つを容易く破壊する攻撃力でもなく、結界を持たない特殊性でもない。ただただひたすらに“硬い”という点だ。あらゆる現代兵器をその身に受け、大規模な工場を一つ犠牲にする程の爆発を食らって尚、何事もなかったかのように佇む堅牢さ。それこそが伝説たる所以といえるだろう。

問題はその硬さの質である。魔法少女の攻撃が現代兵器を上回るかといえば、まずありえない。しかし魔法少女の攻撃と現代兵器のどちらが魔女に有効であるかといえば、前者に軍配が上がるだろう。物質的な部分より魔力的な側面の方が強い“魔女”。物理的な破壊力よりも、その攻撃に魔力がどれだけ込められているかが重要だ。

とはいえ物理攻撃に意味がないかといえば、そんなことはない。よほど強い魔女でもなければ、人間の英知の結晶たる兵器に抗うことはできないだろう。問題は『ワルプルギスの夜』という魔女が、その“よほど”に分類されているという事実だ。ほむらの貧弱な魔力を兵器に纏わせても、ほとんど意味がない程の硬さ。

故にこの魔女を討伐するにあたって必要なものは『超火力を持った魔法少女』である。その点を鑑みて、マミと杏子はどれほどのものかといえば——『ワルプルギスの夜』を討つには少し足りない。彼女達の最大の一撃は確かに相当な火力を持っているが、それは経験と努力によつて得たものが大部分……つまりは後天的なものだ。杏子は槍の技巧や幻覚による戦いが持ち味であり、マミに至っては“リボン”などという攻撃には向かない魔法が基本になっている。伝説の魔女を相手取るには、元々の魔法が攻撃的な性質を持つ魔法少女——特に一点火力に長けた攻撃手段を持つ者が必要なのだ。

そんな魔法少女の助力を、ほむらは神戸市に求めた。美雨に聞いただけでも相当に多種多様な魔法少女が身を置く街だ。一年ほど前、魔法が増え始めるまでは魔法少女同士の争いも絶えなかった故に、戦闘に長けた者が多いこともほむらにとつては好都合である。

欲しい人材はマミのような遠距離砲撃役、それを護る守勢に長けた



魔法少女。魔女に近いレベルで厄介な『ワルプルギスの夜の使い魔』——それを狩る、素早い遊撃役。ほむらのようにサポートにこそ本領を発揮する援護役。そして戦況を決する一撃を持った火力役だ。

奇しくも、もつとも必要な火力役とは既に交渉を終えている。『深月フェリシア』——彼女の武器であるハンマーは凄まじい破壊力を有する。特に必殺技『ウルトラグレートビッグハンマー』は、そのネーミングセンスを気にしなければ魔法少女トップクラスの一撃だろう。

猪突猛進かつ武器がハンマーという都合上、魔法少女同士の戦闘では小回りが利かず相性負けも有り得るが、対魔女戦において彼女ほど心強い存在もいない。雇うにあたって彼女の実力を試したほむらの驚きは相当なものであった。なまじ『千円で雇える程度の傭兵』という先入観があっただけに、その驚きもひとしおだったのだろう。

しかしまだ足りない——元より火力偏重主義のほむらだ。火力役が一人だけというのも少々心もとなく、他の役割の魔法少女も探すために神浜へ足を向けるのは当然だった。

基本的に神浜の魔法少女に対する情報源は美雨、フェリシア、そして鶴乃の三人だ。しかし知り合って間もない間柄で踏み込んだ事は聞き辛く、そして魔法少女は誰もが好意的とは限らない。事情を話し協力してもらおうにしても、人は慎重に選ぶべきだ。そして現状でワルプルギスの夜の襲来を伝えたのはフェリシアのみである。つまり彼女はほむらが戦力を集める理由と、強い魔法少女を探していることに理解があるという訳だ。

しかし今時の中学生であるというのに、スマホどころか携帯すら持っていない彼女と話をするためには、住居まで赴かなければならない。契約のこともあつて住所は把握していたため、地図に従って『暁美ほむら』『巴マミ』『百江なぎさ』の三人はフェリシアの住まいに辿り着いたのだが——

「…お屋敷？」

「おっきいのです…」

「良いところの娘だったのかしら……黙っていれば外国のお嬢様みたいではあつたけれど」

住所の通りであれば、その建物がフェリシアの家で間違いない。しかし「傭兵」という印象からは程遠い、かなりの大きさの洋館が彼女達の目の前に佇んでいた。どう考えても労働基準法違反なバイトをしていたことも相まって、前情報からの想像とは異なっていたのだ。パチパチと目を瞬かせて棒立ちになる三人——そんな彼女達に、背後から声がかけられる。

そこにはママ達よりもかなり年上であろう女性が、買い物袋を両手にぶら下げて立っていた。髪は腰まで届くほど長く、ほんの少しだけ青みがかった髪色が艶やかに揺れている。雰囲気はどこかほむらに似た様子を思わせ、姉妹と言われれば納得できる顔立ちだ。そして指には魔法少女の証たるソウルジェムの指輪が嵌められていた。

「…家に何か用かしら」

「——ごめんなさい、この家に深月フェリシアさんが住んでいると聞いたのだけど…」

「あつ……！」

「…？ どうしたの？ マミ」

彼女がこの家の住人だと判断したほむらはフェリシアの所在を尋ねようとしたが、その途中でなにかに気付いたようなママの声に言葉を止める。まじまじと女性の顔を見つめるママの表情は、どちらかというど好意的な雰囲気だ。もしや知り合いであったのだろうか、続く言葉を待つほむら。しかし彼女から発されたのは、常の印象とは異なる少々ミーハーなセリフであった。

「あの、もしかして……『B i B i』の七海さんですか？ ファツションモデルの！」

「…ええ、そうよ。どうやって住所まで調べたのかは聞かないけど、仕事とプライベートは分ける主義なの……申し訳ないけれど——」

「あつ、ごめんなさい。えっと、それは偶々で……今日は深月フェリシアさんを訪ねてきたんです」

「フェリシアを？ ……あの娘とはどういう関係なのかしら」

「雇い主と傭兵の関係よ——魔法少女の、ね」

「——そう。まったくあの娘は……みかづき荘専属の傭兵って約束

を忘れたのかしら……忘れたんでしようね。はあ……」

ファンを無下に扱うわけにもいかないが、プライベートに踏み込んできてほしくはない。そんな雰囲気でもミミを牽制する女性——『七海やちよ』。

神浜西エリアのリーダー的な存在でもあり、実力の方も折り紙つきだ。なんといってもその魔法少女経歴は他のそれと一線を画す。マミのように二年間を生き抜いた魔法少女ですらベテランと呼ばれる界隈において、七年という長期に渡り活動してきた猛者だ。ほむらのような例外を除けば、世界有数の長命な魔法少女と言えるだろう。

というよりもそろそろ『少女』ではないことを気にしているくらいだ。ファツシヨンモデル兼大学生……ピチピチの十九歳、そしてギリギリ未成年の、色々気になるお年頃である。

マミにファンとして来たことを否定され、ほむらにフェリシアとの関係知らされた彼女は、ため息を吐きながら来客を案内する。ただでさえ多くの問題を抱えている現状、専属の約束をした筈のフェリシアが軽率に契約を交わしたのだから、そのため息も当然だろう。時間からして、もう帰っているだろう彼女をどうとちめるか考えつつ居間へと向かう。

「おかえりなさい、やちよさん……後ろの方達は、えつと……？」

「ただいま、いろは。この娘達は——」

「見滝原の魔法少女。暁美ほむらよ」

「こんにちは、お邪魔するわね。私も見滝原で魔法少女をやっている  
巴マミよ」

「百江なぎささなのです！」

「こ、こんにちは……環いろはです」

居間で彼女達を迎えたのは、桃色の髪を肩まで伸ばしている中学生程の少女。名前は『環いろは』——神浜へは失踪した妹を探しにきた、妹思いの優しい少女だ。紆余曲折を経てこの『みかづき荘』へ下宿しており、やちよやフェリシア、鶴乃を含んだ五人組のリーダーである。少しおどおどとした部分はあるものの、芯の強さと他人への思いやりを併せ持っている、チームの中核に相応しい魔法少女だ。

「フェリシアは？」

「えっと、デカゴンボールの新しいパツクの発売日だからって……さなちゃんを買に行きました」

「そう……というわけだから、少し待っててもらえるかしら」

「ええ、ありが——」

「ししよー！ やちよししよー！」

「…っ！ この声は…！」

ソファへと促され、腰を下ろすマミとなぎさ。ほむらも同様に腰を落ち着けようとするが、玄関から聞こえてきた快活な声を耳にしてぎくりと身を固まらせる。ドタドタと近づいてくる足音から身を隠すように、隣にいたやちよの背にしがみつく。その数瞬の後、意気揚々と居間に姿を現したのは『由比鶴乃』。先日ほむらも顔を合わせた魔法少女だ。

「ししよー！」

「うるさいわよ鶴乃。いまお客さんが来ているんだから、もう少し静かにしなさい」

「そう！ そのお客さん！ わたしの永遠のライバル！」

「なによそれ…？ この娘達がそうだっていうの？」

「むむ！ …あれ？ ほむらの匂いがしたのに…」

「匂い!？」

「あ！ いたー！」

「しまっ…！」

思春期真っ只中の少女として、匂いで所在を理解されたなどという事態は腹に据えかねるものがある。つい声を上げてしまったほむらは、近付いてくる鶴乃の盾にするようにやちよの腰に纏わりつく。まるで先生を盾にする小学生のようであった。後ろに回り込もうとする自称ライバルに対し、家主と思われる女性を中心にしてぐるぐると回転する少女達。三十秒ほどそれが続き、いったい何が起きているのかと混乱していたやちよも、ようやく気を取り直して鶴乃へ一喝した。

「いい加減にしなさい！ どうしたっていうのよ、もう…」

「まったくくだわ。もう決着はついたのだから、付き纏わないでほしいのだけど」

「あまーい！ 本当の絆を取り戻したわたしに死角なし！」

「はあ……せあっ！」

「へぶっ!？」

「真上からの攻撃は死角だったみたいね」

「や、やちよー……ひどい……」

やちよはとても聡明な魔法少女だ。ほむらと鶴乃のやりとりから、後者に問題があると判断して制裁を下した。最近は落ち着いているものの、かつては誰彼構わず戦いを吹っかけ、最強という称号を己のものにせんとしていた鶴乃だ。きつと似たようなことが起きたのだろうと判断し、ようやく腰から離れた少女に謝罪する。

「ごめんなさい……偶に暴走するのよ、この娘」

「気にしないで。助けてくれてありがとう」

「うう……」

「ほら、鶴乃も謝りなさい。それとなぜ暁美さんにこだわるの？」

「うう、ごめんなさい……でもしよー！ 何回挑んでも指一本触れ

ずに負けちゃうんだよ!! 最強の魔法少女としては……くうー！」

「貴女が——指一本触れずに、ですって？」

「うそ……」

鶴乃の実力を知るやちよ、そしていろはが驚愕の視線でほむらを見つめる。最強かどうかはともかくとして、鶴乃は自他ともに認める神浜の強者だ。彼女に勝利できる者はいても、まったく苦戦しないような魔法少女はいないと断言できる——そのくらいの実力は持っているのだ。故に信じられないものを見るような視線も当然といったところだろう。

そしてそれを受けるほむらは、むず痒そうに身を振らせていた。所詮は反則じみた固有能力のおかげなのだから、過大評価もいいところだ。実際問題として、時間停止がなければ真逆の結果になるのだから、謙遜ではなく客観的な真実である。

「ふふ、気にしない方がいいですよ。私も腕には自信がありますけど、

暁美さん相手だと罨を張るか先手を取る以外には絶対勝てないでしょうし」

「ふうん…」

見るからに弱そうなほむらとは逆に、マミは明らかに強そうだ。そんな彼女が絶対に勝てないと言うのだから、鶴乃の言葉も加味すれば疑いようのない事実なのだろう。やちよは一つ頷いてソファへと座る。それほどに強い魔法少女がなぜフェリシアを必要とするのか——何かを企んでいるのならば、暴かなければならないという責任感が彼女にはあつた。どんな魔女相手であっても、鶴乃を易々と降すような魔法少女と、更に二人の人員がいて足りないということはないだろう……そう考えて。

「暁美さん、貴女は——」

「ほむらでいいわ。それとごめんなさい、敬語が苦手なの……できれば気安く接してくれると嬉しいわ。生意気だと思うでしょうけれど」

「…そう。なら……ほむら、貴女はどうして——」

「やちよさあん!?!」

「え……ど、どうしたの？ いろは」

「だ、だって……あう……な、なんでもないです……」

「…?」

出会って五分で名前を呼び合う二人を見て、大声を上げてしまったいろは。自分でさえつい先日、ようやく名前で呼び合う仲になったというのに……そんな可愛い嫉妬だ。とはいってもその一件でやちよの心が融け始めたからこそ、他人への壁を取り払うことができたのだ。それがなければ、頼まれたところで下の名前で呼ぶことなどなかっただろう。

「え、と……気を取り直して、ほむら。どうして貴女はフェリシアを——」

「ただいまー!」

「ただいまです」

「…もしかして貴女の固有魔法、タイミングを外すような類のものかしら?」

「まったく的外れとは言わないけど、これに関しては偶然よ」

先程から機を外され続けている状況に、冗談半分ではむらを疑うやちよ。ほんの少しだけ能力に関する情報を得られたことに、情報収集癖のある彼女の好奇心が満たされる。神浜のウワサを調べ、ファイルにまでしているやちよ。目的あつてのことではあつたが、それを別にしても調査や探索といったことに知的探究心を刺激されるのだ。ちなみに自身が『ウワサを聞いて回る美女の噂』となっていることを彼女は知らない。

それはさておき、元気な声と共にみかづき荘の年少組が帰還したようだ。いろはと一学年程度しか変わらぬ彼女達だが、その雰囲気は幾分か幼い。元気いっぱいのフェリシアはもちろんのこと——もう一人の少女『二葉さな』も、引つ込み思案な性格のせいかな年齢よりは低く見られがちだ。とはいっても彼女は自身が願った奇跡のせいで、魔法少女以外に認識されない。

男であればほんの少しだけ嬉しいような状態であつたが、やはり誰にも気付かれないという寂しさは埋め難いのだろう。かつてはその寂寥感を埋めるためにウワサを求め、今はみかづき荘という温かな場所そこにそれを求めているのだ。

「——おー。ほむらじゃなか！ どしたんだ？」

「ええ、少し聞きたいことがあつて来たのだけど……それより先にお小言があるみたいね」

「へ？ ……うげっ」

「なにが『うげ』なのかしら？ みかづき荘の専属傭兵さん？」

「い、いや……なんつーか、そのさ、ほら……一日だけだつて言うし？

それに——この前の『アレ』の前だつたから……」

「…そう。はあ……それで、どうするつもりなの？ 確かにこつちの事情も事情だけど、一日だけなら私は構わないわ。それより内容の方が気になるといえば気になるかしら——住むところもご飯もあるし、お小遣いだつて多いとは言えないけど渡してるでしょう？ そんなに千円が欲しかったの？」

「い、いやその…」

「前金で三万と、成功報酬の十万で契約しているのよ」

「じゅ、じゅう——」

「まんえん……」

いろはときなが報酬の高さに目を剥く。やちよの方はといえば、彼女がモデルの仕事で稼ぐ金額はかなりのものであるためそこまで驚いてはいない。しかし何故それほど金額を提示してまで依頼するのか、そちらの方の疑念がますます深まったようだ。鋭い視線がほむらを貫く。しかしそれを飄々と受け流し、彼女は嘘偽りなく説明を始めた。

「鶴乃が相手にならないほど強いのでしょうか？ 何故そこまでフェリシアを必要とするのかしら」

「フェリシアだけじゃないわ。あと半月——勧誘出来得る限りの魔法少女を集める予定よ」

「……！ それは、何故……？」

「——見滝原へ『伝説』がやってくるから」

やちよにとって魔法少女を勧誘する存在は、記憶に新しい『マギウスの翼』という組織を彷彿とさせた。魔法少女が魔女になる現実をどうにかするため、なんの罪もない人々に犠牲を強いる組織——まさに物語に出てくる『悪役』だ。

いつか魔女になる……目を背けたくなる残酷な真実。それをなんとかしたいというのは、きつと間違いではない。けれどそのために誰かを害する必要があるというならば、やっていることはキュウベえと何一つ変わらない。宇宙に存在する数多の種族を救うために、数少ない『感情を持つ種族』を犠牲にする宇宙人と何一つ変わらない。それが認められないからこそ、彼女達五人は『マギウス』と敵対しているのだ。

そんな組織と似たようなことを考えているのなら——あるいは何か関係があるのならば、断固として認められない。そんな剣呑な雰囲気を出しながらやちよはほむらを睨んだ。しかし出てきた言葉は、彼女にとってあまりに予想外の事実であった。

「ワルプルギスの夜が見滝原にやってくる。私達はそれに対抗するた



めに戦力を集めているの」

「——なんですつて？ それは本当……なの？」

「疑うのならキュウベえに聞いてみなさい。アレが嘘を言わないのは知ってるでしょう？」

「…そう。次から次へと頭が痛くなってくるわね…」

嘘の感じられない、真っ向から見つめ返してくるほむらを見てやちよはため息をついた。きっと本当のことなのだろう……だからこそ信じたくない、という感情が沸き上がる。そこそこ長くやっている魔法少女であれば、名前くらいは聞いたことがある——それが『ワルプルギスの夜』という伝説だ。

「あのー……ワルプルギスの夜ってなんですか？」

「わ、私も初めて聞きました…」

しかし新米の魔法少女や、知る機会のなかった魔法少女も多い。この五人の中ではいろはときながそれにあたり、疑問を口にする。ほむらが答えようとするものの、機先を制するようにマミが語り始める。中学三年生だというのに、心は中学二年生である彼女が『伝説の魔法の説明』などという機会を逃すわけはなかったのだ。

「——魔法少女に語り継がれる伝説の魔法よ。ワルプルギスの夜……明けることなき無明長夜。かつて文明を二度滅ぼしたとも言われる、災厄の魔法。結界すら必要とせず、魔法少女以外にとつては大規模な災害としか認識できない……街の一つや二つは容易く壊滅させる、規格外の魔法」

「…そんな魔法が……存在するんですか」

「見滝原ってそんなに離れていませんよね……？ もしかしたら神浜にも……」

「マジかよ……」

「ちよつと待ちなさい、フェリシア。貴女には契約の時に説明したでしょう」

「お金のことに気がいった！」

「あ、貴女ねえ……」

「あ、あの……もしかしてさつきデカゴンボールのパックを大人買い

してたのって…」

「前金で買った!」

悪びれもなく、胸を張って答えるフェリシア。その様子に揃って項垂れるみかづき荘の四人。そして絶対にソーシャルゲームをやらせてはいけない人種だと、この場の全員が確信した。

それはさておき、やちよの言葉の端々から彼女達も何事かを抱えているのだろうと推測したほむら。人間関係の基本はギブアンドテイク…故に自分達がそれに協力することで、五人全員が協力してくれるのなら万々歳だ。そう考え、事情を尋ねるが——返事は芳しくないものであった。

「ワルプルギスの夜については他人事でもないし、協力するわ。ただこちらの事情は…それを話すと、どうしても話し辛いことが——出てきてしまうから。誰にとっても覚悟がいることよ」

「…」

やちよの言葉に他の四人も目を伏せる。そしてその雰囲気だけでほむらには理解できてしまった。ああ、きつと彼女達は魔法少女の真実を知ってしまったのだ、と。

けれど纏う雰囲気は悲壮さよりも、こちらを慮ったような空気が大半だ。会話の流れから考えて、それを知ったのはごく最近の筈なのに——それでも彼女達は前を向いている。他の魔法少女へ気遣いが出て来ている。なんて羨ましいんだろう…ほむらはそう思った。

それほどに絆が強く、お互いを大切に思っているのだろう。話すタイミングをぐずぐずと引き伸ばしている自分とは大違いだと、自嘲で乾いた笑いが漏れる。

けれど魔法少女の真実とは間違いなく劇物で、絶望し、人によっては心中すら凶りかねない事実なのだ。さやかが魔女化する光景を見してしまったマミが、杏子のソウルジェムを撃ち抜いた時の光景はほむらにとって忘れることのできないトラウマだ。そのマミのソウルジェムを砕くしかなかったまどかの絶望は計り知れない。

杏子は大丈夫だろう。落ち込み、戸惑うことはあっても仲間がいれば受け入れる。『魔法少女の理想形』と評された、鋼の精神は伊達では

ないのだ。

なぎさは既に真実を知っている。そもそもほとんど魔女になりかけていた彼女がそれを知らぬ筈はないのだ。それでもすべてを飲み込んで受け入れたのは、それを上回る希望と優しさのおかげだった。

そしてマミは——マミだけはどうしても難しい。どう話しても受け入れないか、信じられないか、あるいはその場で受け入れたとしても翌日には命を絶っていることすらあった。マミが失踪し、新しく現れた魔女の反応を追ってみれば、リボンの集合体のような化物だった時の衝撃をほむらは忘れていない。だからこそいつまでも躊躇し続けているのだ。

少し暗い雰囲気は部屋を満たしたことに首を傾げるマミ。そんな彼女を見て、ほむらは泣きそうになった。特定の感情ではなく、自分でも理解できない慟哭<sup>どうきく</sup>。

これほどに仲良くなった世界は皆無だからこそ、失うことに恐怖しているのかもしれない。魔法少女が正義であると、正義であるべきだと信じている者に対しこれほど残酷な真実もないだろう。正義の根源は罪悪感からのもので——だというのに、散々に殺していた化物は自分達の末路。

マミだけが真実を受け入れられないのは、彼女の心が弱いからではない。存在意義の大半を魔法少女の活動に注ぎ込んでいたからこそ、キュウベえ達のような表し方をすれば『希望から絶望への振り幅』が殊更に大きい少女だからこそ、どうしようもないのだ。ほむらは唇を固く結び、涙を耐える。

——そんな彼女の手が優しく握られる。顔を上げてみれば、そこには優しく微笑むマミの顔があった。魔法少女に成り立ての頃、丁寧に指導してくれたその時の笑顔のまま。

「どうしたの？ なにか……辛いことがあるなら、聞かせてちょうだい。大切な仲間じゃない」

「……」

大切なのは友達<sup>まじか</sup>だけだった。それさえ守ることができるなら、他のすべてを犠牲にしたってよかった。実際に、何度も何度も誰かを見捨

ててきた。それでも、どうやっても救えないから——ヤケクソのように全部救うことを誓った。

そんな時に限ってすべてが上手くいき、そして代償のように背負うものが増えた。もうなにも捨てられない。石に齧りついてでも救わなければならなくなった——それくらい大事になってしまった。

袖で涙を拭い、この家の住人達を見つめるほむら。彼女達という希望があるのなら、目指すべき形そのものが目の前にあるのなら……何かが変わるかもしれない。そう思って、震える声を絞り出す。

「貴女達は……どうやって乗り越えたの……？ 私……怖くて言えない……言ったら、全部壊れてしまうから……」

「……」

その言葉だけで彼女達は理解した。ほむらが魔法少女の真実を知っていることを……仲間にそれを伝えていないことを。そして——伝える勇気を欲しがっていることを。

「そうね……私達の場合は状況が状況だったから、あまり参考にはならないと思う」

「……」

「それでも必要なものは解るわ」

「……」  
いつのまにかほむらに寄り添うように座っているなぎさ。ほむらの手を握り続けているママ。きつと大事に思い合っているだろう三人を見て、やちよは言葉を紡ぐ。

「使い古されて、月並みで、陳腐な言葉だけど……『信じ合うこと』が大事なんだと思う。弱いところを支えてあげて、弱いところを支えてもらって——自分の大切を作って、自分が大切になって……」

「……」

「それと……これは実体験だけど、無理やりも意外と悪くないんじゃない？ 理屈なんて全部吹き飛ばして、言うことを聞かせるの——ね？ いろは」

「あ、あう……」

一歩だけ踏み出す勇気が欲しい。そんなほむらの願いは果たされ

て、拳を握りしめる。きつとここでなら、彼女達に見届けてもらえら  
なら上手くいく——なんの根拠もない、けれど熱い何かがほむらの内  
を満たした。

なぎさをマミの横に移動させて、自身は握られていた手を強く握り  
返す。そうだ、今の私は完璧な魔法少女だったじゃないかと……もし  
どうにもならないのなら、無理やりどうにかすればいいじゃないかと  
誓いを新たにす。

「マミ……私が前に話した大事な友達と先生のこと、覚えてる？」

「……ええ。貴女に色々教えてくれた人、だったわよね。前に亡く  
なっただって言ってた……」

「そう。私はその人達を助けたい、その人達を守る自分になりた  
いって——そう願ったの」

「……叶わなかった、の？」

「正確にはまだ叶っていない、ね」

「えつと……？」

「……私の魔法が時間停止なのは……なぜか解る？」

「それは——」

かつて友人にしたように、体を重ね合わせる。けれど決定的に違う  
のは、その体勢。守るように、その誓いを象徴するように腕の中に抱  
きしめても、友人には何も伝わらなかった。当然だろう。自身の誓い  
も覚悟も、違う時を歩む者に伝わる筈がないのだから。

だから抱き締めるのではなく、抱き着いた。どれだけ語り尽くして  
も、ほむらとマミの時間は完全に交わらない。どれだけ言葉を尽くし  
ても、ほむらとマミは完全に理解しあえない。けれど気持ちだけは——  
『貴女が大切だ』という感情は、ぶつけられる。それだけはきつと  
感じ合える。かつて届かなかった言葉を……ほむらはもう一度だけ  
呟いた。

「私に魔法少女の戦い方を教えてくれた先生は……マミ、貴女なの」

「——え……」

「私ね、未来から来たんだよ——マミさん」

## 弱い強者と弱い弱者

魔法少女『七海やちよ』は、神浜でもっとも歴の長いベテランである。それどころか世界単位で見ても最上位に食い込むだろう。故に魔法少女の過酷な運命も知っており、大切な仲間が魔女になる場面すら目の当たりにしている。

それが元で親友が人道に悖る集団へ組し、家族のように大切だったチームが解散に追い込まれることにもなった。彼女の願いはモデル同士で組んだユニットの中で『リーダーとして生き残る』ことである。そして彼女は今も『魔法少女』として生き残り続けている。仲間にも慕われ、そして仲間にも庇われて。

つまり所属する集団のリーダーになり、生き延びている事実は『他者への犠牲』があるからこそなのでは——彼女はそう考えた。願いは今も叶い続けていて、仲間がその犠牲になっているのではないかと。そう思い込んでしまった彼女は、頑なにチームを組むことを拒んだ。過去に己を庇って死んだ仲間を悼み、新たに仲間を得てもきつと殺してしまうからと、他人を寄せ付けないことを自分に課し戒めとした。

しかし『環いろは』との出会いから始まった運命が彼女の傷を癒やした。『由比鶴乃』と再び縁を結び、『深月フェリシア』と共闘し、『二葉さな』を保護して、家族のような絆を築いた。誰も彼もが何かを抱える歪な形ではあったが、だからこそ支え合えるのだろう。

傷の舐めあいなのかもしれない。それでも魔法少女は一人では生きていけないから——全員が魔法少女の真実を知った今でも、今だからこそ、寄り添うことが大切なのだと言ちは気付いた。たとえ依存でもいい。魔法少女の一番の大敵はキュウベえでもなく、魔女でもなく、『不幸』なのだ。仮初の幸せでもいい。慰め合い、支え合える関係こそがソウルジェムを輝かし続けると知った。

故に、涙を流して抱き合うほむらとマミを見て、やちよは触れ難い尊さを感じた。ほむらの過去と、そして歩んできた苦難の道は驚愕を禁じ得ないものであった。その意志の強さ、目的意識は常人ならざる

ものだ。

魔法少女に『己への誤魔化し』は通じない。悲しければソウルジェムは濁り、諦めてしまえば魔女となる。きつと感情を切り捨ててきたのだろう……繰り返す度に己以外がりセットされるのなら、寄す刃など作れない。諦めないために絆を諦めたのだろう。

そして今、こうしているということは——きつと“現在”に全てをかけたのだ。終わらなければいつか叶う……そんな後ろ向きな決意を捨てたのだろう。全てに必死だったのは確かでも、『やり直せる』という保険が心の片隅にあった筈だ。

『今回で終わらせる』という固い意思と、秘密を抱えた後ろめたさの解消からくる安堵、泣き笑いのようなほむらの表情。背水の陣をもって臨む“今”に全身全霊をかけた彼女の決意が伝わってくる。

やちよは『ワルプルギスの夜から街を守るため』という受動的な行動を、『ほむらを手助けしてあげたい』という能動的な意識に切り替えた。きつと話を聞いていた全員の総意だろうと後ろを振り返り、涙と鼻水で顔を崩壊させている鶴乃が、自分の服で顔を拭いていることに気付き拳骨を飛ばした。

「曉美さん……ごめんね、気付いてあげられなくて。ごめんね、ずっと迷惑をかけて。ごめんなさい……」

「わ、私、何度もママさんを見捨て、て……まどだけが助かれればそれでいいって、それで——!」

「……もうそれ以上言わなくていいの。ずっと頑張ってきたんでしよう? できるかぎり助けようとしてくれたんでしよう? ずっと一人で……」

「うん……うん……!」

「もう何も隠さなくていい。全部信じるわ……皆で幸せになる未来を、きつと掴み取りましょう」

「はい……!」

「ずっと気付かないところで頑張ってたんだよね? 夜な夜な裸で踊るのも意味があったんでしよう? ……もう大丈夫、辛いことも一緒に乗り越えていきましよう」

「は、はは、はい…」

感受性豊かな中学生であるいろは達も、鶴乃の例に漏れず涙ぐみながらほむらの話に耳を傾けていた。若干ながら変な部分もあったが、概ねやちよと似たような心情となっているようだ。彼女達も彼女達で取り巻く状況は複雑であったが、それでも他人を助けたいと思える心こそが、やちよを絆ほだしたのだから。

「…ごめんなさい、急に訪ねてきた上に関係の無い話を長々と…」

「関係なくはないでしょう？　一緒に戦う人がどういう人間かって、意外と重要だと思うわ…頑張りましょうね」

「…！　あ、ありがとう」

「わ、わたしも！　お手伝いさせてください！」

「環さん…」

「私もあなたに協力したい、です…」

「ええ、ありがとう二葉さん」

「オレも一緒に戦う！」

「貴女はもうお金払ってるでしょう、フェリシア」

「そうだった！」

ほむらの心の底ですつと張り詰めていた何かが緩く解ける。遙か昔に『誰にも頼らない』と決めた覚悟は、決意は、完全に瓦解してしまった。それが碎ける時は自分が死ぬ時だと彼女は思っていた。けれど、どうだろう。

信念だと思っていたものはただの意固地で、孤独だと思っていたのは勝手な見損ないで、限られた手札は無限大に広がった。

ほむらはやちよと同じだった。続く続く、果てしなく続くこの旅には終わりが無いのではないかと、考えないようにしつつも思考の片隅にこびりついていた。『出会いをやり直したい』『まどかを守る自分になりたい』という願いの結果は、時間遡行という形になった。

魔法少女の願いが完全に望んだ結果にならないのは、素質の大小と願いの大小が擦り合わさり、足りない分は“可能性”という曖昧なものに置き換えられるからだ——ほむらはそう考えていた。

しかし彼女の願いは元々が抽象的だった。素質が足りなかったの



ではなく、「出会いをやり直したい」の部分が叶い続けているのだとすれば、終わりなど始めからない。結末が自身の死でしかあり得ず、まどかが救われる未来は永久に訪れない——それこそが、考えないようにならなければならぬ最悪の予想だ。

杞憂だったと、まだ完全に否定はできない。それでも進んだ。動かない盤面が時を刻みだした。それこそが何よりも嬉しくて、まだ何も終わっていないというのに、彼女の心は雨上がりの虹を見た時のように胸がすいていた。

「それで、そちらの事情は教えてもらえるのかしら。躊躇していたのは、魔法少女の真実を話すことが憚られるからでしょうか？」

「…ええ、そうね。道すがら話すことにしましょうか」

怜悯な雰囲気が消え、どこか穏やかになったほむらを微笑ましく思いながら、やちよは三人をとある場所へ案内することを決めた。味方であり敵でもある、付き合いの長い友人の元へ。

「道すがら？」

「ええ。戦力増強は、何も人を増やすことだけじゃないわ。神浜の異常とも言える魔法の強さに魔法少女が対抗できている理由——知りたくないかしら」

「…どこへ行くというの？」

「——『調整屋』」



風見野市に点在するゲームセンター。かつて入り浸っていたところで、杏子はアイスを食べながら休憩していた。見滝原と風見野の魔法少女が全て神浜へ向かうと、街を守る人間が居なくなってしまう。故

にマミ、ほむら、なぎさが神浜へ行っている間、杏子が二つの街を巡回しているのだ。

「ふう………つたく、今日はしけてんなあ」

しかし一体ばかり仕留めたところで、魔女の反応はなくなってしまった。このところずつと四人で魔女を狩っていたため、なんとなく気が乗らないということもあり、古巣ともいえるこの場所へ足が向いたのかもしれない。

不良っぽく背伸びをした少年達、楽しそうに手を繋いでいる高校生カップル、クレーンゲームに連コインを続けている少女。杏子が足繁く通っていた頃から、なにも変わらない風景がそこにあった。

「…」

「…ふゆう…」

五百円玉がクレーンゲームに落とされる。挑戦権を六回得て、クレーンが六回空を切る。五百円玉がクレーンゲームに落とされる。挑戦権を六回得て、クレーンが五回空を切り、一度人形を掴むものの途中で落下する。

「うう………ふゆう…」

「…」

諦めてしまったのだろうか、肩を落とした少女がクレーンゲームから離れていった。傍のベンチでそれを見ていた杏子は、ちらりと景品の角度を見て百円を取り出した。前任者が三千円近くは使っていただろうか、人形の位置は随分と穴に近付いている。

（ぬぬぬう…！ よっしゃー！）

予想通り一回で取れたことにガッツポーズを取り、ほむらの部屋のどこに飾ろうかと、人形を手にはぶら下げる杏子。そんな彼女の前に、先程の少女ががま口いっぱいのコインを手に戻ってきた。両替機でお札を交換してきたのだろうか、必ず人形を手に入れるという決意に満ち満ちている。

——そしてクレーンゲームの前に立つ杏子を見て悲鳴を上げた。

「ふゆううううう!?!」

「うえっ!?!」

「それ……それ……！」

「い、いや、諦めたみたいだったから……」

「そ、そんなあ……」

がつくりと項垂れる少女を見て、ちくちくと罪悪感を刺激される杏子。少し赤みがかかった茶髪、横に二つ短めに縛ったビッグテールで、垂れ目の気弱そうな女の子。壁に寄りかかり、泣き崩れる姿は哀れを誘う。

「……気まぐれで取っただけだし、そんなに欲しけりややるよ。ほら」

杏子が見ていただけで既に英世が三人分近く旅立っていたのだ。もしかすると樋口が殉死したのかもしれないし、考えるのも悍ましいことだが諭吉すら特攻していった可能性すらある。それを考えれば、単なる気まぐれで取っただけの景品を渡す程度のことには気にもならない。

胸に押し付けるように人形を渡そうとする杏子であったが、しかし意外にも少女はそれを固辞した。杏子の気遣いをととても嬉しそうにしつつ、非常に申し訳なさそうに首を振る。

「ありがとう……でも、これは私が取らなきゃ意味がないから」

「あん？……まあそれなら別にいいけどさ。でもまたやんの？……どんだけ金使うつもりだよ。普通に買えば千円するかどうかでしょ」

「ふゆう……」

自分でクレーンゲームの景品を取ることが、どれほどの意味を持つというのか。傍から見れば馬鹿そのものの行動だ。『絶対に増えるから』などと宣うパチンコ狂いのような、むしろ普通に金を出せば買えるのだから、それ以上の愚行とすら言えるだろう。

しかし他人から見れば奇行、非効率な行動であっても、本人にしか解らないものは確かにある。少なくとも目の前の少女はそれを理解している。杏子は感じた。無駄なことであっても彼女にとっては大切なことなのだろう——そう悟った杏子は、新しく景品が補充されたクレーンゲームに向かう少女の手を取った。

「えっ……」

「下手くそで見てらんねーよ。タイミングだけ合わせてやるから、自

分で押しな。それとも完全に自分でやんなきゃなんないの？」

「あ……うん！ あ、ありがとう……」

後ろから手を重ね、ボタンを押すタイミングを図る杏子。ダンスゲームに始まり、音ゲーや格ゲー、果てはエアホッケーまでもマスターしている彼女。それはクレイニングゲームにおいても例外ではなく、見事数回の試行で人形を手に入れた。

景品補充の絶妙なタイミングを見るに、店員がアームの強度を弄ってしてくれたのかもしれない。うら若い少女が涙目でトライし続けているのだから、男性店員であれば心動かされるに足る理由だろう。

「と、取れたー！」

「はは、やったじゃんか」

「う、うん！ ありがとう……あっ！」

「ん？」

「えっと、名前！ 私『秋野かえで』って言います！」

「ああ——あたしは佐倉杏子だ」

「うん！ ありがとう、杏子ちゃん」

「きよ、杏子ちゃんって……まあいいけどさ……」

サイドテールを揺らしながら喜ぶかえでに、苦笑交じりで肩をすくめる杏子。本当に嬉しそうな彼女の様子に、つい興味本位で問いかける。

「ところで、なんでクレイニングゲームで取りたかったんだ？ 単なるヤ

ケクソって訳でもなさそうだよな」

「え、えっと……」

「いや、別に言いたくないや聞かないけどさ」

「ううん。そういうことじゃなくて、なんて言ったらいいか……えつとね、この前すごくショックなことがあって、ずっと塞ぎ込んでたの」

「へえ」

「でも大事な友達が、ほんとに大事な友達が——立ち直らせてくれたの」

「……うん」

「ずっと前にもおんなじようなことがあって……それで、その時もク

レーンゲームで取った人形を二人に渡したんだ。今回は、前の時よりもずっとずっと怖かったけど……それでも前に進めたの。だからお礼に、もう一度同じことをしようって思ってた」

「ふうん、なるほどね」

——秋野かえでは魔法少女である。それなりに裕福な家庭で何不自由なく育った彼女が、魔法少女になった理由……それは家の近くに建設予定であったマンションを、その予定をなかったことにしたかったからだ。日照権に始まり、その他諸々の苦情を無視して強行されかけたタワーマンションの建設。

彼女の家に關しても、マンションができれば極端に陽が差さなくなるだろうことが予想できた。秋野家の庭には彼女が大切に育てている植物が多数あり、太陽光が少なくなれば枯れてしまう可能性もあった。

故に、悩む彼女の前に現れたキュウベえに、よく考えもせず願ってしまったのだ。『マンションが建つ予定をなかったことにしてほしい』と。願いは正しく成就し、氣質を象徴するかのような『植物を操る魔法』を得手とする魔法少女が誕生した。

しかし元々の性格がおっとりした弱気な少女だ。使い魔すら満足に一人で倒すこともままならなかった。それでもなんとか魔法少女としてやっていこうとしていた時、二人の少女と出会う。

引け目もあり、それが元での諍いもあり、三人の仲はお世辞にも良いとは言えなかった。しかし紆余曲折を経て信頼を預け合う仲間となり、いつしか本当のチームとなったのだ。

けれど先日——それを揺るがすような事態に陥った。『マジウスの翼』という『魔法少女の解放』を謳う集団の台頭。『ウワサ』という魔女とは似て非なる存在の出現と、それに付随する一般人や魔法少女の被害。

全ては繋がっており、かえでもその騒動の一部に巻き込まれることとなった。そしてその流れの中で知り得た真実……魔法少女の正体こそが、彼女を苛んだ要因だ。そもそもよく考えずに魔法少女へとなったこともあり、その衝撃的な事実はソウルジェムを濁らす程の絶

望となった。

それでも立ち上がったのは、やはり二人の仲間たちのおかげだったのだろう。チームを組んで、壊れかけて、けれど雨が降って地が固まるように絆は強固になった。結成の際に絆となったクレーンゲームの景品をもう一度手に入れよう、初心に帰ろう——そう思っただけで、このゲームセンターへやってきたのだ。

「魔女になる怖さなんかより——ももちゃんとレナちゃんと離れることの方が……もつと怖いもん……うん……！」

「……ん？」

「ふゆ？」

「あんた、魔女って言った？ つーか……魔女になるって言ったよね？ なあ、どういふことだオイ。ちよつと詳しく聞かせなよ」

「ふゆううう!?!」

かえでの小さい呟きを耳聴く捉えた杏子は、眉をひそめて少女を人気が無いコーナーへ引きずっていく。他人が見れば『気弱な少女をカツアゲするヤンキー』以外のなものでもない光景だ。

杏子は人目につかない階段の踊り場へと近付き、すぐにでも詰問しようとするが——しかしそれ以上に怪しい人影に遭遇して後ずさった。

そこには、ぶつぶつと独り言を呟きながら黒いフードを被る変質者が座り込んでいたのだ。全身真っ黒の服に身を包み、フードによって顔すら伺いしれない存在。まごうことなき変質者だろう。間違いく事案発生の一覧に載せられる不審者だ。

「いつまでゲームやってるんだろ……ああ、どうしよう、どうしよう……こんなことだったら最初から『マギウスの翼』になんて入らなければよかった……貰ったペンダントも怪しいことこの上ないし……でも逃げ出したらどうなるか……」

「おい」

「へっ？ あ、すいませ——ひっ!? あ、秋野かえで……！」

「ふゆっ!? ……あ！ マ、マギウスの翼！」

「あ、あわわ……に、逃げなきゃ…… あうっ!?!」

ぶつぶつと呟いていた不審者——『マジウスの翼』の下っ端構成員、通称『黒羽根』は杏子に声をかけられ、通行の邪魔になつていたことに気付いて腰を上げた。しかしその傍らにいるのが、自身が見張っていた筈の『秋野かえで』だと気付くと、慌てて逃げ出した。

しかしあまりに急いでいたせい、手のひらで弄っていた“ペンダント”を落とし、あろうことか自分の足で踏みつけて壊してしまつた。

「ひ、ひいつ!? どどど、どうしよう!? 新しいのくださいなんて言えない……!」

「ふゆっ!? ご、ごめんなさい……高かつたの?」

「そういう問題じゃ……!? ひっ!?」

取り乱す黒羽根の様子を見て、敵と言えど申し訳なく思つてしまつたかえで。つい謝罪の声を出す、その瞬間、三人の目の前に魔法の結界のような何かが現れる。“ウワサ”——魔法とは似て非なる、けれど魔法よりも強く、なによりグリーンフィードを落とさない厄介な怪物だ。

「——なんだ? 魔法の結界……とは少し違うな」

「あぎやー!? なな、なんで“ウワサ”が……!」

「あーもう、さつきからうっせえよ。おいかえで、アレはなんなんだ?」

倒していい奴か?」

「え、えつと……うん! あ、杏子ちゃんも魔法少女だったんだ……」

「つたく、何が起きてんだか……! ちゃっちゃと終わらせて、説明してもらうからな!」

「あ、待って! “ウワサ”は魔法より強くつて——」

「ーロツソ・ファンタズマ! ……はっ、気味の悪い声出してんじやねーよ! さっさとくたばりな!」

槍を構えたと同時に、何人もの杏子がウワサへと特攻する。幻覚を併用した槍さばきは産まれたばかりの、大した力を持っていない化物を翻弄し軽々と屠つた。それを見たかえでは感嘆の息を漏らし、黒羽根は漏らした。

「さつてと……ちっ、グリーンフィードは落とさねーのかよ。骨折り損

だね、こりゃ」

「杏子ちゃん、すつごく強いんだね！　ウワサを一人で倒せる人なんて私、見たことないよ」

「そう……か？　あれより強い魔女なんかいくらでもいそうだけど……」

「ふゆ……：そういういえばいつもよりちよつと弱かったような……」

「んなことより事情を聞きたいんだけど？　おい、お前もなにか関係してんだ——あ……」

「ふゆっ!？」

「あう、あう……」

状況から考えれば——というより服装から考えて、明らかな悪者である黒羽根を聞いたただそうとする杏子。しかし視界を下に向けると、へたり込む少女が黄色い液体を床に染み込ませている作業中であった。俗に言うお漏らしというやつである。

マジウスの翼に所属する『黒羽根』という存在は、総じて弱い。むしろ弱いからこそ救いを求め、他人を害してでも己を守りたいと望む集団であった。魔法少女としての実力も弱く、精神的にも脆い。

彼女達が目深にフードを被っているのは、規律でもなんでもない。正体を隠すためだ。褒められたものではない行為をしている自覚はあるのだろう。だからこそ他の、マジウスの翼に所属していない魔法少女に非難され、助けてもらえなくなることを恐れて正体を隠すのだ。

人に憚られる行為をしているというのに、それでも最後の一线は踏み越えず、最悪の場合コウモリのように間をウロウロする弱い魔法少女。それが黒羽根の正体だ。

とはいえ彼女達にも言い分はある。ほとんど騙されたかのように魔法少女となり、同類のなれ果てを倒し続けなければ生きることままならず、最後には自分も化物になる運命——それほど過酷な運命を課される程に、自分達は悪いことをしただろうか、と。

救いを求めることの何が悪いと。強い魔法少女には自分達の苦悩など解るものかと。魔法少女が死ぬか他人が死ぬかの二択で、後者を



選んで何が悪いと。キュウベえに目をつけられたことが運の尽きと  
言うならば、その不幸を誰かに押し付けることは正当な権利じゃない  
か、と。

環いろは達はマギウスの翼のやりかたを認めない。けれど黒羽根  
にとつてそれは死の宣告と同義だ。一人では満足に魔女を狩れない  
役立たずが生き残り続けられる筈もない。『それとも死ぬまでお前  
ちが面倒を見てくれるのか』と彼女達が問えば、さしものいろは達も  
口を噤むしかない。

だから彼女達はマギウスの翼に与するのだ。罪のない人々に不幸  
を押し付けようとも、たどえいように利用されているだけだと薄々  
感じている。魔法少女の解放を謳う幹部達が、その実そんなこ  
とはどうでもいいと思っただけ。

「ふゆう……そうだ！」

「あん？」

そんな哀れな少女のお漏らしを見て、かえではおもむろにスマホを  
取り出した。羞恥にうつむく彼女のフードをガバリと持ち上げ、俯瞰  
の図でシャッターを切った。

そう……黒羽根達の苦悩は複雑だが、かえでにとつては預かり知ら  
ぬ事情だ。彼女の視点では、仲間達を害する敵である。

そして何より、敵対しているとはいえ『少女』なのだ。殺害などで  
きず、だからといって監禁などできる場所も時間もお金もない。警察  
に引き渡す手段は論外で、結局は倒したところで解放するしかない。  
そうして、時間をおけば復活するイタチごっこだ。

悪は手段を選ばないが、正義は手段を選ばなければならないという  
ジレンマ。それを防ぐために考えた手段がスマホでの撮影だ。黒羽  
根達が顔を見られたくないという情報は共有されている。ならば撮  
影出来る時に撮影して、一度流れれば消去は不可能なネットに上げれ  
ば解決である。まさに外道の所業であった。

「ひぎゃああ!? ななな、なに撮ってるんですか!？」

「ふみやうみやう……! これをSNSに上げなきゃ……!」

「鬼かお前!？」

「やめてえー!!」  
悲痛な叫びがゲームセンターに響き渡る、そんな風見野の一景であつた。

“マギウスの翼”。それは『魔法少女の解放』という目標を掲げ、街へ災いを振りまく悪の組織とでもいう集団だ。とは言っても、押し付けられた不幸を別の誰かに押し付けるための組織だと考えれば、所詮は社会の縮図でしかない。

世界は善意でも成り立っていて、悪意でも成り立っている。世界から不幸がなくなることはあり得ない——ならば、幸せのイス取りゲームに敗北し続けた者が貧乏クジの引き取り手だ。

魔法少女が不幸かと問うならば、それは『人による』としか言えない。

けれど、少なくとも世界における不幸のどん底ではないだろう。生まれてから死ぬまで、幸せの欠片にすら触れることのない人間がいる。幸せという概念を知らない人間がいる。己が不幸であると認識もできない人間がいる。

そんな哀れな存在に、キュウベえは手を差し伸べない。“幸せ”を知っているからこそ“不幸”があり、ひいては“絶望”するのだ。効率を考えるならば、程々に幸せで、小さな悩みを大事に捉えてしまうような少女こそが魔法少女に適しているのだから。

『騙された』と魔法少女は嘆く。しかし、対価は確かに手に入れていたのだ。大抵の願いは叶う、そんな代償が人間をやめることではかないと言ふならば——世界単位で見ると、引く手あまたの権利である。

本当に不幸な人間にしてみれば、マギウスの翼に属する魔法少女に対し『ふざけるな』と言いたいところだろう。願いを叶えてもらった代償なのだから、義務なのだから、不幸を押し付けるなよ、と。

つまるところ、マギウスの翼という存在は正義でも悪でもない。世界で常に起こっている戦争と何も変わらない。限りあるパイの奪い合いでしかないのだから、そこに善悪はないだろう。

——しかし。それでも、あえて悪だと言うならば『マギウス』こそをそう評すべきだろう。彼女達はマギウスの翼の中核を成す三人の

幹部。『翼』とはまさしく彼女達が夢へ羽ばたくための道具でしかなかった。

真実、三人の幹部達は魔法少女の解放など気にしてはいない——が、彼女達の都合通りに進めば、結果的に魔法少女が救われるというのもあながち嘘とは言えない。

ただしその計画は、とある人工知能が導き出した結果によれば『人の悪意』を計算に入れていない、まずもって成功することはないだろうというものだ。けれど彼女達は気にしない。そんなことよりも、自身が目指す願いの方が重要だからだ。

“マギウス”が一人、『里見灯花』は望む。世界のすべてを、宇宙のすべてを、たとえ何万年生きたくしても知りえない、あらゆる未知を既知へと変える変革を。ゴシックロリータな衣装に身を包み、腰まで伸ばした髪を揺らしながら不敵に微笑む少女。並外れた頭脳と溜め込んだ知識が、小さな体躯と相まって歪な何かを感じさせる。

“マギウス”が一人、『柊ねむ』は望む。地球そのものを原稿として物語を創作し、その世界を具現させることを。学士のような衣装に身を包み、両サイドを輪っかにくくったおさげが特徴の知的な少女。幼さと相反して落ち着いた雰囲気は、己の行為が悪辣と自覚していることを他者に理解させ、だからこそとても恐ろしい。

“マギウス”が一人、『アリナ・グレイ』は望む。自身のアトワークを永遠の生の象徴として君臨させ、宇宙規模のアートにソウルを委ねることを。軍服に似た衣装に身を包み、長い緑の髪が背に揺れる狂気の少女。芸術を至上とし、その表現のためならば他者の死どころか自身の死すら厭わないマッドアーティスト。

それぞれがそれぞれの分野で天賦の才を与えられた、常人とは一線を画す三人の少女達。彼女達が目指す先は、常人以外には何一つ理解できない。目標のための犠牲に対し感情を乱さない部分こそが、あるいは悪と呼ぶに相応しいのかもしれない。

彼女達 “マギウス” の壮大な野望のためには、膨大なエネルギーが必要だった。灯花の固有能力である『エネルギー変換』があれば、そのための力を効率よく集めることができた。とはいえ宇宙規模で変

化をもたらす計画に対しては、地球の総熱量ですら不足であった。

ならばどうするか——その答えは、元より彼女達の存在そのものが答えだった。インキュベーターという地球外生命体が、遙か銀河の彼方からやってきた理由……それこそが『感情エネルギー』だ。エントロピーを凌駕するとはいえ、その量が微々たるものであったのならば彼等が着目する筈もない。

宇宙において無数に在る生命体の中でも、非常に希少である『感情を持った生物』。それが生み出すエネルギーは原始的な熱量を遥かに超え、だからこそ目をつけられた。そして“マギウス”はそれを利用しようというのだ。

魔女をばら撒き、ウワサを拡散し、人々の悲哀や嘆きまでも糧とする。そしてそれを邪魔する存在というのが『環いろは』や『七海やちよ』、その仲間達である。

その結果起きたのが『エネルギー不足』。当初の予定より足りないエネルギーをどうするかという問題に、彼女達が出した答えは——“ワルプルギスの夜”を神浜へ呼び寄せるといふ荒業だった。

伝説に謳われる魔女のエネルギーともなれば、どれほど膨大だろうか。彼女達の計画において、もはや必須とすら言える決定事項となった。

地球上の誰よりも魔女に詳しい灯花とねむにより、ワルプルギスの夜を誘導する作戦が始まる。そして残るマギウスであるアリナは、配下の白羽根と黒羽根を率いているは達の行動の妨害に向かう。

度重なるいろは達の活躍によって、マギウスの翼は揺れている。信頼される司令塔や旗頭がいたならばそこまで不安定になることもなかったのだろうが、いかんせん“マギウス”は恐怖されてはいても人望が薄い。彼女達の翼に対する態度は『道具』以上ではありえず、それを隠そうともしないのだから当然だろう。

離反を防ぐため、そして躊躇を防ぐために使用したのは——やはり“ウワサ”だ。このウワサの産みの親こそ『終ねむ』であり、自分達にとって都合の良い化物を創り出せる、恐ろしく使い勝手のいい固有能力である。

「受信ペンダントのウワサ」。それが羽根達を洗脳するために創り出された化物であり、マジウス手製のペンダントを身に着けた者はたちまち自我を奪われるタチの悪いウワサだ。これを利用し、アリナは各地に羽根を散らした後にいるは達の元へ向かう。

最大の目的は目眩ました。神浜中の魔法少女を襲わせ、街を混乱に陥れ、目的を絞らせない。全てが終わった後にはワルプルギスの夜の進路は変更済み——そして、ついでに邪魔者を消せたならばなおよし。

——事態は始まった。

——瞬間に終わった。

杏子が「受信ペンダントのウワサ」を倒してしまったため、洗脳が始まろうとする瞬間に効力が無くなってしまったのだ。自我を奪われ暴走し、所構わず暴れまわる羽根達こそが計画の肝であったのだ。目眩ましに十分とは言えなくなった。

「…っ、ふざけないでヨネ。ウワサを消したのはどこのバカ？」

「何を言っているのかわからないけれど、碌でもないことを企んでいたのは理解したわ……それで、どうするの？」

「フン……やることは変わらないワケ。怖じ気づく役立たずが増えただけだヨネ。アリナ的には目の前の虫を叩き伏せられればオツケ——なんですケド？」

「この戦力差でよく言えたものね。ふう——悪いけど、容赦しないわよ貴女達」

「ひっ…」

調整屋に向かう途中、マジウスの翼と出くわしたやちよ達。しかしアリナの不敵な笑いが唐突に怒りの表情に変化したのを見てとり、不測の事態が起きたことを看破した。戦闘そのものがやちよ達にとつてあまりメリツトがないため、退却を促す。しかし当然のことながら受け入れられず、やちよはため息をつきながら羽根達を威嚇した。

数の上であればアリナと羽根の数が上だ。しかしマジウスを除く彼女達は、弱いからこそ徒党を組んでいるのだ。歴戦の強者たるやちよを始め、最強を自称し、偶に他称もされる鶴乃。傭兵として実力は

折り紙つきのフェリシア。盾役のさなに回復役のいろはと布陣は盤石だ。

加えて今はマミ、ほむら、なぎさが一行に加わっている。特にやちよの威嚇に便乗して機関銃を取り出したほむらは、いたいけな少女達にとつて死神に見えたことだろう。ファンタジーな見た目の武器であればともかく、実銃など魔法少女にとつても恐怖の対象だ。

亜音速の鉄の塊が雨あられと向けられ、無事でいられる魔法少女は少ないだろう。少なくとも自他ともに認める弱者の羽根達にはどうしようもない。現代の武器は、大抵の超常を凌駕するのだ。

「魔法少女が機関銃…？ アツハハハ！ 美意識の欠片もないんですケド！ もうちよつと芸術性を意識するべきだヨネ」

「戦闘に美意識なんて必要ないわ。美しさが必要だとすれば、機能美くらいのものね」

「ふうん……一理あるかも。けど魔法少女の戦いに金属の塊を持ち出すなんて、無粋ってことに変わりないんですケド」

「無粋だの芸術性だのと……まるで芸術家気取りね」

「アリナはれつきとした芸術家なワケ」

「ならアトリエに籠もって創作活動に耽ってなさい。わざわざ表に出てきて人に迷惑をかけようなんて、それこそ無粋だわ」

「アツハハハ！ 素人が言いそうなことだヨネ。生と死が織りなすアート……魔女とドツペル……アトリエに籠もってるだけじゃ見えてこないワケ！」

両腕で自身を掻き抱いて震えるアリナ。ほむらはそんな様子を気味悪そうに眺める。そもそも彼女は『芸術家』という存在が苦手であった。それは芸術家の気質が云々というよりも、過去に苦い思い出があるからだ。

魔法少女になる前の「最初の世界」。暮れる夕日の中、転校初日に友達ができずトボトボと帰路につくほむら。そんな鬱屈とした彼女に目をつけたのが、ほむらにとつて初めての魔女——『芸術家の魔女』であった。

凱旋門のような本体に、結界の中にも何処かで見たことのあるよう

な芸術作品が溢れる虚栄の魔女。自らを選ばれた存在だと自称し、己の作品を見せびらかそうとするような虚栄心が結界を構成している。

そんな魔女が初体験であったため、ほむらが芸術家という存在を苦手とするのはある意味必然だ。己を特別な存在だと信じて疑わず、他人の迷惑を顧みず、ただただ自己肯定を望むばかりのイカレ。それがほむらにとつての芸術家だ。

「芸術家気取りの魔法少女、ね……そういえば初めて遭った魔女はまさにそうだったわ。独創性の欠片もない、コピーみたいな作品が結界に溢れる『芸術家の魔女』。魔女を芸術だなんて言うくらいなもの、貴女もそうなるのかしら？」

「……………」

ほむらは基本的に口下手だが、煽り合いには少しばかり定評がある。そして無自覚に煽ることには更に定評がある。そこは言つてはいけない暗黙の了解だろう……ということを、さらっと口に出してしまおうドジっ娘なのだ。

先程のセリフも嫌味ではあったが、そこまで煽っているつもりはなかった。しかし独創性に執着し、自身の作品に誇りを持つアリナ・グレイという少女にとっては——完全に禁句であった。

「ヴアアアアアアアアツツ!!」

「ひゃっ…!?!」

「ふざけるな!・ふざけるな!・ふざけるな!・アリナがそんな魔女と同じ…? —— すりつぶして赤い絵の具にしてやる!」

「…っ」

ほむらの心は度重なる繰り返しで強くなった。しかしそれは『同じことに慣れた』だけとも言える。何かにつけ『初めて』の場合は醜態を晒すことが未だにあった。そして、実のところ『誰かにキレられた』ことはなかった。

不信を抱かれたことは何度もある。嫌われたことも、拒絶されたことも、咎められたこともある。けれど、狂ったように理不尽な怒りをぶつけられたことはなかった。元より対人関係に難のあった彼女は、随分と久しぶりに「怯えた”。



魔女に対峙する恐怖と、怒り狂った女性に対峙する恐怖は質が違うのだ。驚きのあまり、時間を止めて電信柱の後ろに身を隠すほどであった。今の彼女の心は、おさげでメガネをかけていた頃に近い状態である。

「ぶち殺すうう!!——……ハ? え、消えた…」

「…」

「…ねえアナ達、あいつは何処へ消えたワケ? アリナはアイツを魔女の餌にしないと気が済まないんですケド」

「…え? あ、えつと……その」

怒りのオーラを立ち昇らせているアリナ——のすぐ後ろの電柱から顔を覗かせているほむら。やちよ達の視点からすると、あまりにも間抜けな光景であった。ほむらの行動にもだが、アツプダウンの激しすぎるアリナの性格にも引き気味なのだろう。やちよは珍しく言いよどんだ。

電信柱から顔を出し、両頬を叩いて気合を入れるほむらの姿も、締まらない雰囲気に一役買っている。本人たちは至極真面目なのだろうが、やっていることはコントであった。

「…えつと」

「——つ! いつのまに後ろに……!」

「芸術家として侮辱したのは謝るわ。貴女の言ったとおり、その方面に関しては素人だから……癩に障ったことを言ってしまったのなら、ごめんなさい」

「…一度吐いた言葉は飲めないヨネ。どつちにしてもアナ達はみんな魔女の餌にする予定なワケ」

「…何故魔女にこだわるの? 芸術なら色んな分野があるじゃない。人に迷惑をかける前に、迷惑にならないジャンルを極めようとは思わないの?」

「アツハハハ! 他人の顔色を伺って決める芸術ってなに? アリナのアートは生と死……! 魔女には人間の死と、魔法少女の生と死が詰まってるワケ! ただの人間には絶対出せない美しさだヨネ……」

「…」

狂ったように笑うアリナに、やはり理解できないとほむらは頭を振った。そもそも生と死がアートというのも解らなければ、いちいち大仰に身振り手振りを交えるのも解らず、語尾をカタコトにする意味も解らなかつた。

しかし人間の生死をアートというならば、先にそこを突き詰めればいいじゃないかと、真つ当な説得を試みる。

「その生と死というのは、魔女じゃないと駄目なの？ 人間の生と死だって、そう簡単に突き詰められるものだとは思えないけれど」

「…アリナはもう自分の死は試したワケ。結果的に生き残ったケド、もう普通の人間に興味ないカラ」

「なら、生は？」

「ハ？」

「死は試したって…じゃあ、生は？」

「…生はって…アリナは生きてるし、他人の生だって表現し尽くしたし…」

『生』と一口に言っても、色んなものがあるじゃない。恋だって生きる営みの一つだし、愛もそうじゃないかしら」

「愛とか恋とか、そんなくだらないアートはアリナの的にノットインタレステッドなんですケド」

「…え？ じゃあ生と死がアートって言ってるのに、その、異性経験とかも——無いということかしら」

「——っ！ そ、そんなのアリナのアートに関係ないカラ…！」

「でも…性と芸術って切り離せないものでしょう？ フィリッポだって、オスカーだってラファエロだって…」

「ぐ…！」

「そういった経験って『生』においてすごく重要な…それこそ生物が生きる意味の大半を占めると言えるわよね。それを経験しないで『表現し尽くした』って、なんて言えいいのかしら——読みもしていないのに、レビューだけを見て作品を理解したって言ってる人みたいだわ」

「…！」

戦いの場の筈が、何故かデイスカッションになっている現状。そして戦ってもいないのに、敵の幹部である「マギウス」は劣勢であった。美しく整っている顔からは汗が止まらず、突き刺さるようなほむらの疑問に歯を食いしばっている。とはいえ公衆の面前で処女を暴露されればそれも当然かもしれない。

「ぐ、ぐ……：ヴァ、ヴァアアアア……」

「誤魔化しのヴァアはやめなさい」

「う、うう……！」

「性交渉の経験もない、それどころか異性と付き合ったことすらない貴女が——『人間の生と死』はもう表現し尽くしたと、本気でそう言っているの？ ……滑稽だわ」

「あ……：アアアアア!!」

ほむらの論破に、その場で崩れ落ちるアリナ。自身の矛盾を指摘され、芸術家としての未熟を指摘され、精神的に相当なダメージを負ってしまったのだろう。アリナの普段の様子からは想像もつかないが、そもそも芸術家とは基本的に精神不安定なものだ。少しショックを受けただけで何も描けなくなってしまうという芸術家の話は、枚挙に暇がない。

——しかし。彼女は世紀の芸術家に至る可能性を持った天才だ。アートを表現するために『自身がビルから飛び降りる様子』を定点撮影するような精神の持ち主だ。その意思の強靭さは、魔法少女としても芸術家としても凄まじい。

彼女はゆっくりと体を起こし、先程と同じように狂笑を浮かべて空を仰ぐ。幽鬼のように体を揺らし、宣言するように叫んだ。

「ーアッハッハハハ、ハは、アハハハ！ うん、そう……：簡単なことだヨネ。アハハハ！」

「……」

そして次の瞬間には駆け出し、全員の視界から消え去った。残された羽根達は暫し呆然とした後、弾かれたように動き出し、蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

何もすることのなかったやちよやマミ達は、引きつったような顔で

視線を交わし合っていた。まさになにを話せばいいのかわからない状況だろう。そんな中で最初に口を開いたのは——耳年増で、年の割におませないろはであった。

「あの……」

「ま、まあ結果オーライじゃないかしら。なにか企んでいたようだけど、あの様子じゃ無理でしょうし」

「いえ、そうじゃなくて、その……あの人、もしかして、えっと、その……」

「？」

「そ、その……処女を捨てに、あう……行ったんじゃないかって。『簡単なこと』って言ってましたし、もし本当にそうなら、や、やっぱり止めなきゃいけないと思うんです！　そういうのは本当に好きな人とじゃないと……絶対、適当に捨てていいものじゃないから！」

「……」

ほむら、マミ、なぎさ、やちよ、鶴乃、さな、フェリシア、いろは……程度の差こそあれ、先程のやり取りで全員が頬を染めていた。しかしいろはの指摘により、全員の顔が同時に青くなる。アリナの異常な様子ならやりかねないと、誰もがそう思ったのだろう。

いくら敵と言えど、うら若い少女が適当に花を散らそうとしているならば、同じ少女として止めざるを得ない。そのくらいの情はある。特にほむらは、明確に自分のせいなのだから焦りも相当なものがある。

——全員が頷き合い、走り出した。

神浜は大きく分けると『東』と『西』という区分になる。しかしそれは地理的というよりも、市民の意識的な意味合いが強かった。昔から西が上で東が下という——言うなれば選民意識のようなものが根付いているのだ。

実際として東の方が所得の低い世帯も多く、治安も少し乱れ気味であった。西の市民は東の市民を見下し、東の市民は西の市民を妬む。そんな気風が散見されるのが神浜という街だ。

そして今、東の『大東区』にある人気の無い道を、一人の男性が歩いていた。否、むしろ男性というより変態が歩いていた。茶色のコートで覆われた太めの体躯……しかし一度ひとたびコートの前部分を開ければ、そこには見るに堪えない裸体が曝け出される。

端的に言うならば露出魔であった。既に何度もこの姿で外出している常習犯であり、見られることに快感を覚えるどうしようもない人間であったのだ。救いがあるとすれば、露出に狂っているだけであり、強姦をする度胸など欠片もないということくらいだろう。

そんな彼は今——痴女に襲われていた。

「勘弁してくれえ！ お、おじさん強制性交等罪で捕まっちゃうよ！」  
「アツハハハ！ どのみち性犯罪者なんですケド！」

「ひいひい！ ママァー!!」

「アリナをママにするんだよお！」

普通の人間（変態）が魔法少女に抗える筈もなく、無人の倉庫に引きずり込まれた男は全裸にされてしまった。彼の下半身に付いている息子は突然の状況に萎縮してしまったのか、今は小康状態であった。

しかし美少女に迫られて臨戦状態にならない訳もなく、遠からず彼の純潔は散らされる。未成年者への性行強要……たとえ真実が逆でも、信じてもらえる確率はほぼゼロだろう。人生が詰む一歩手前であった。

——そんな彼の前に、救いの手が差し伸べられる。

「——待ちなさい！」

「アツ……ハア！ 誰かと思えばガンスリンガーガール……なにしに  
来たワケ？ アリナは今から生を味わうの。邪魔するんなら殺すケ  
ド」

「あ、貴女、本当にそれでいいの？ 好きでもない、それどころかそん  
な汚いおっさんに処女を……！」

「ひどいなオイ!？」

「犯罪者は黙りなさい。アリナ……だったかしら。ねえ、きつと後悔  
するわよ。女の子にとつてそれは大事なものでしょう？ 貴女は芸  
術家なのかもしれないけど、女の子でもあるじゃない。そんなに簡単  
に捨てていいものじゃないわ」

「ハア……散々アリナに説教したアナタが言うことじゃ無いヨネ」  
「ぐっ……」

「アリナはこのおっさんで新しいステージに昇るカラ。それとも何？

ガンスリンガーガールに邪魔する理由でもあるワケ？」

既に下着を脱ぎ捨てているアリナ。おっさんの態勢が整い次第、花  
が散ることになるだろう。ほむらは頭が茹だるほどに脳内から言葉  
を絞り出す。確かに自分にデメリツトはないが——だからといって  
認められる訳もない。

世の中には取り返しのつくものをつかないものがある。彼女の処  
女は間違いなく後者で、このままでは本当に好きな人が出来た時に  
きつと後悔するだろう。自身に関係がないとしても、目の前に咲いて  
いる美しい花が無理矢理に手折られるのを良しとしたりたくない……ほ  
むらはそう思った。そしてなによりも、彼女が正気に返った時にまた  
キレられるのが怖かった。

どうすれば止められるのか——悩み、悩み、とにかく悩む。おっさ  
んの醜悪なオットセイは既に成長しきっている。もう幾ばくの猶予  
もない。数秒の後には鞘に剣が収まってしまおうだろう。この場には  
アリナとおっさんと自分の三人のみ……そして何かアクションを起  
こせるのは己だけだ。

——手段は一つだけだった。

「——っ!？」

「ぐえええっ!？」

時間を止め、緑の美少女を抱きしめる。足元で何かが潰れたような音がしたが、それを無視してほむらは、唇が触れ合う寸前までアリナに顔を近付けた。一瞬で場面が変化したことに、驚愕の声を漏らす少女。甘い吐息がほむらの鼻孔をくすぐる。

「…どういうつもり？　アハ、まさかガンスリンガーガールがお相手してくれるワケ？」

「そうだと云ったら？」

「ふうん…？　アリナ的にはどうだっていいケド。じゃ、早くしてヨネ」

体重を預けてくるアリナに対し、ほむらはその背中に手を回しつつ口を開いた。とにかく今は時間を稼ぐことが肝要だ。納得できる詭弁を、無理くり捻り出す。

「…いいの？」

「いいカラ、早くして」

「そうじゃなくて…：順序を踏まなくていいのか聞いているの」

「…順序？」

「そこに至るまでって結構重要だと思うわ。だ、だから…：なんて言えばいいのかしら。まずAを済ませて、そこで自分や作品の変化を見て、ね？　今度はBを済ませて——って。全部省略してしまえば、段階を知らないまま完成してしまうわ。か、過程って大事よ」

「む…」

考え込むアリナに、なんとかかなっただろうかと胸を撫で下ろすほむら。既にこの場所は連絡済みであり、遠からず全員が集まるだろう。納得しなかった場合は、とにかく数を頼りにふん縛るといふ手段も視野に入れる必要がある。

それに加え——杏子への説明と釈明も必要であった。彼女も神浜へと既に足を踏み入れており、魔法少女の真実を知ったと連絡をしていた。杏子に何が起きたのかはほむらに知る由もないが、きつと話すべき時がきたのだろうと目を瞑る。

此処に全員が集まり、全てが共有される。ほむらのこと、神浜で起きていること、マジウスが企んでいること——最後に話しては話してくれるかも不明だが、なんにしても事態は動くだろうとほむらは感じた。

もう一度スマホを確認してみれば、何故か圏外になっている。ほむらは首を傾げながらソウルジェムに魔力を込め、テレパシーを繋いだ。キュウベえを介さない念話は大した距離を繋げないが、ちょうどよく全員が近くで合流したようだ。

すぐ近くにいることを伝えられ、倉庫の扉を開けて待ってしようとはむらが歩き出し……その直前、アリナに肩を掴まれる。そして偶然の女神が起こした奇跡だろうか、それと倉庫の扉が開かれたのは同時だった。

「ガンスリンガーガールの言うことも一理あるワケ。だから——まずは“A”だヨネ」

「——んむっ!？」

「お待たせ、暁美さ——っ!？」

「オイほむら、あたしになんか言うこと……っ!？」

「あーっ!？」

倉庫に集まった面々の目に入ったのは——唇を重ね合うアリナとほむらの姿であった。



## A B C より H I J K

魔法少女の実力とは意外と曖昧なものである。それは偏に、固有能力の多様性によるものだ。願いの方向性、あるいは本人の趣味嗜好、氣質が魔法少女としての能力を決める。どれほど才能のない魔法少女であろうと、願いによつては強い力を得ることもある——ほむらがいい例だろう。

それでも長く生きた魔法少女が「強者」足り得るのは、経験の豊富さ……そして「魔力の扱い方」に長けるからだ。実のところ魔法少女の攻撃手段とは、それが固有能力に寄らないものであれば、誰であつても同じことができる。

例を挙げると、マミの攻撃方法である銃撃や砲撃などがそれだ。彼女の攻撃手段は固有能力という訳ではなく、魔力を操作して自身のリボンを銃や大砲に変化させ、魔力を打ち出すというものだ。つまり魔力を変化させているだけであり、魔力を持つ者——魔法少女であれば出来得るものだ。

しかし出来るからといってやる者はいない。『出来る』ことと『使い物になる』かはまた別の話だからだ。魔力を編み、物質に変化させ、魔力を撃ち出す。言ってみればそれだけの話だが、そこには複雑な工程が幾つも入る。

戦闘時にそんなことをするくらいなら、最初から武器を作るなりなんなりした方が手っ取り早い。そう思う魔法少女が大半だろう。

そしてそんな当たり前を無視して、強者として抜きん出ているのがバمامィという少女なのだ。魔力を練り上げ、銃の作成に要する時間はほんの刹那。そこから照準合わせて撃ち出す早撃ちの技術も、そんなじよそこらのガンマンなど相手にもならない。

彼女の先を取りたいのなら、漫画の世界のキャラクターでも連れてこなければ話にならないだろう。昼寝とあやとりが得意な少年か、世紀の大泥棒の相棒か、超A級狙撃手か、その辺りであれば対抗馬として適当かもしれない。

——故にそれは中々の奇跡だった。あるいはほむらも歴戦と称さ

れる程に長く生きてきたからこそ、反応できたのかもしれない。アリナとのキスに驚きながらも、対応できたのは神業という他ないだろう。

マミの手のひらから魔力の奔流がほとぼしる。ほむらは唇の感触に戸惑いつつも、視界の端でそれに気付いた。

構えと同時に銃が具現する。ほむらは口内を蹂躪する舌の感触に頬を紅潮させながら、装着した盾のギミックを発動させんと魔力を込めた。

見た目だけは旧式のマスケット銃から発射された魔力の銃弾は、最新式の狙撃銃もかくやという速度でアリナの側頭部に迫り、完璧なヘッドショットが決まりかける——その直前、世界は色を失い停止した。

「——ふはっ……あ、アリナ、少し離れて……」

「……」

「アリナ？」

ほむらの腕に押され、ようやく唇を離れたアリナ。唇に残ったほむらの体液を舌で舐め取る仕草は、あまりにも淫靡であった。愛のいろはのABC——その最初の段階を済ませた彼女は、なんとも言えない達成感を覚え、なるほど悪くないと笑顔を浮かべた。

そしてようやく周囲の様子に気付く。自分とほむら以外の全てが停止し、灰色になっているその状況に。入り口の方に視線を向ければ、見覚えのある少女達が固まっている。

驚きで声も出ない——というのが普通の人間の反応だろうか。しかし生憎と、アリナ・グレイという少女は全く以て普通とかけ離れていた。掴まれたままのほむらの腕を自分からも握り、思い切り引き寄せる。

「痛っ……!? ちょよ、ちょつと……?」

「——コレ。ガンスリンガーガールがやったワケ？」

「そ、そうよ」

爛々と目を輝かせ、止まった世界を見廻すアリナ。瞳孔が開き、アドレナリンがドバドバと分泌されている様子にほむらは引いた。こ

の世界では主導権を握り続けていただけに、こうも翻弄されるとは、流石に悪の組織の幹部なだけはある……とよく解らない思考に陥っていた。

しかしいつまでもそうしている訳にもいかず、とりあえずは時間停止を解除する。仲間が襲われていると勘違いしてアリナを攻撃したマミにも、話を通す必要があるとほむらはため息をついた。

「落ち着いて、マ——っ!?!」

しかし時が動きだした瞬間、魔力の弾丸が壁を貫いた轟音が響く。アリナの頭部に当たっていた筈の攻撃の威力。それはおよそ人に向けるレベルのそれではなく、魔法少女と言えど当たれば真っ赤な花が咲いた筈だ。ソウルジェムさえ破壊されなければ致命ではなく、再生に魔力を消費してもこの地では魔女にならない——そうであっても、少し恐怖を覚える行為だ。

ほむらがちらりとマミに目を向けると、彼女は新しい銃を作り出してアリナに照準を合わせていた。慌てて射線に入り、その邪魔をする。味方になったという訳ではないが、今のところ戦いになりそうもないのだ。わざわざ刺激する必要もないだろう。そう考えてのことだったが、ほむらの行動を見たマミは更に表情を強張らせた。

「…何故庇うの？ 敵でしょう?」

「い、今のところは大丈夫だから——マミ、やめて」

「どいて暁美さん！ そいつ殺せない！」

「マミ!?!」

そんな騒動にもかかわらず、アリナは下を向いたまま動かない。心なしか震えているようにも見え、ほむらは心の中で首を傾げた。しかし事態は予断を許さず、まずはマミの暴走を止めなければ話にならない。攻撃こそ諦めたものの、遮るほむらと押し合いへし合いアリナの元へ向かおうとするマミ。

「マ、マミ?? どうしたっていうのよ。そんなに猪突猛進な性格じゃなかったでしょう? 鶴乃じゃあるまいし…」

「ひどっ!?! 私はちゃんと考えて突っ込んでるだけだよ！ ふんふん！」

「結局突っ込んでんじやねーか」

「鶴乃ちゃん…」

もつれ合ううちによく弱まってきたマミの圧力。そして、ここに至ってやっとほむらは気付いた。この世界にきた当初から『好かれる為に』色々と工作してきた訳だが、マミは想像以上に自分に好意を抱いているらしい——と。

となると今はどうすることが正解なのか。恋愛などしたことのないほむらであったが『全員を誘惑してやる』と決めた時から勉強はし続けている。『モテる男の恋愛事情！キスから始まるABC!』というハウツー本を教師に、今まで頑張ってきたのだ。ちなみに発行は昭和六十年である。

現状、マミの怒りはアリナに向いている。『女性の怒りは恋人の浮気相手に向かい、男性の怒りは恋人本人に向く』という言葉は正解だったのだとほむらは納得し、ハウツー本の偉大さを改めて思い知った。

そしてこういった場合の対処法も、その本にはしっかりと載っていた。浮気相手をどうにかするのではなく、『自分が愛されている』と認識させればどうにでもなるなどという、現代であれば女性に叩かれまくる一文が。

——ほむらは時を止め、マミの顎をくいと持ち上げた。

「…？ 暁美さ——っ!」

「——んっ…」

右手も左手も手のひらを合わせるようにしっかりと絡み合い、数秒、あるいは十数秒の時が流れる。止まった時間に流れるものにもないが、とにかくそのくらいの時間が経過した。何度かマミの喉がコクリと動き、二人の唇が離れた瞬間、彼女は顔を真っ赤にしてその場へへたり込んだ。

「あ、あ、あう…」

「——マミ」

「えっ？ あ、は、はいっ—」

「さっきはいきなりされてびっくりしたけど……自分からしたのはこ

れが初めてよ」

「あ、う……うん……！」

「……もう大丈夫ね？」

コクコクと首を縦に振るマミを見て、安堵の息を吐きながら時間停止を解除するほむら。戦闘でも非常に有用な能力だが、どんな時でも二人だけの時間を作れるという点も、複雑な恋愛事情において優秀である。

マミを抱き起こし、ほむらは改めて周囲を確認する。ハラハラとした表情で事態を見守っているいろは、やちよの五人組。はてなマークを浮かべながら困惑している気弱そうな少女と、その傍で項垂れている黒羽根。可愛く頬を膨らませているなぎさと、慄然とした表情の杏子。未だに沈黙を貫いているアリナと、その足元に転がる気絶した汚いおっさん。

何だこれ、と思いつつもほむらは口を開こうとした。誰かが沈黙を破らなければ、何も進まなさそうだと考えたからこそその行動であったが——それを遮るように、狭い倉庫を笑い声が満ちた。その発生源は当然と言うべきか、アリナ・グレイであった。

「アツハハハハハ！ 見つけた！ 見つけた見つけた！ 見つけたワケ！」

（いちいち怪談に出てくるお化けみたいな言動するのやめてくれないかな……）

「ねえガンスリンガーガール……」

「ど、どうしたの？」

「さつきまではアリナ的にも、誰を相手にしようがどうだってよかつたワケ。それこそフルガールでも」

「そ、そう……」

「けど……アハ、今は違うヨネ」

Ver<sup>時</sup>we<sup>よ</sup>ile<sup>止</sup> doch<sup>ま</sup>, du<sup>お</sup> bist<sup>前</sup> so<sup>美</sup> schoen<sup>い</sup>

——ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテの戯曲『ファウスト』での一節。あまりにも有名なこの言葉の真意は、いくつか解釈のしよ

うがある。

しかし場面にかかわらず、言葉そのものに議論の余地があるからこそ、後世に伝わり続けていると言えるだろう。アリナはほむらの能力によって時間停止というものを体験し、それを言葉通りに受け止めた。

『止まった時間は美しい』。間違いなく生きているというのに、全てが死んでいる。生と死の共存、矛盾を体現した奇跡。生命活動の一切を排除され、心臓の鼓動すら停止しているというのに生きている——ああ、これほど美しいものがあるだろうか。アリナは心臓に氷の刃が刺さったかのような、呼吸すら詰まる魂への揺さぶりを感じたのだ。『アナタの魔法はアリナのアートの必要だから。時間が止まるなんて、アレほど美しいものもないヨネ……うん、決めた！』アリナの破瓜は止まった時間の中が相応しいワケ。『アトリエ』で時間を止めて、ガンスリンガーガールと過ごすの……』

「は、はあ……」

アリナの言動を正確に把握できた人間は、この中に居なかった。そもそも理解されようとも思っていないだろう。彼女は基本的に自己のみで完結し、他者に求めるのはアートにおける刺激のみだ。それ以外は不必要。故に変人であり天才なのだ。

しかしそれでも一部を解する人間もいた。成り行きで杏子にくつついてきた少女——秋野かえでだ。彼女はアリナの言動からほむらの能力が『時間停止』であると認識し、その強力な固有魔法に舌を巻いた。そして『時間停止中の破瓜』という言葉にも、頬を染めながら反応した。

（ふゆう……なんだか時間停止モノのAVみたいだね、杏子ちゃん）

（テレパシー使ってまで言う必要があるかそれ!? ……つーかどこでそんな知識仕入れんだよ。なんだよ時間停止モノのAVって……）

（えっとね、この前お父さんの部屋に入ったら知ってるタイトルのDVDがあったんだけど……）

（……うん）

（『バック・トゥ・ザ・フユウチャー』って有名だけど、私まだ見たこ

となかったの。だからすぐに見ようとしたんだ…)

(予想できるからやめろ)

(でもよく見たら『ファック・トウ・ザ・フウチャー』だったの…)

(あたしの父親像を壊すんじゃねええ!!)

無言でかえでの肩を乱暴に揺する杏子。いろは達が何事かと視線を向けるが、二人だけの念話であつたために理解されず仕舞で終わった。そしてそんな二人をよそに、アリナの言動はヒートアップしていく。

「アア、そうだ…！　ねえガンスリンガーガール、案内したい場所があるんだヨネ」

「…？」

「アリナ達のアジトに来てほしいワケ」

「えっ!？」

「最高の芸術である“みふゆ”の体が、時間停止で止まったら——アツハハハ！　考えるだけでゾクゾクしちゃうヨネ…！」

「だ、誰よそれ…？」

『<sup>あすこ</sup>梓みふゆ』。それはマギウスの翼の幹部ではあるものの、“マギウス”とは違う立ち位置の魔法少女だ。どちらかという<sup>と</sup>協力者といつた方がいいだろう。なにせ計画の中心となる三人の幹部は、軒並み対人コミュニケーションが壊滅的だ。

故にみふゆが魔法少女の勧誘などを主に担当し『マギウスの翼』という組織を形にしたのだ。そして彼女はかつてやちよの仲間の一人であつた。仲間が一人散り、仲間が一人魔女となり、魔法少女の真実に耐えきれなくなった彼女は、救いをマギウスに求めたのだ。

しかし計画を進めていくうちに、他所への被害を一切顧みないやり口に心を痛めていった。やちよ達の行動もあり、既<sup>に</sup>みふゆの心はマギウスの翼から離れている。しかし彼女にはあまりにも大きな責任があつた。

大勢の魔法少女をマギウスの翼に引きずり込んだという責任。本来ならば知ること<sup>も</sup>なかつたであろう魔法少女の真実を教え、シヨックを受けた少女に『けれど救いはある』と囁いて、泥沼へ誘つた。だ

というのに、嫌気が差して自分だけが元鞘に戻ろうなどという、都合のいい行動など取れる筈もない。

今はとにかく翼達の安寧を——そう思つてマジウスの翼に所属し続けている少女だ。そしてそんな彼女は、とても美しい。有名モデルであるやちよの横に立つても、なんら遜色のない美貌だ。アリナはそんなみふゆの体に芸術性を見出しており、大切に扱っている。

美の結晶たるみふゆの体が、時間停止で止まってしまえばいったいどうなるのだろう。アリナには想像もつかず、故にアジトにいるであろう彼女の元へほむらを案内しようというのだ。

元より芸術以外に興味を示さず、「マジウス」としての行動もそのためであったアリナ。最高の芸術のコラボレーションという興奮の前には、計画もなにも気にはしなかった。

いろは達にとつては降つて湧いたような好機だが——しかし、そうであってもアリナの行動を容認できない人物がいた。みふゆが敵となつても、ひたすらに案じ続けていたやちよだ。親友がマッドアーティストの毒牙にかかるうというのだから、彼女の心配も当然のことだ。

「ダメよ」

「——ハア？ アナタの意見なんて聞いてないんですケド」

「みふゆをそんな……時間停止AVみたいなものの対象になんてさせないわー！」

「時間停止えーぶい？ ナニソレ、わけ解んないヨネ」

「…っ!? い、いえ、だから……その、えつと」

（ふゆう……私でも口には出さなかつたのに…）

「相当な変態だなアイツ……」

「ふゆっ!? きよ、杏子ちゃん、漏れてるよ!？」

「えっ? あっ」

「へ、変態……ううっ……」

「やちよさーん!？」

つい口に出してしまった卑猥な単語。しかしアリナには理解されず、自分がなんだか汚れているように感じ、やちよは動揺してしまっ



た。そこに追い打ちをかけるような杏子の『変態』という言葉。この中で自分だけが成人一歩手前ということもあり、もう取り戻せない純真さを嘆いて地面に突っ伏してしまった。

「なあ、さな。時間停止えーぶいつてなんだ？」

「わ、私にもよくわからなくて…」

「いろはー？」

「ひよえっ!? わ、わたしもワカラナイカナ…」

「鶴乃は？」

「…！ え、えつとね…アニマルビデオの略だよ！」

「時間停止アニマルビデオってなんだよ…？」

「と、とにかくそうなの！」

「ぐ、ぐふうっ…」

後ろから聞こえる仲間たちの一部ピュアなやり取りも、やちよの心へ追撃を放っていた。それでもなんとか武器を杖に立ち上がる。この中でR指定を乗り越えられるのはやちよと鶴乃だけである。その事実を支えに、純真さの差ではなく、年齢差が認識の差異を生んだのだと自分を誤魔化したのだ。

「早く行こうよガンスリンガーガール。もうワルプルギスの夜なんてどうでもいいワケ」

「え、ええ——えっ!? …今、ワルプルギスの夜と言ったかしら」

「そうダケド」

「——何故その魔女の名前が出るの？」

「『エンブリオ・イブ』の孵化に必要なエネルギーが足りないカラ、ワルプルギスの夜を神浜へ呼ぶ必要があったんだケド…アリナ的にもうどうだつていいワケ。そんなことよりさっさと——」

アリナのその言葉に、ほむらは愕然とした。エンブリオ・イブが何かも知らなければ、魔女をどうやってエネルギーにするのかも理解できない。しかし唯一解ることは、マグウスに『ワルプルギスの夜』の進路を変更する手段があるということだ。そして神浜へ進路を変更するということは、見滝原の安全を意味する。

これもう放つといて帰れば丸く収まるんじゃないかしら、という考

えがほんの少しだけ脳裏に過る。それはほんの一瞬、秒にも満たない刹那の思考だった。しかし邪な考えとは、男性のスケベな視線ばりに気付かれるものだ。

——チラつとやちよを見るほむら。ジトつとほむらを見るやちよ。

「——さささ、さあ！ マギウスの野望を止めに行きましようか！」

「…そうね」

「目的はみふゆなんですケド？」

「それじゃあしゅっぱーっ！」

「かますぜー！」

「ふ、ふゆ……あの、レナちゃんとももちゃんも呼んだ方が…」

「さつきから連絡しようとしてるんだけど、ずっと圏外なの」

「っーか何が起きてるか誰か説明してくんない？」

「なぎさにもよくわからないのです」

成り行きのぐだぐだパーティ。当初の目的である調整屋にすら辿り着いていないが、諸々をすっ飛ばして向かうはラスボスの本拠地。残るマギウスは二人、挑むは十一人。

——完全にリンチであった。

## マジウス

『マジウスの翼』本拠地——ホテル「フエントホープ」。建物そのものが『ウワサ』によって創り出された、驚きの建築物である。敷地も広く、ホテル前の広場では、羽根たちが戦闘訓練を頻繁に行っているほどだ。

常であれば何人も常駐しているこのフエントホープだが、今だけは例外である。マジウスの計画もいよいよ終盤に向かい、既に手足を揃える必要性も薄い。防衛に必要な手数だけを残し、マジウスである灯花とねむは計画を詰めていた。

「ここが『マジウスの翼』の本拠地……」

「もしかしたら——ここに“うい”が……!」

アリナへと導かれ、この地へとやってきた一行。しかしラスボスの拠点というには少々凄みが足りない様子に、何人かは拍子抜けしているほどだ。少年漫画などをこよなく愛するフェリシアなどは、おどろおどろしい魔王城を予想していただけに、不謹慎ながらも物足りない様子であった。

——そんな彼女たちの前に慌ててやってきたのは、マジウスの翼の構成員である黒羽根の一人だ。仇敵とすらいえる『環いろは』のチームがそろそろとアジトへ乗り込んできたのだから、その焦りも当然のことだろう。マジウスであるアリナが集団の前を歩いているとはいえ、放置できる筈もない。

「あ、あの——これは?」

「……」

「あ、あの……?」

「——なんでアリナがわざわざ説明しなきゃなんないワケ?」

「ひっ……! い、いえ、ですが……」

時間停止状態の『みふゆ』の裸体を想像し、期待に胸を高鳴らせていたアリナであったが、そんなルンルン気分を邪魔してきた羽根を鋭く睨みつける。その黒羽根はマジウスの恐ろしさを——とりわけ前

線で戦う機会が多かったアリナの狂気をよく知っていたため、恐怖に身をすくませる。

とはいえこの本拠地に残された羽根たちは、理想に殉ずる覚悟を決めた者たちだ。灯花とねむが選別した『裏切る可能性が薄い羽根』である。それはマグウスへの忠誠ではなく、『魔法少女の解放』という奇跡を求めるためであれば、どんなことでも厭わないという覚悟を根幹としている。マグウスの一人であるアリナに対しても、侵入者を招き入れるような暴挙に及ぶのなら、実力差を承知で歯向かう気概があるほどだ。

——アリナがいればフリーパスだろうと気軽に考えていたやちよ達は、そんな険悪ムードにうろたえた。まさかなんのフォロームなしに放り投げられるなどは、つゆ程も思っていなかったのだ。散々に羽根たちを倒してきた過去がある手前、いまさら降伏したなどと宣える筈もない。穏便な侵入は諦めるべきかとやちよが思案したその時——胸の中心からやや左に突きつけられた、冷たい鉄の感触に気が付いた。

「……これが見えないの？ いちいち説明を受けないと理解できないなんて——いえ、黒羽根程度に期待した私が悪いわね」  
「……っ！ あなたたちは……？」

左腕でやちよを引き寄せ、腰に手を回しつつ、右手の銃を胸にあてるほむら。本気を示すためか銃身の先はしっかりと密着させ、柔らかな豊かな胸にふにゆりと埋まっている。あるいは自分の平原とはまるで違う、巨大な山への嫉妬も込みだったのかもしれない。

そんな彼女の意図を汲んだのか、やちよは大人しくされるがままだ。見滝原組はマグウスの翼に認知されておらず、新しい羽根だと言い張ることも可能である。むしろほむらの言動を考えれば、通常の羽根よりも立場が上であると振る舞うことで、潜入をより容易にしようとしているのだろう。

頂点は『マグウス』。底辺は『黒羽根』。その一つ上が『白羽根』なのだから、自分たちはどうするべきか——といったところで、ほむらの意図を察したママが前に出る。

「私は『黄羽根』の巴マミよ」

「は、は…？ き、黄羽根…？」

『紫羽根』の曉美ほむら」

「い、いや、ちよ…」

『赤羽根』の佐倉杏子だ」

「何色あるの!？」

赤羽根と名乗った杏子に、募金でもするのかと鋭いツツコミを入れる黒羽根。しかしやちよを人質にとっている現状と、マジウスであるアリナが何も言わないのを見て、訝しがりながらも身を引く——が、後ろに陣取っていたなぎさの存在に気付き、もう一度声を上げる。

「こんな小さい子まで…？」

「うえっ!？ え、えつと、なぎさは…：…なぎさは…」

イメーჯカラーで言うならば、なぎさは完全に黒である。しかし子供特有の負けず嫌いが発動したのか、黄色よりも紫よりも、そして赤よりも上の色を模索する。その上で彼女が出した結論は——

「ぜ、ゼブラ羽根の百江なぎさなのです!」

「色ですらない!」

「シマウマさんは強いのです」

やはりなにかおかしいと、怪しげに一行を見つめる黒羽根。そんな彼女を見て、このままではまずいかと考えたほむらは、実力行使に出ることにした。やちよをマミへ任せ、スタスタと黒羽根へと近付いていく。いったい何をしでかすのかと、身を構えた黒羽根は——次の瞬間、地面へと叩き付けられ、後頭部に銃を突きつけられていた。まるで時が跳んだような感覚に驚くも、地面に這いつくばる彼女は、ただただうめき声を上げることしかできない。

「…実力の差が理解できたかしら。『色付き』とそれ以外には、絶対的な壁があるの。それとも、上下関係すらわからない愚かな羽根は——  
筆り取るべきかしら?」

「ぎっ…っ、あ、も、申し訳…：…ありません、でした…」

なにをされたかも理解できなかった黒羽根は、その絶望的な戦力差に慄く。人間としても、魔法少女としても日常の外にある「銃」への

恐怖。僅か数センチ指を動されるだけで、頭の中身をぶちまけていたという事実。そんな凶器をこともなげに人へ向ける、ほむらへの恐れが彼女の中に渦巻いていた。

まるで小動物のように怯えるそんな黒羽根に、ほむらは流石にやりすぎたかと目を閉じた。元々は気弱な性質の彼女だ——強者に抗えない弱者の気持ちも、痛いほど身にしみている。だからこそ、座り込んで立ち上がれない黒羽根をそのままにはしなかった。

「……ごめんなさい、少しやりすぎたわ」

「え？ あ……」

「ここを守ろうとしたんでしょう？」

「あ……えっと、はい」

「いい子ね」

「ひやつ!?! は、は……ひゃい……」

目深に被ったフードの中へ手を差し込み、黒羽根の頬へ手を添えるほむら。任務を全うせんとした彼女の気概を褒め、称える。その行動に他意はなかったものの、このところ誘惑ムーブが板についていたせいか、自然と蠢惑さが滲み出ているのはご愛嬌である。

「それじゃ、私達は行くから」

「は、はい……」

「任務、頑張ってね」

「はいー!」

暴力で屈服させた後に優しく接することで懐柔する——完全にドメスティックでバイオレンスなやり口である。神戸組の何人かがドン引きしつつも、一行はホテルの中へと足を踏み入れる。暗い雰囲気、漂う館内をスタスタと歩いていくアリナに、ほむらは気になっていた疑問をぶつける。

「ねえアリナ……マギウスの翼はいったい何を目指しているの？ 魔法少女の解放というだけじゃ、なにも見えてこないわ。ワルプルギスの夜はどう関係してるのかしら」

「話せば長くなるワケ。そんなのより最高のアートの優先されるべきだヨネ……! はやくみふゆの——」

「なら私もあなたのアートには協力できないわね。テイクがなければギブも必要ないワケ」

「ぷっ……」

「に、似てる……」

「真似しないでヨネ、ガンスリンガーガール。でもアリナのそれはバッドだから——」

話してあげる、とアリナは語りだした。それはいろは達がどうしても知りたかった事実でもあり、その場の全員がゴクリとつばを飲んで聞き入る。

「アリナがビルから飛び降りて入院した時……灯花とねむに出会ったんだヨネ。そのへんの凡夫と違う二人は、アリナにとっても興味深かったワケ。出会ってからしばらく経ったあと……夜のホスピタルに魔女の気配を感じて行ってみたら——そこでアリナは、面白いものを見つけた……！ 灯花とねむの横に佇む、奇妙なマジカルガールを……！」

「奇妙な魔法少女……？」

「穢れをそこから吸い寄せてるのに、一向に完全な魔女へと変化しない——半魔女とでも言うべき存在……！ 美しくはないケド、興味深いヨネ……それでしばらく観察してたら、灯花とねむが言い出したワケ」

——『これを利用すれば、魔法少女の理を改変できるかもしれない。』

「その計画が成功すれば、アリナは魔女をさらなるアートに導ける……！ 灯花とねむも、それぞれの願いを叶えられるカラ——アツハハハ……！ そう、全ては一致したんだヨネ」

「……もしかしてその存在が……エンブリオ・イブ？」

「そう！ まずはアリナが神浜を覆う“被膜”を造って、イブが穢れを吸収する範囲を絞って——」

「なんですって？ そんなの……一人の魔法少女が維持し続けるのは不可能だわ」

「それを可能にするカラ、“魔法少女の解放”なワケ。イブが集めた

穢れを、灯花が固有魔法で魔力へ“変換”……それをアリナが被膜の維持に使うの」

「穢れを魔力に？ そんなことが可能なの？」

「なにか勘違いしてるみたいだケド、穢れも魔力も本質はただのエネルギーなワケ。固有の能力でも、キュウベエの技術でも変換効率100%で運用可能だヨネ」

「……」

「重要なのはね、ガンスリンガーガール……希望が絶望に転じる時に、変換率が100%を超えるコト。そのエントロピーの逆転現象を作為的に引き起こしたいカラ、アイツらは魔法少女を増やし続けてるワケ」

「……つまり、神浜で魔法少女が魔女にならないのは……」

「アハハ、そう！ イブがそのためのエネルギーを回収するカラ！

このシステムを世界中に広げれば、それは“魔法少女の解放”になるワケ！」

アリナが話した事実を完全に理解できたのは、やちよとほむらだけだった。キュウベエと魔法少女に関する事前知識を論理立てて解釈していなければ、彼女の説明はあまりにも難解であったからだ。だからこそ、フェリシアやさなからは肯定の声が出てしまったのだろう。

「それってめっちゃめっちゃいいことじゃん！」

「で、ですよね……？」

「——そんな都合のいい話はないわよ」

「や、やちよさん……？」

「そのシステムを維持するために——魔法少女とは無関係な人にまで“ウワサ”をけしかけてるんでしょう？ 今でさえエネルギーが足りずに、伝説の魔女を呼び込まざるを得ない状況になってるじゃない。世界規模でそんなものが成り立つわけがない！」

「最初に必要なエネルギーが足りないだけだヨネ。システムを構築し終わったら、維持にかかるエネルギーは大したものじゃないワケ。火力発電だって水力発電だって、起動させる時に一番コストがかかるんだヨネ」



「それだけじゃないわ。このシステムの根幹はつまり——魔法少女が背負っている不幸を、全世界の人々に押し付けるってことでしよう。無関係な人の悲哀が、嘆きが、負の感情が……システムの支えになってる！」

「アツハハハ！ 正解！ でも……だからナニ？ 逆に言うなら、今は魔法少女が理不尽な不幸を押し付けられてるヨネ？ それを正すことがそんなにかかしいワケ？」

「——それは……！」

「おためごかしはやめなさい、アリナ。一般人の幸せが、魔法少女の不幸の上に成り立っているとでもいうの？ 魔法少女になって……理不尽なことなんて数え切れないほどあったけれど、それでも私は後悔していない。何度だって——何度だって繰り返し返してきた。いつか自分の願いを叶えるために。その選択は、私の……私だけのもの。幸せな人も、不幸な人も……幸せな魔法少女も、不幸な魔法少女も、なにも変わらなきゃあああつ?!」

「ガンスリンガーガール……！」

真面目な表情でアリナへと言葉を紡ぐほむらであつたが——その途中で頭をガシリと掴まれ、悲鳴をあげる。その下手人であるアリナの瞳は、爛々と怪しく輝いていた。ほむらの瞳の奥を覗き込むように見つめる様は、彼女がアートの対象を見つけた時の、異常な行動を思い起こさせる。

「ナニ？ その瞳…… アツハ——どう生きたらこんな眼になるワケ？ まるで死ぬ前の象みたいだヨネ……」

「ちよつと、ア、アリナ……離して……」

「アツハハハ！ すごくイイ……！ 抉り出してアリナの部屋に飾りた……い……！」

「なつ——！」

「……シット。怯えないでよガンスリンガーガール……ずっとさっきの瞳でいてえ……！」

「ひっ……！ た、助けて巴さん……」

「やべえなアイツ……」

「お友達にはなりたくないタイプなのです」

昔に戻ったように、怯えながらマミの背に隠れるほむら。敵地だというのに、緊張感の欠片もないやりとりであったが——なんとか進んで行くうちに、一行は階段へと辿り着いた。当然のように上へと進むアリナへ、ほむらは待ったをかける。

「アリナ……あなたはもう、計画への興味がなくなって言ってたわよね」  
「そうだケド？」

「私はその計画を止めたいの。協力してくれるなら、私もあなたのアートの挑戦に協力する……それでどうかしら」

「それは別にいいケド……いまアリナが被膜をといったら、ロクなことにならないワケ」

「……どういうこと？」

「イブが穢れを吸収する範囲を神浜に留めたのは、灯花のエネルギー変換速度が追いつかないカラ。もし被膜がなければ、イブは全世界から穢れを集め始めるワケ。その結果がどうなるかはアリナにもわからないケド……」

「……けど？」

「被膜のもう一つの役割は、キュウベえを神浜から締め出すことにあるワケ。無尽蔵に穢れを集める特異な半魔女——アイツらが興味を惹かれるには充分だヨネ。イブの存在が明るみになれば、きつとこぞって駆けつけてくる……その先がどうなるかはアリナにもわからないワケ。ま、灯花とねむの目的は元々そこにあるカラ、なんとかするのかもしれないケド」

「……」

「魔法少女を作り出すよりも効率の良い『穢れ収集システム』の樹立……これを交渉材料にして、キュウベえと取り引きしたいんだヨネ、あの二人は。人類とは比べ物にならない技術を持った宇宙人から、知識を引きずり出す——アハッ、ファンタステック！」

「——結果として魔法少女は救われる……か。そういえばキレイシヨンランドでもそんな風に言ってたわね。結局、自分たちの願いのためののね？」

「結果が同じなら、過程なんてどうでもいいワケ」

睨みつけてくるやちよを軽くないなし、アリナは肩をすくめる。そもそも本来の計画からすれば、彼女は必要のなかった人材である。灯花の「変換」、ねむの「具現」、そして半魔女の「穢れを回収する能力」があれば事は成る筈だったのだ。

彼女たちにとっても予想外の事態が起こった結果、状況はより複雑なものとなり——運命は複雑に絡み合った。もつとも、それを認識できているものは誰一人としていないが。

「ま、計画を阻止したいなら……イブの方をどうにかするべきだよネ。もしくは灯花かねむのどっちかでも殺せば、システムの構築はインポッシブルなワケ」

「こ、殺すって……」

「アツハハハ！ どっちも同じだケド？ イブは半分が魔女なんだから——もう半分はナニ？」

「……」

言葉の意味を理解したやちよは、苦々しげに唇を噛む。そんな彼女を嘲るように、アリナは道を示した。マギウスの二人を殺したいなら上へ——イブを殺したいなら下へ、と。

しかしそんなことをすぐに決断できる人間ではないからこそ、いろは達はマギウスの翼と敵対してきたのだ。計画を阻止するためにはべきことは明るみに出たが、彼女たちの歩みは逆に止まってしまった。不安そうに顔を見合わせる少女達であったが、しかしここは敵の本拠地だ。進み続けなければ、いずれ出会うことになる。そう——  
「くふっ、なんで環いろはたちがこんなところにいるのかにやー？」  
「それもアリナが先導しているなんてね。僕にも理解しかねるよ」

——円環のように、彼女たちは最初から繋がっているのだから。

コツ、コツ、コツと階段を下りる音が響く。その音の緩やかさからは、たつぷりの余裕が感じられた。とはいえ、それも当然の話だ。なぎさと同じような年齢の二人ではあるが、その実力はこの場の誰よりも高いのだから。

それはやちよやほむらのように百戦錬磨からくるものでもなければ、マミや杏子のように戦いのセンスがずば抜けているといった要因でもない。ただただ魔力の膨大さを頼りにした、純粋なパワーによるものであったが——こと魔法少女の戦闘においては、それがなによりも恐ろしい。

膨大な魔力さえあれば、たとえなりたての魔法少女であっても、ワルプルギスの夜を一撃で倒すことすら可能なのだ。膨大な魔力の消費はソウルジェムの穢れに繋がってしまうが、しかしここ神浜では穢れすら力と成り得る。彼女たちの余裕も当然といったところだろう。

「ねえアリナ、これはどういうことなのかにや——みぎやあああ!?!」  
「と、灯花!?! いったいどう——ふみゆううう!?!」

「あなた達がマギウスね? 悪いけど話を聞いている暇はないの」  
「ちよつ:!? な、なにをしたの?」

「時間を止めて催涙スプレーを直射しただけよ」

「え、エグい…」

「お前が持ってたのって軍用だろ:?? 直に眼つて、おま、失明するぞ  
オイ…」

「魔法少女なら問題ないわ。それよりさっさと縛るわよ」

「目があああ!」

「熱いいいい!」

床にジタバタと這いつくばる幼女たちを後ろ手に縛り、猿轡さるへんつわを噛ませ、目隠しを当てたほむら。さながら陵辱五秒前といった様相を呈しているが、周囲は少女たちのみという事実が、ギリギリ十八禁を回避していた。

「あ、曉美さん……その、少しやりすぎじゃ……？ 灯花ちゃんもねむちゃんも、そんなに悪い娘じゃなくて……」

「悪くない娘が大勢の人を苦しめるの？ あなた達の話聞く限りでは、死人が出ていてもおかしくない状況がずっと続いていたように思うけれど。その上この二人は……それをちゃんと理解していた」

「で、でも……！」

「別に殺したりはしないわ。でも、彼女たちを自由にできるほど余裕があるわけでもない。ほぼ無限の魔力を持つ相手よ？ 正直、拘束が効くかも怪しいもの。だから——」

『フェリシア、お願いね』とほむらは灯花をかつぎ、ねむを杏子に任せる。フェリシアの固有魔法は『忘却』であり、武器であるハンマーで対象を叩くと、一時的に記憶を飛ばすことができるのだ。意を汲み取ったフェリシアは、一つ頷いてほむらの後ろへ陣取る。

「んむむむ……！ こんなひやおうによむ……！ わにやうみのちにやまがあめみや……！（こんな拘束……！ わたくしの力があれば……！）」

「ていつー！」

「ふぎやつ……！ にゃんめわにやうみ……？ にゅう……！ によんにやもわにやうみのちにや——（なんでわたくし……？ くっ……！ こんなのわたくしの力——）」

「ていつー！」

「ふぎやつ……！ ……？ あにえ？ わにやうみ……！」

「そいつー！」

「ふぎやあつ……！」

「む、む……い……！」

「このままイブのところへ行きましょう。考えるのも、どうするのかもそれからよ」

イブが集めた穢れを魔力に変換するのは、灯花の能力である。彼女を無力化してしまえば、ねむの方も大した力を出せない。アリナからの情報でそれを理解していたほむらは、細心の注意を払いながら道を進む。

そしてアリナに案内された、イブへと続く階段。そこからは濃い穢

れのような瘴気が漂い、踏み出すことを躊躇させる雰囲気が進み出ていた。

「これは…」

「アハ、イブが神浜中の穢れを集めてるプレイスがまともな筈ないヨネ。慣れてない魔法少女にはキツイワケ」

「そりやっ！」

「ふみゅっ!？」

「…大丈夫なの？」

「普通に羽根も出入りしてるワケ。一般人ならともかく、魔法少女がこの程度の瘴気も耐えられないなんてありえないヨネ」

「ほいっ！」

「にやあっ!？」

「あ、あの…：灯花ちゃん、馬鹿になっちゃいませんか…？」

「その時はその時よ」

「きちやいけない時ですよ！」

「ドカーン！」

「ぎにやっ！」

「フェリシアちゃあん…」

「楽しくなってきた！」

ハンマーが振り下ろされる音と小さな悲鳴だけが暗い階段に響き渡る。そして一行が辿り着いた先には——歪にゲーディングされた広場と、その中でなお異彩を放つ、巨大な蛾のような化け物が存在していた。

「これが…？」

「そう、『イブ』だヨネ」

「…私には魔女にしか見えないのだけれど。あなた達は何をもってアレを半魔女と呼ぶの？」

「希望と絶望の相転移が行われていないカラ。穢れを吸い込みはしても、放ちはしないカラ。それと——アツハハハ！ まだ中にいるカラ！」

「…！ 魔法少女が、ということ…？」

「もうたぶんとしか言えないケド。最初はお腹の宝石部分に、人型のエネルギーを感じてた……ケド、イブがグロウアップするにつれて反応は弱まっていったんだヨネ」

「…そう。いまさら元魔法少女を殺すことに躊躇はないけれど——助けられるのなら助けたいわ。何か手立てはないの？ アリナ」

「ドンノウ……イブに関してはアリナの管轄じゃないワケ。その二人に聞くべきだヨネ……素直に話すようなパーソナリティじゃないケド」

「…そうね。どうしたものかしら」

巨大な半魔法女を見つめ続けるほむらたち。彼女たちは既に魔法少女として生き続けることを覚悟した者——つまり元魔法少女を殺し続けることを覚悟した者たちだ。そしてだからこそ、半分とはいえ魔法少女であるならば、どうにか救いたいのだ。

「…仕方ないわね。最後の手段だったけれど…」

「なにか手があるの？」

「できる限り状況を把握したいけど、この二人から正しい情報が得られるとは思えない。ならもう手段は一つしかないでしょう？」

「…？」

「この地球上のどんな存在よりも情報を持っていて、情報を推測できる下地があつて、そして嘘はつかない奴がいるでしょう？」

「…！ あなた、まさか…」

「出てきなさい、キュウベえ」

ほむらが盾のギミックを発動させ、時間の止まった異空間から白い小動物を取り出す。いったい何が起きたのかと周囲を見渡す彼は、見た目だけなら可愛い愛玩動物であった。しかしその様子もほんの少いで、すぐに状況を把握する姿勢は、やはり有能な異星人であることを窺わせる。

「ひどいじゃないか、ほむら。僕たちの歴史は長いけど、盾に収納されたのは初めての経験だよ」

「あら、私が初めてだなんて……光栄だわ」

「そういう意味で言ってるんじゃないんだけど」

「知ってるわ。でも貴方は私に感謝すべきじゃないかしら？一度、断りはしたけれど——ここが貴方が来たがっていた場所。神浜の境界の内部よ」

「うん、それについてはお礼を言わせてもらおうよ。君の盾の中にいれば侵入できる可能性は高かったからね」

「ちよ、ちよっと！大丈夫なの？」

「ワーストとバッドなら、後者を選ぶのは仕方ないでしょう？」

「そ、それはそうかもしれないけど……」

「時間があるならともかく、今はこの街にワルプルギスの夜が向かっているのよ。行動しなければ、必ず後悔するわ」

「……！……ええ、そうね」

やちよが納得したのを見て、ほむらはキュウベえに向き直る。無機質な瞳でイブを見つめていた彼は、その視線に気付いて首をこてんと傾けた。既にキュウベえの本性を知る彼女たちに愛想を振りまく意味はないが、癖になってしまっているのだろう。

「あなたの望みは叶えたわ。なら私のお願いも聞いてくれるわよね？」

「そうだね。お願いにもよるけど、僕にできることなら」

「そう——なら、単刀直入に聞くわ。この半魔女を元に戻す方法はあるの？」

「半魔女……か。言い得て妙だね。確かにこれは、僕たちの知るとんな魔女とも違う……いや、僕たちの定義からすれば魔女とは言えない代物だ」

「ええ、魔女にはなっていない……でも、魔法少女とはとても言えたものじゃない」

「簡潔な答えを求めているようだから、率直に言わせてもらおうよ。〃現時点では僕たちにもわからない〃」

「……役たたずね」

「それはひどいな。僕たちだって万能じゃないんだ。君たちにとってそう見えるとすれば、それは文明の差異と積み重ねた歴史が——」

「……ちよ、ちよっといいですか……？」



「——君は……環いろはか。どうしたんだい？」

「あの、この子のことはわかる…？ あなたと関係がないとは思えないの…」

「それは——…？？」

ほむらとキュウベエの会話に割り込んだいろはの手には、小さなキュウベエとでも言うべきものが鎮座していた。胡散臭さと怪しさが漂うキュウベエとは違い、きゆるんとした瞳がキュートな、真正正銘の愛玩動物といった出で立ちだ。

それはいろはが神浜へ来た時から、ずっと彼女の傍らに存在していた謎の存在である。普通の小動物ではありえず、しかしキュウベエのように喋ることもできない。いろはも気にはしていたのだが、優先するべきことが多く放置していたのだ。

「…きゅっぷい」

「…もきゅっ」

「きゅ？」

「もきゅきゅっ！」

「…なんて言ってるの？」

『もきゅ』と言っているようだね」

「見ればわかるわよ」

「冗談だよ……これは確かに僕たち『キュウベエ』だね。ただ…」

「…ただ？」

「メイン機能が全て失われているみたいだ。グリーンフシードとその機能を『回収』する機能。穢れと魔力を相轉移させるための『変換』の機能。そして願いを叶えるための『創造』の機能が……——いや、これは……失われたというより、奪われたのかな…？」

「…奪われた？ あなた達からそんなことをできる存在がいるの？」

「この星の技術じゃありえないさ。それを可能にするとすれば……魔法少女の願いくらいだろうね」

「…前々から思っていたのだけれど、あなた達って自分が不利益を被る願いでも平気で叶えるわよね」

「僕たちにとっては契約が最優先だからね」

呆れたようにため息をつくほむらであったが、後方にいた鶴乃が急に前へ飛び出したことで、肩をびくりと震わせた。いまだに突発的な事態には慣れない少女である。

「わかったあー！ ふんふん！ 名探偵『由比鶴乃』にはわかってしまったのです！」

「うるさいわね……何がわかったって言うのよ」

「ちっちゃ……我がライバルとは思えん発言ですなあ」

「ライバルになった覚えはまったくないけど、それで？ なにがわかったの？」

「さつき聞いたじゃん！ 変換 創造 回収 の能力！」

「……？ ——あ……！」

鶴乃の言葉に全員が灯花、ねむ——そしてイブへと視線を移す。その指摘は、彼女たちがキュウベエの能力を奪ったことを如実に表していた。そして『一匹』のキュウベエから同時に機能が奪われたということは、その願いは三人が一緒に叶えた願いという真実へと繋がる。「アリナ……あなたはこの娘たちのすぐ近くにいたイブを見つけたのよね？ ……だったらこの二人は——仲間か友達を犠牲にしてまで、願いを叶えたということ？」

「そんな筈ないワケ。灯花とねむが魔法少女になったのは、それより前だヨネ。アリナがマジカルガールのことを教えて、それで二人が願いを……願いを……どこで……？ アリナは一緒にいた筈なのに、覚えてない……イブがいたカラ 変換」と 創造 を……ケドそれだと逆に……？ ——ヴアアアア!!」

「ひゃっ!? ア、アリナ……？」

「……シット。辻褄が合わないヨネ。アリナが忘れるなんてインポツシブル……記憶を弄られてる……？」

頭をガリガリと搔くアリナに引きつつ、どういふことなのか考え始めるほむら。灯花とねむに、もう一人を加えた三人で願いを叶えたのは間違いないだろう。その願いがキュウベエの能力を奪うことであるのも。問題はそのうちの一人が半魔女と化し、その上で彼女の存在を、灯花とねむが覚えていないことにある。

「…アリナ、あなたも利用されていたということはないかしら。『イブを知らない』というのは二人の嘘で、それを隠したまま何かを企んでいたとか…」

「…そんな嘘についても意味ないヨネ。あの二人の能力が変換と創造で、イブが回収なんだカラ…：リザルトはもう決まってるワケ。仲間を使い潰したのをアリナが知っても、協力しない理由にはならないヨネ」

「そう…：なら本当に忘れてる…？ だとすれば、どういうことになるのかしら。他に黒幕がいて、彼女たちを操っている可能性も否定できないわね…」

「冗談はやめてヨネ。アリナたちが操られてたなんて、ありえないワケ」

「いま記憶を弄られてるって言ったばかりじゃない」  
「うぐ…」

新たな黒幕説が出始め、さらに事態が複雑な方向へ向かったことに、アリナ以外の全員が頭を抱える——そしていつの間にか消えていた『音』に、誰もが気付いていなかった。違和感があると人は気付くが、『無い』ということに人は気付きにくいのである。

「にやあー!!」

「…っ!? しまっ——フェリシア!」

「あ、忘れてた」

「お馬鹿あー!」

「くふっ、くふふ…！ もう油断はしないよー。くふっ——ここまで強化すれば、どんな攻撃も通さないかにやー?」

「くっ…：しまった…」

時間停止に対する防御策——その一つとして、『絶対的な防御力』というものがある。どんな攻撃も通さなければ、時間が止まろうとも意味はない。それを馬鹿げた魔力で実現させられるのが、灯花という少女だ。膨大な魔力で空間が揺らぎ、無造作に振った傘から高威力のエネルギーが発射される。目標は、ねむを抱えている杏子だ。

「ビッグバーン!!」

「ぐっ…!? ど、どんな威力だよ…!」

「くふっ、ねむも取り返して——にやつ!」

「そう簡単にはいかせないわよ」

容易く奪い返された事実を唇を噛む杏子であったが、灯花の腕に抱えられたねむが一瞬にして消えたのを見て、こちらもちちらで反則だなど呆れる。そして次にほむらがとる行動にも予測が付き、つくづく味方でよかったと胸をなでおろした。そう——人質をとることに、彼女は躊躇しないだろう。

「動かないで。撃つわよ」

「…! …撃つたところで意味はあるかにやー? …ここは神浜だもん。どんな傷を負ってソウルジェムが穢れても、魔女にはならないんだよー?」

「——ソウルジェムを撃つと言ってるのだけど」

「…っ! …あなた達にそれができるのー? …正義の味方ごっこが好き——」

灯花の手がピクリと動いたのを見て、ほむらは撃鉄を起こした。ここ最近で随分と丸くなった雰囲気は鳴りを潜め、どこまでも冷徹な眼光が灯花を貫く。

「…いまさら躊躇はしないわ。命より大切な友達のソウルジェムを撃ち抜いたことだつてある…:…それと同じくらい大切な人もできた。この娘のソウルジェムは、私にとって軽いわ」

「…っ! …だったらどうするつもりかにやー? …時間はわたくしたちに有利に働くよ? …ワルプルギスの夜は近いもん」

「…あなたはイブの元になった魔法少女をどう思ってるの?」

「そんなの知らない。たまたま見つけた半魔女だよー? …ラッキー! …っくらいかにやー」

「あくまで、覚えていないのね?」

「…?」

「そう…:…なら…:…いったい元凶は…:」

膠着状態に陥った両者であったが、そこに割り込む白い影——キユウベえ。一触即発の空気をもせず、呑気な声をあげる。彼の

命は個体でありながら群体でもあるため、たとえ殺されたとしても大した意味はない。そもそも感情がないため、死への恐怖も同様だ。

「——知っているかい？ ほむら。人の記憶が改竄される場合、主に二つのパターンがあるんだ」

「…？ どういうこと？」

「魔力的、物理的な手段が一つ。これは大抵の場合において取り戻せるものであり、痕跡も残りやすいんだ」

「…？」

「もう一つは——『因果の消滅』。これは起きた時点で、対象が歴史から抹消される。これは僕たちにも観測不可能で、あらゆる人や物が対象を『居なかつた』ことにするんだ。君たちの話を聞く限り、いま起きている現象はこれに近いように思う。なかなか起こり得ない事象だし、僕たちにとつても興味深い……真相を解明したいなら、協力したっていい——」

珍しく興奮したようなキュウベえの口調に、また何か利用されるのではないかと疑うほむらであつたが——後方から聞こえてきた、掠れた声に思わず振り向く。そこには地面に膝をつき、崩れ落ちたいろはの姿があつた。

「嘘……そんなの嘘だよ……だつたら——そんな……！」

「…いろは？ どうしたの？」

彼女が神浜へ来た理由は、消えた妹を探すためだ。そしてそれ以外の行方不明というわけではなく、自分一人の記憶だけにある、『いた筈の妹』を探してのことだつた。

同じ部屋の机が消えた。椅子が消えた。両親の記憶からも、愛する妹の記憶が消えた。まるで初めからいなかったかのように、妹の存在が消えた——それでもただ一人、いろはだけが、いろはの記憶だけが彼女の存在を訴えていた。

灯花とねむ、そして妹であるういが楽しくお喋りしている記憶があつた。やちよが追う『うわさ』はどこかで聞いたことのあるものばかりで、それは三人が楽しく妄想していた空想の物語だつた。マジウスと戦うにつれて思い出していく記憶。

けれど灯花とねむもやはり何一つ覚えてはおらず——そして。それがいま全て繋がったのだ。灯花とねむが三人で魔法少女になったというなら、残りはいいしか有り得ない。それほどに彼女たちの絆は強かった。そしてそれが意味するのは——

「うい……なの……？」

——蛾のような化け物が、大切な妹であるという事実には他ならなかった。

## ドツペル・ヴオミット

いろはの絶望に沈んだ声を耳にして、状況を理解している面々が沈痛な面持ちで顔を伏せる。誰よりも、何よりも大切な妹——単身神浜へ来てまで探し求めた宝物。それが魔女どころか、それよりもずっと悲惨なものに成り果てていたのだ。いろはの張り裂けそうな心は、優しいチームメイトたちだからこそ理解でき、それゆえに声をかけられずにいた。

——しかしそこは空気を読めないほむらである。気絶したままのねむを盾に収納し、つかつかとイブへと近付いた。そして再度盾のギミックを発動した次の瞬間、彼女の手にはドリルが握られていた。

手で持てるサイズにありながら、軽々と岩を砕く現代技術の粋——  
「打撃数2450」 「ストローク45」 「ホース内径19」 「空気消費量1.6」 「ピストン径54」。黄色のヘルムを被り、安全のために『ヨシ！』と指差し確認をしながら、ほむらはイブへと突貫した。  
「まま、まつ、ちよまつ——待ってくださあーい!!」  
「…どうしたの?」

「暁美さんがどうしちゃったんですか!？」

「見ての通りよ。アリナの言葉が確かなら、あなたの妹——『環うい』は、体そのものが変質したわけじゃない。体を覆う繭のように、イブが成長していっただけでしょう? なら掘り進めていけば見つかる筈よ」

「そ、そんな物理的な手段でいけるんですか?」

「わからないけど…私はちっぽけな魔力なんかより、このドリルを信じたい」

「魔法少女なのに!？」

スパアン! と自分の太ももにツツコミをいれるいろは。どこか違う次元の彼女が乗り移ったかのように、空へと吠える。そしておもむろに走り出すと、ほむらの腰へ見事なタックルをかました。

「ういを削らないでえー!!」

「…ならどうするつもり?」

「そ、それは…」

「時間がないの。ワルプルギスの夜とイブ……両方を相手取る事態だけは避けたいわ。既に魔法少女としての肉体を失っている——もしくは中にまだ居る。どちらにせよ、このドリルが解決するでしょう？」

前者であれば、それは『嫌な役割』を引き受けるということだ。姉が妹“だった”ものに手をかけるよりは、まだ救いがあるだろう。冷酷な表情で、優しいナイフを突き付けるほむら。残酷な思い遣りを見せる彼女の様子に、いろははぐつと喉をつまらせた。しかしそんな二人を見て、蚊帳の外に置かれていた灯火が叫ぶ。

「にゃー！ わたくしを無視するなー！」

「…はあ。いい加減、本当に鬱陶しいわ。これ以上、邪魔をするのなら——もう容赦しない」

「ふうんだ！ わたくしだって、あなたの能力にあたりはついてるもん！ 時間停止……あるいは滞留！ なら対策はどうとでもなる——けど…」

「…けど？」

「アリナの被膜にキュウベえが入り込んだ時点で、わたくしたちの計画は破綻しかけてる……なら今は、環いろはの言葉が真実なのか確かめたい…」

「灯火ちゃん……！」

「…勘違いしないでほしいにゃー。お題目とはいえ、わたくしたちの計画は確かに魔法少女の救済だったもん。それを邪魔したあなたたちは、救いを望んだ羽根たちの想いを殺したんだよ？」

「詭弁ね。他人の財布を掠め取ろうとした犯罪者を止めただけでしよう？ 貧しくたって、苦しむたって、それは願いを叶えた私たちが負うべきもの。たとえ騙されてそうなったからって、自分が騙す側になる言い訳に——使っていい筈がないわ」

「…」

少しのあいだ睨み合ったあと、灯火はほむらから目をそらした。まっすぐな瞳が、彼女の記憶野を刺激する。常人よりも遥かに優れた



脳を持つ彼女は、『現状』がしかと理解できていた。いろはが彼女たちに訴え続けてきた『偽りの記憶』は、キュウベエの言葉を加味すれば完全に整合性がとれてしまうのだ。どことなく覚えていた違和感にも、それで答えが出る。

それでも灯火は、唇を噛みしめた。魔法少女は救われなければならないのだ。魔法少女の救済——まずそこがありきで、だからこそ自分は魔法少女になったのだから……と、そこまで考えたところで彼女は己の思考の矛盾に気付く。救済は結果的にそうなるだけで、自分は宇宙の真理を理解するために魔法少女になったのではなかっただろうか、と。

しかしなぜそのような回りくどい方法を選んだのか——答えは出ない。真理を知りたいだけならば、もつと直接的な願いはいくらでもある。

…ならばその答えこそが、失われた記憶に存在するのだろうか。そう灯火は自問自答し、イブを見上げた。いつの間にか足場が生まれ、養生シートまで張られている。盾の中にはホームセンターでも広がっているのだろうか、彼女は冷や汗を流した。

「みんな！ ドリルは持ったわね！」

「はい！」

「…本当に大丈夫なの？ いろは」

「…はい。これは私が、私がやらなくちゃダメなんです…！」

そして足場のあちこちに、ほむらからドリルを配られた魔法少女たちが陣取っていた。いくらイブが覚醒していないとはいえ、体中を掘削されて大人しくしている筈もないだろう。となれば、重要なのは時間だ。いかに短時間でイブの体を掘り尽くすか。

あからさまに弱点と主張している胸の宝石に三人、次に可能性の高い頭に二人、下腹部に二人、そしてイブの拘束を担当する三人。残りは何かあった時のための控えだ。

「ううん……しまった、気絶して……ええええ……！」

一方、盾から解放され目を覚ましたねむは、ぼやけた視界に入った意味不明の状況に唸り声を上げた。イブの周囲には建築現場のよう

な骨組みが張り巡らされ、そしてイブ本体はというと、リボンやら樹木やら赤い鎖のようなものやらで拘束されているのだ。加えてその周りにドリルを持った魔法少女たちとくれば、理解しろと言う方が無茶だろう。

目を白黒させている彼女に灯火が軽く説明をすると、ようやく得心がいったのか、ねむはこくりと頷いた。彼女がちらりと顔を横に向けると、そこには静観しているキュウベえが目に入る。傍目にはただ傍観しているだけに見えるが、しかしそんな筈はないだろうとねむは断じた。

地球の文明では理解できない技術で状況を精査し、把握し、そして他の端末と同期している。そこに疑いの余地はなく、それゆえに計画が破綻した可能性も劇的に高まった。『マギウス』の計画は、もとよりキュウベえへの情報封鎖が大前提なのだ。

彼らがマギウスと同じ情報や同じ手札を持ってしまったなら、そこで勝負は終了だ。知識も技術も比べ物にならない相手と同じ土俵に上がるには、勝負が始まる前に終わらせておかなければならなかった。だからこそ、キュウベえすら締め出せるアリナの被膜は必要不可欠であったのだ。

その前提が覆われてしまったならば、優位は崩れ、交渉の余地は生まれない。全てにおいて自分たちに劣る者からの、技術提携染み交渉など受け入れる理由はないだろう。そもそもキュウベえから奪った能力こそが計画の根幹にあるのだから、彼らの方がよほど使いこなせるだろう。

「…因果の抹消による記憶の書き換えか……本当にそんなことがあるのかな？ あるとすればどんな手段なのか——興味深いね」

「うん……」

「…灯火？」

イブの胸前に立つほむらを注視する灯火。そしてその横に立ついろはも——そのどちらもが、彼女の思考にさざなみを起こす。イブの中にいるかもしれない魔法少女……記憶に存在しない筈の少女の姿が、ふと脳裏によぎった。しかしそんな灯火の葛藤をよそに、事態は

進んでいく。

「せー……のー！」

——都合七本のドリルが、イブを貫いた。



——世界とは、無数に存在するものである。平行世界、並行世界、あるいは現在、過去、未来……しかしその全てに共通するものが『法則』というものだ。世界が世界として成り立つ、根本の事象。

いつかどこかで始まった『円環の理』という法則は、“始まった”時点で物質の軌<sup>くびき</sup>を外れ概念へと至り、その時間軸よりも過去に“存在していた”という矛盾を抱えて生まれた。

そしてその矛盾が許されるのは、ありとあらゆる物事に対し『法則』が優先されるからに他ならない。『円環の理』とは世界の一部でもあり、同時に世界そのものでもあるのだ。

通常、法則に確固たる意思など存在しないが——『円環の理』は世界の法則として唯一、例外的な存在として成り立つ。元はただ一人の少女であった『円環の理』は、人間としての在り方から外れてなお“人間”としての自意識が存在していた。

それは『円環の理』という存在が、彼女だけで構成されていないことに起因する。彼女が統括し、そのものとして流れる法則は『魔法少女の救済』だ。穢れを放ち、魔女へとなり果てる筈の魔法少女を導く。

——導くというからには行き先が存在し、そしてそれもまた『円環の理』である。導かれた魔法少女は『円環の理』を構成する一部となり、それが意味するところは——この法則が『鹿目まどか』であると同時に、過去現在未来全ての『魔法少女』でもあるという事実だ。

概念でありながら我を持ち、個としてありながら全でもあり、全てに平等である筈の法則でありながら——誰か一人を特別に想う『世界』。

いくつもの世界に共通して存在する筈の『円環の理』は、しかしその法則が作用していない世界があることに気付く。それはとても儂く臆気で、直接触れてしまえば壊れてしまいそうな世界だった。

法則は、法を則すことが存在意義である。世界に作用していないならば原因を調査し、可能であれば導かなければならない。しかし触れれば壊れそうなその世界に、大きな影響は毒になる——故に『円環の理』は、その力のほんの一部だけを送り込んだ。

それが——』。



『美樹さやか』——見滝原中学校二年生。身長は百六十センチ弱と平均よりはやや高く、体重も少々平均を上回る。バスト、ヒップも十四才にしてはボリュームのある方だが、腰回りと胴回りもそれは同様である。太っているかと言えばそうではなく、痩せているかと言えばそれはないと否定できるだろう。結論としては、少々肉付きの良い女子中学生といった評価になる。

そしてそんな少女の日常を付け回す、怪しい少女が一人……見滝原を徘徊していた。頭から茶色の紙袋を被り、目と口の部分にだけ穴を開けた——有り体に言えば不審者そのものであった。ハロウィンであればまだ理解できなくもない風体ではあったが、もちろんカレンダーはその日を示していない。

それでもこの不審者が通報されないのは、性別が女性であり、年齢が見るからに中学生ほどだからだろう。身長は百六十センチ弱、少々肉付きの良い女子中学生である。

彼女は、美樹さやかという少女の日常を折に触れて観察していた。それは使命と言うよりも興味の部分が強かったが——しかし無意味という訳でもなかった。およそ半月と少しといったところだろうか……彼女のストーキングを一部抜粋すると、このような感じである。

——電信柱の陰から、こっそり美樹さやかを覗き見る不審者。その視線の先には、ストーキング対象ともう一人……長い黒髪の少女がいた。下校中の買い食いだろうか、クレープ屋で注文をしている様子だろうか見える。それぞれ別々の商品を頼んだ二人は、ベンチに座って談笑していた。

人によつては『ガサツ』と評される美樹さやかという少女は、食べる方も淑やかとは言いがたい。大口をあけて齧り付くほどに乙女を捨ててはいないが、美味しそうにパクつく姿は上品とは言えないだろう。口の周りにクリームが付いたことにも気付かず——隣の少女がクスリと笑いながらそれをすくい取り、そのまま口に運んだことで、ようやく気付く有り様だ。笑われたことに対してか、それとも行動そのものに対してか……頬を染める青髪の少女。そんな二人のやり取りを見て、不審者は——

「げふうっ!!」

——血を吐いた。紙袋が赤に染まり、彼女の視界も赤に染まる。地面をゴロゴロと転がる姿は、まるでいま見たものを認められないと駄々をこねているようにも見えた。

——観光用に備え付けられた望遠鏡で、遙か先にある景色を覗き見る不審者。そのレンズには、シヨッピングにいそしむ二人の少女が映っていた。黒髪の少女が青髪の少女の髪飾りを外し、新しい飾りを

プレゼントしているようだ。付けられている間、もしもじと頬を染める少女……プレゼントをつけた自分の姿を鏡で見て、花が咲いたような笑顔を見せる。そんな二人のやり取りを見て、不審者は――

「あゝあゝあゝあゝー!!」

――血を吐きながらうつ伏せになった。望遠鏡に土下座でもしているかのような体勢で、プルプルと体を震わせる。まるでいま見たものが現実ではないと否定するかのようにも見えた。

――ゲームセンターで遊んでいる二人の少女を、ダンスゲームの筐体に隠れながら覗き見る不審者。その視線の先には、クレイニングゲームに熱中する少女たちの姿があった。交互にボタンを押しながら、アームの強度に文句をつけつつ笑い合っている二人。景品の入手にこだわっている訳ではなく、共同作業という行為そのものに楽しみを見出しているのだろう。そしてふとした瞬間、ボタンを押す二人の手が重なる。なにか熱いものに触れたかのように、ビクリと反応する青髪の少女。そんな少女を見て、もう一人が笑いをこぼす。非常に仲睦まじい様子を見せつけられ、不審者は――

「おおっふうう……」

――血を吐きながら苦悶の声をあげる。あり得ないあり得ないと地団駄を踏む様子は、横のダンスゲームのプレイヤーがドン引きするレベルだ。そもそも紙袋などかぶっている時点で、周囲に引かれるのもやむ無しだろう。地面を蹴り続ける様子は、子供の癩癩かなにかのようにも見えた。

否定したいがために観察を続ける日々を繰り返す不審者であったが、ここ数日でようやくギブアップしたのか――隠れ家のベッドの上で呆けていた。時折ゴロゴロとベッドの上を転がるのは、何かを思い返して煩悶しているのだろう。そんな彼女の姿を見て呆れたように

声をあげたのは、同じ使命をもつ同僚だ。

「いい加減に受け入れるのです。同じであって同じでない……わかっている筈なのです」

「ううう……でもさあ……」

「母親のために願ったなんて、こつちからしたらあり得ないのです……なら別人って考えた方が絶対にいいのです」

「うー……」

「それより、ようやく動き始めたっぽいのですよ。そろそろ仕事しないと、怒られるのです」

「ずっとチーズ生活してたあんたが言うか……」

「英気を養っていたのです」

液体のようにベッドからズルリと這い出し、準備を整える少女。その横に立つのは、少女よりも更に幼い童女であった。どちらもやる気があまりなさそうではあったが——やはり人の形を取れども『理』。一つ頷きあつた彼女たちは、真剣な表情で隠れ家を後にした。